

南京戦史資料集II

財団法人 偕行社

目次

資料解説	1
「上海・南京 見た、撮った」(元毎日聞写真記者・佐藤振壽撮影)	1
松井石根大将陣中日記	4
上海派遣軍司令官親補・出征(八月十五日～二十日)	13
上海上陸戦闘(八月二十二日～二十四日)	13
軍司令部上陸(九月九日～十一日)	35
大場鎮攻撃(十月二十一日～二十六日)	93
蘇州河の戦闘(十月二十九日～十一月三日)	102
第十軍の杭州湾上陸(十一月五日～六日)	109
上海の閉鎖完成(十一月九日)	112
湖東会戦の終結(十一月二十日)	123
南京攻略戦(十二月一日～十三日)	133
南京入城式・慰靈祭(十二月十七日～十八日)	142
帰国(十三年二月十日～二十一日)	171
松井石根大将「支那事变日誌抜粋」	183
陸軍大将畑俊六日誌〈要約〉	189
杉山書簡(杉山陸軍大臣から松井大将宛書簡)	191
松井指揮官・山本實彦対談(雑誌『改造』昭和十三年三月号)	197
河邊虎四郎少将回想応答録〈抜粋〉(昭和十五年 参謀本部作製)	201
对支那中央政權方策(昭和十二年十一月 参謀本部第一課)	227

上村利道日記（上海派遣軍參謀副長・歩兵大佐）	昭12・8	15	229
山田梅二日記（歩兵第百三旅団長・陸軍少將）	昭12・9	9	283
両角業作手記（歩兵第六十五聯隊長・歩兵大佐）	昭12・11	21	339
荒海清衛日記（歩兵第六十五聯隊第一大隊本部・上等兵）	昭12・11	21	342
大寺隆日記（歩兵第六十五聯隊第七中隊・上等兵）	昭12・11	21	347
菅原茂俊日記（歩兵第三十六聯隊乙副官・歩兵少尉）	昭12・9	10	353
歩兵第三十六聯隊第十二中隊「陣中日誌」	昭12・12	8	378
福元統日記（歩兵第四十五聯隊第十一中隊・上等兵）	昭12・12	10	385
歩兵第四十五聯隊第二中隊「陣中日誌」	昭12・12	10	388
歩兵第四十七聯隊第二中隊「陣中日誌」	昭12・12	10	395
戦車第一中隊行動記録（概要）	昭12・12	12	404
太田壽男供述書（第二碓泊場司令部・騎兵少佐）	昭12・11	5	420
梶谷健郎日記（第二碓泊場司令部・騎兵軍曹）	昭12・12	6	428
俘虜取扱規則（明治三十七年・陸達第二十二号）	昭12・12	12	439
支那事変関係公表集（昭和十二年十二月〜十三年一月・外務省情報部）	昭12・12	12	441
大本営陸軍部・西義章中佐の報告（概要）『東京日日新聞』	昭12・12	12	460
外国に於ける新聞（外務省情報部）	昭12・12	12	467
南京・上海・杭州国防工事の構想、構築と役割（黄徳馨述）	昭12・12	12	471
南京城複廓陣地の構築と守城戦闘（程奎朗）	昭12・12	12	485
「従軍とは歩くこと」佐藤振壽手記（元毎日新聞写真記者）	昭12・12	12	495
「南京へ!! 南京へ!!」新聞匿名月評（雑誌『文藝春秋』昭和十三年一月号）	昭12・12	12	660

資料解説

『松井石根大将戦陣日記』について

本文冒頭に収録したのは、松井石根大将が上海派遣軍司令官に親補された昭和十二年八月十五日から翌昭和十三年二月二十八日帰国するまで六ヶ月半に及ぶ戦陣日記の「全文」である。

うち、八月十五日から十月三十一日にわたる上海戦間の二冊、第壹巻・第貳巻は戦後一時所在が不明であったが、原剛氏（防衛研究所戦史部部員）の熱心な捜索により平成四年八月板妻・普通科第三十四連隊資料館で発見され、上海戦から南京占領に及ぶ大将の日記の全文が初めて公開されることとなった。

『資料集Ⅰ』所収の上海派遣軍参謀長『飯沼守日記』、本『資料集Ⅱ』所収の同じく参謀副長『上村利道日記』と併せ読みたい。

従来、ややもすれば観念論に傾きがちであった「南京事件論争」に関し、上海戦から南京攻略にわたる作戦指導をめぐる論争と齟齬、戦闘の実相・将兵の戦場心理や勇怯・その死傷病、補給の実態——等々について、具体的な全像を把握するための確かな手掛かりとなるであろう。

一例を挙げよう。当時同盟通信社上海支局長であった松本重治氏の回顧録『上海時代（下）』（中公新書・昭和50年）によれば「松井大将は」南京に行かずに「すむよう」事態の和平的收拾を計られた」（217〜222ページ）と、説得力に富む会見記が昭和十二年九月十四日の出来事として述べられ、またこの記事は歴史的事実として他の著作物にも

しばしば引用されている。しかし、『松井日記』をひもとくと、その冒頭に軍司令官着任当初から「速ニ南京ヲ攻略スルノ目的ヲ以テ所要ノ兵力（約五師団）ヲ派遣シ一挙南京政府ヲ覆滅スルヲ必要トス」と杉山陸相に「意見ヲ開陳」し、事変拡大を望まぬ参謀本部石原作戰部長と鋭く対立した経緯が詳しく述べられているが、上海戦の実相は敵前上陸間もない九月中旬には、そのような戦局の将来について見通しを立てる余裕などまったくなく、十月十六日に至っても松井大将は「毫モ進展セヌ戦況ニ焦慮シ（上村参謀副長の觀察）」て「割腹」の覚悟を日記に記す（後述）有様であった。したがって「松本重治回想」は再検討の余地がある。この辺の考察については、本文『松井日記』九月十四日ならびに十月九日、六日「註」を参照されたい。

また、十月二十五日トラウトマン駐華ドイツ大使と打合せのため東京から上海に出張して来た駐日ドイツ大使館附武官オットー少将と昼食を共にし、フランス語で会話を交わしているものの（『飯沼日記』と『上村日記』の記載による。この件について『松井日記』には一行も記載なし）、いわゆる「トラウトマン工作」については、翌十三年一月十五日の記述に「独乙大使仲介運動今尚不熄、政府之二捉ハレテ逡巡」と不満を述べ、一月十六日の「国民政府ヲ今後対手トセサル旨」の近衛声明に関しては「二歩吾等ノ主張ニ近ツキタルハ疑フノ余地ナシ」と双手を挙げて賛意を表わしている。

反面、南京占領後の政權樹立工作には極めて熱心で、特に昭和十三年の日記の大半はその記事で占められている。松井構想の基本は唐紹儀の大総統担ぎ出で、二月十七日離任直前にも彼に書を認め「時局柄是非発奮 万難ヲ排シテ東亜百年ノ為メニ尽力セン事ヲ依囑」し、また「一時帰還ノ事トナレルモ誓ツテ再来シテ：東亜復興ノ大聖業ニ畢

生ノ努力ヲ各マサル積」と二月十五日、のちに中華民国維新政府内政部長となった陳群らに語っている。

『畑俊六日記』（当時、教育総監。松井大将の後を襲って二月十四日、中支那派遣軍司令官となる）二月八日の項に「松井は、元来余は作戰よりは戦後の経営の爲に出されたるものなりとの処見を述べ、中支にも北支よりも更に大なる政權を樹立し寧ろ南主北従の如き考へを有し」とあるのが、松井大将の心情を端的に物語っている（中国北部占領地域内には、すでに十二年十二月十四日、王克敏を行政委員長とする中華民国臨時政府が成立していた）。要するに松井大将の本心は、帰国したくなかったのである。

結局、念願の維新政府は、松井帰国後三月二十八日に成立するが、その直前、唐紹儀は国民党特務の手によって暗殺され、しかも苦心成立させた政權も大将の意に反し、政府の策定した「北支及び中支政權関係調整要領」により北京政權に従属することとなる。

日米間の危機として政府をあわてさせたパネー号事件についての認識は、甚だ近視眼的である。これを証する十二年大晦日の改造社社長・山本実彦との対談（雑誌『改造』昭和十三年二月号）は注目に値する。

松井軍司令官が年の明けた二月七日、上海派遣軍慰霊祭の式後、朝香宮鳩彦王以下「各隊長ヲ集メ」「南京占領後ノ軍ノ諸不始末」に「責任感ノ甚タ胸中ニ迫ルヲ覚エ」「所感ヲ披露シテ」「戒飭ヲ促」している。

これは恐らく『飯沼守日記』一月二十一日の項に現われる「在東京米大使ヨリ抗議」等、在中国外国權益に関するトラブル（不軍紀事件）対策を意味するものであろう。

この「訓示」については、松本重治同盟上海支局長が取材、電報を発しているが、「南京一番乗り報道」にはこと

のほか熱心であった日本のマスコミは一切これを無視し、上海の英国紙『ザ・ノースチャイナ・デイリーニュース』、および米国紙『ザ・チャイナ・プレス』のみが「松井將軍軍紀締めを命令」“Japanese Army Discipline to Be Tightend——General Matsui Issues Order——PESTICE TO BE CLOSELY GUARDED IN FUTURE”と題して「同盟電報」を掲載している。その詳細については『南京戦史』第七章、ならびに『資料集I』を参照されたい。

なお『ノースチャイナ・デイリーニュース』については、本資料集所収の外務省情報部の調査と日本電報通信社発行『新聞総覧』、ならびに『アジア歴史事典』にみられるように、その前身を『ノースチャイナ・ヘラルド』と称し、中国における英国資本の利害を代弁する東洋一を称した新聞であって、『上海共同租界工部局公報』も本紙に添え配布されていた。その創刊は清国の上海開港間もなく、ペルリ浦賀来航のさらに三年前にさかのぼる。

『ノースチャイナ・デイリーニュース』については、城西大学講師・片岡徹也氏ならびに上智大学図書館・真壁隆治氏のご教示を得た。御礼申し上げます。

参考までに関連文献を引用すると、一八六二年（文久二年）九月十四日に発生した生麦事件について『ノースチャイナ・ヘラルド』は、「遠い昔から現在に至るまで、血塗られた排外的法をいただいているような人間たちと政治体制に対しては、ただ高圧的な態度をとることでは西洋文明を前進させることはできない」。また「戦争が不可避ならば、それもまたよしだ。これは正義の戦いになる。残虐で背信的な国民の犯した罪悪に対するこの復讐に参加する者はだれであれ、祖国に尽くす者であり、全文明世界の是認を受けるだろう」と英国海軍の対日軍事行動を強く支持している（一八六三年五月二十三日付記事）（『日本近現代史——維新変革と近代日本』〔岩波書店〕所収・宮地正人論氏文による）。英国軍艦による鹿児島砲撃はその三ヶ月後、一八六三年八月十五日のことである。

十月十六日の『松井日記』に、突然「割腹ノ機会」という異様な文言が出て来る（前出）。

十月を迎えても、お先真つ暗な上海派遣軍司令部の実情を察する鍵として『松井大将日記』に記された「割腹」の文言について考えてみよう。

謹厳な飯沼参謀長日記によると十月十三日の記述に「軍司令官少シヤキモキシ何トカ工夫ヲト言ハルルモ目下ノ所力押しニ押しヨリ他途ナク結局根氣比へ意志ノ闘争ナリ」。十月十四日の日記には「司令官益々焦慮」とある。

上村利道参謀副長も同様に十月十三日の日記には「戦況毫モ進展セス將軍胸中聊カ悶々ノ情ヲ認ムルモ如何トモナシ難シ」。翌十四日には「戦況果シテ進展ノ見込アルヤ甚ダ疑問ニシテ軍司令官ニ焦燥ノ念ヲ起サシメアル幕僚トシテ痛嘆ニ不堪」。十五日は「此際新手ヲ打ツ要アレトモ名案更ニ浮バズ」と記す。上村大佐の人の現われか、その日記は素朴で血が通っている。

意気銷沈した上海派遣軍司令部に十月十六日、参謀本部船舶課々員・鈴木敬司³⁰期中佐が突然来着してもたらした「中央部ハ新ニ一ケ軍（三師団）ヲ編成シ 十一月初ヨリ浙江方面ニ作戦セシムル計画アリ」との朗報に、大將は、「是レ最初ヨリ予ノ希望セル作戦方針ニ応スルモノニシテ欣懐ノ至リ、予モ此分ナラモウ割腹ノ機会ナキニ至ラン乎 呵々」と急に上機嫌となる。

のちの第十軍の杭州湾上陸作戦の知らせである。

八日ののち、十月二十四日には戦況は予想外に急進展し、走馬塘クリークの敵戦線は総崩れとなるのであるが、のちの研究者は、予期に反して急に進展した年内の「南京陥落」を既定の事実とし、それから逆算して結果論的に上海戦を眺める傾向に陥りやすい。これでは上海から南京へ、半歳に近く流動したこの作戦指導の実態を把握することができないのではなからうか。

『松井大将支那事変日誌抜粹』について

これは松井大将が昭和二十年十月十九日A級戦犯容疑者に指名され、翌年三月五日に巣鴨に入所する前(病気のため入獄延期)に記したもので、いわば極東軍事裁判における訴追の対策としての覚え書である。従って史料としての価値は低い、最大の訴因と松井大将が予想した、いわゆる「南京事件」についての認識や、弁明の方向づけなどを探るには貴重な資料といえよう。

文中にはまず上海出兵、南京攻略戦の止むを得なかった事情が記され、事変は「中国に対する愛情ゆえの、膺懲というよりも四億民衆の救済として行ったもので、東亜百年の平和に貢献せんとしたもの」と主張されている。

「南京事件」は「外国権益の侵害、中国人民に対する暴行掠奪事件」と理解され、のちに問題とされたいわゆる「虐殺」についての認識は全くない。

最大の問題は「外国権益侵害」であり、そして、各国軍司令官や記者とのやりとりで大きな紙幅を割いている。

次いで一般住民に対する暴行などに対してとった措置として、前記・上海派遣軍慰霊祭における「軍紀緊縮の訓示」もその一つとして強調されているが、この「抜粹」では、訓示は十二月十七日のこととされている。松井大将の記憶違いなのか、その理由は不明である。

いずれにしてもこの「抜粹」から推し量ると、松井大将にとって「数十万の大虐殺」告発は寝耳に水の驚きであつたと思われる。

『河邊虎四郎少将回想応答録』について

冒頭に「本書は竹田宮恒徳王殿下が大本宮研究班員として武力戦の見地に基く中央部の統帥に関する御研究資料として事変勃発当時参謀本部第二課々長たりし河邊虎四郎少将に就き昭和十五年七月直接聴取せられたる事項の速記録なり」と「註」が入っているが、竹田宮恒徳王は、当時参謀本部支那事変史編纂部勤務(騎兵大尉)であつた。「聴く相手が皇族だから、みんな包み隠さずホントウのことを答えたのでしょね」というのが、当時を知る陸軍中央部の関係者の回想である。『松井日記』理解のため、大きな助けとなると考え収録した。

紙数の関係で半ばを割愛したが、回想の初めに「支那事変の原因は、結局は満洲事変の延長であつて、満洲事変といふものが本当に解決が出来て居らないといふことに在ると思ひます」と。また、「さうして私は、日本が冀東政権の解消といふことに然るべく処置しなかつたと云ふことが反日、抗日意識を愈々高揚したと思ひます……「インチキ」をやつて作つたものでありますから自然に「インチキ」をやるものが集り、さうして色々悪事をやる……軍部の一部にも密貿易を許して居ると云ふ噂さへ立ち……」と、事変勃発後わずか二年の時点において支那事変の起因について率直に考察しているのが注目される。

また、陸海軍の対立に関して「両方とも自分といふことはかり考へず真に大局の要求するところに進まなければ、日本は亡びて仕舞ふといふ感じが致します」という苦渋に満ちた発言は、作戦課長の実務体験から滲み出たものであろうが、筆者は一読してギョッとさせられた。

南京戦後の「戦面不拡大」方針決定の経緯についての回想のなかで「南京あたりで変な事が出来た後でありますから其の悪い連中を帰して……」は、心の重くなる証言である。

河邊作戦課長は十一月中旬、連絡のため上海に出張しているが、飯沼参謀長以下上海派遣軍司令部の陰惨な雰囲気について、随行した井本熊男参謀の日記を「註」に引用したので、ぜひ一読ありたい。この所見は、『飯沼日記』

などには現われていない、苦惱する上海派遣軍司令部の姿を第三者の眼で見た貴重な証言である。

『上村利道日記』について

のちに陸軍省人事局長となった謹厳な飯沼守少将の日記にくらべ、参謀副長上村大佐の日記は記述が闊達で粉飾がない。読んで面白いのである。

「敵軍正ニダニト蠅ノ如シ。陣地ニツケバダニノ如ク、一掃スレバ蠅ノ如クスグ集マル」(9/6)。「天谷支隊、3Dノ状況毫モ進展セス。「松井」将軍御機嫌頗ル斜ナレドモ「飯沼」参謀長取り合ハズ」(9/11)。「本夕「朝香宮」御殿ニ第十六師団長以下「ノ」送別会食ヲ催サル。「中島今朝吾」師団長トS「佐々木到一」少将論議喧シ。S少将聊カ過ギテ宮様ノ一喝ヲ受ク。両方共負ケ嫌カ多弁カ見苦シキモノナリ。◎御しゃべりの中にしまさんけさころも着せて佐々の木も倒れず」(1/17)。

また、九月二十六日の日記に「初メテ戦場ニ到着スル部隊ノタメニ」小冊子「ヲ」印刷シテ部隊ニ渡スコトトス」と記述がある。もし、現物がどこかに存在すれば、上海戦を理解する貴重な史料である。一見したいものだ。

上村大佐はその後、東京幼年学校々長、満洲東部国境・第三軍参謀長を経て昭和十九年七月、本土決戦の重点正面たる南関東地方の防衛に任ずる第三十六軍司令官(司令部・浦和)に補せられている。

『南京・上海・杭州国防工事の構想、構築と役割』について

設計を担当した工兵学校教官・黄徳馨の回想で、ことに中国軍が多くを期待した防衛陣地「呉福線」(蘇州〜福山)と「錫澄線」(無錫〜江陰)の実態について、多くの知識を与えてくれる。実戦では著者が嘆くように「陣地は

殆ど利用されることがなく、果たすべき役割を果たさなかった」のであるが、上海派遣軍も初めこれを買いかぶり「呉福陣地セメント製ノトチカアリ。重藤支隊モ突破困難」(『上村参謀副長日記』十一月十八日)などと、重藤支隊の泣き言をそのまま記している。

『南京城復廓陣地の構築と守城戦闘』について

当時、南京警備司令部参謀・程奎朗の回想である。

読者はこの回想によって、中国側最高幹部の南京防衛の方針が当初からぐらつき、復廓陣地構築の構想が結局まともならず、時期を失して見るべき成果を収めなかったことを知るであろう。

守城戦闘の記述では、当時喧伝された「歩三六の南京城一番乗り」に対する守城側の戦闘の描写が印象的である。

外務省情報部『支那事変公表集』(第二号)(第二号) 抜粹

パネー号事件、レディーバード号事件文書のはか、「国民政府ヲ对手トセス」声明、「アリソン米領事殴打事件」文書、「南京、杭州及其他方面に於ける帝国軍隊の行動について米國政府の抗議に対する回答」を収録した。

ハル国務長官が「深甚ナル遺憾ノ意ヲ表明スル」ため往訪した齋藤大使に「喫驚ヲ禁シ得サリシ」と。また「大統領モ亦多大ノ関心ヲ示シ居レリ」と述べたコメントには、アメリカ政府の不快感と事件の重さを感じられる。

またここに収録された「アリソン米領事殴打事件」ならびに「南京、杭州及其他方面に於ける帝国軍隊の行動について米國政府の抗議」こそ、松井大将の「軍紀引締め訓示」の因由となったものであったろう。

大本営陸軍部・西義章中佐³¹の報告に関しては、原田熊雄(元老・西園寺公望の秘書)の次のような記録が残っ

ている。

(昭和十二年十二月二十七日)午後(広田)外務大臣に会ったところが、「例のアメリカ軍艦爆撃問題も全くの誤認に基づくものであったことが判明した。陸軍から調査に行った西中佐の報告が大変よかった。日本の軍人にも負傷者があり、また日本の陸軍が傍にをつたスタンダード会社の船の沈没しようとするのを援けたり、人命の救助に当たつたやうな事実とか、日の丸を陸軍の士官が振つて海軍の飛行機に報せたりしたやうな事実もあり、全く日本の誤認による過失だといふことが判つたので、アメリカも漸く故意でないことを諒解したらしい。『西園寺公と政局』第六巻・岩波書店・197〜198ページ』

のち、西大佐(当時、参謀本部謀略課長)は、ドイツへ軍事連絡飛行のためA26長距離機に搭乗、昭和十八年六月七日暁のテンガー飛行場(シンガポール)を飛び立ったままインド洋上で杳として消息を絶った。

『山田梅二日記』について

昭和十二年九月九日、九月九日、仙台教導学校長から歩兵第三百三旅団長に捕せられた山田少将の、出征から上海・南京戦を経て滌県で新年を迎えようとする大晦日までの日記を掲載した。終始教育畑を歩き、初めて野戦部隊の指揮官に任ぜられた山田少将が最初に体験したのは、十二月三十日の日記にあるように「何ント言フテモ深刻ナル印象ハ上海陣地戦ノ時」であった。

山田少将の指揮する第三百三旅団は、両角業作大佐の率いる会津若松歩兵第六十五聯隊と仙台歩兵第四百聯隊から成り、仙台第二師団が動員を担当した野砲編制の特設師団・第十三師団に属していた。

『山田日記』からは、予・後備役兵が多数を占める特設師団の性格上、馬を扱ったことのない特務兵(9/23)、召集の中・小隊長の低い指揮能力(10/13)、予・後備召集兵の不軍紀(10/5、12/24)などについての不満が読みとれるが、軍や師団長に対する批判は注目に値する。

「軍毛師団毛如何ナル陣地ナリヤ更ニ知ル所ナク、示ス所ナク、攻撃ハアクマデ野戦式ニテヤレヤレ式、何グズグズシテ居ル式ナリキ」(11/1)

第一線の実情を察せず「アセリニアセリテ」ひたすら攻撃を督促する荻洲師団長に対しては「如何ニ決死隊トテ河ハ口デハ越サレマジ」(11/13)、「如何ニアセリテモ落チザルモノハ落チヌナリ」(11/23)と、老兵を率いて、雨と泥濘、はびこるコレラと闘いつつ、周到に準備された陣地と天然の要害に拠る蒋介石直系軍との苦闘の様子が克明に記録されている。

また、国共合作以後の徹底した反日教育についての記述(12/24)は、時代の背景を窺わせる。

支隊長として参戦した南京城北方の戦闘において、しばしば問題となる幕府山付近で收容した一万四千余と称せられる捕虜の処置についての記述は甚だ簡潔である。

上元門外の学校に收容した捕虜の数「一四、七七七名」(12/14)、「皆殺セトノコトナリ」(12/15)、「相田中佐ヲ軍ニ派遣シ、捕虜ノ仕末其他ニテ打合ハセヨナサシム」(12/16)「捕虜の仕末ニテ精一杯」(12/18)、「捕虜仕末ノ為出発延期」(12/19)等の記述には苦衷のあとが認められるが、事態の全体像を把握することは困難である。

『両角業作日記』と『手記』について

山田支隊の基幹であった会津若松歩兵第六十五聯隊の聯隊長『両角業作大佐の日記』は、メモと言った方がよいかも知れぬ簡単なもので、問題の幕府山で収容した捕虜の処置については、その全体像を明らかにすることはできない。

ただ、注目すべきは「I（大隊）ハ俘虜ノ開放準備、同夜開放」（12/17）、「俘虜脱逸ノ現場視察」（12/18）の記述で「開放」を「解放」と解すれば、司令部？からの「殺せ」という指示に対して、山田支隊の指揮官たちは江岸で捕虜を解放する意図があったことになる。残念なことに『両角日記（メモ）』は、研究者・阿部輝郎氏が筆写した南京戦前後の部分しか現存せず、その原本との照合は不能の状況である。

『手記』は明らかに戦後書かれたもので（原本は阿部氏所蔵）、幕府山事件を意識しており、他の一次資料に裏付けされないと、参考資料としての価値しかない。

『荒海清衛日記』について

荒海清衛上等兵は要衛・三家村占領直後、第二次補充として十月二十四日歩兵第六十五聯隊第一大隊本部に配属された。低下した戦力を補充する兵員四百二十一名の到着を旅団長『山田梅二日記』は「心強キコトナリ」と記している。さらに江陰で三百七十名の補充があつて聯隊総員千八百六十七名（12/6）となる。

南京での記録はこれも簡略で「捕虜一万五千名位（12/14）」、「捕虜の廠舎失火、二千五百名殺す（12/16）」、「一万五千名、今日は山で。（12/17）」と、事件が二日にわたり二カ所であつたことを示すのみである。

『大寺隆日記』について

大寺隆上等兵は第四次補充として十二月十七日南京着、歩兵第六十五聯隊第七中隊に配属され、幕府山砲台下に宿営した。初めて与えられた任務が十九日の江岸での「幾百の死骸の清掃」であつた。「殺した捕虜は約二万、揚子江岸に二ヶ所に山のように重なつて居るそうだ」（12/18）の記述が注目されるが、伝聞にとどまっている。

幕府山付近での捕虜処分について—その総合的観察

幕府山付近での捕虜処分については、『資料集I』に栗原利一氏の証言とスケッチを収録したが、本資料集所収の日記と合わせてもその全体像を描くことは困難である。

・その理由

- 1 戦闘詳報、陣中日誌など公的記録が発見されていないので、捕虜処分を目的として連行したものか、解放するため連行中の突発事故であるのか断定することができない。
- 2 連行前に、捕虜に「解放する」と告げたことは、関係者の戦後の手記や証言などからも事実と思われる。しかし、それが方便であつたのか、真意であつたのか、確かめる方法はない。下級将校や下士官兵の日記には、ややもすれば噂や憶測をそのまま記録する傾向があり、逆に上級将校は、軍司令部からの指示が「処分」であつたと仮定した場合、命令違反の「解放」措置をそのまま記録することには憚りがあると思われる。第一次資料であつても、南京戦後六十年に近い現在、その真偽を断ずることは不可能に近いといわねばなるまい。
- 3 十六、十七の二日にわたり二カ所で事件のあつたことが察せられるが、山田、両角日記、さらに栗原利一証言、

いずれにも、それを窺わせる記述はない。三者ともこれに触れていない理由は何であったのか。

4 当初の捕虜の数は一万四千乃至一万五千と記されている。我に十倍近い捕虜を収容、数日間監視し、数キロにわたって連行し、そのことごとくを射殺することなど果たして可能であったのか。脱出した数がかかなり多かったことは飯沼・上村両日記からも察せられるが、収容数、処分数などの実数は依然として不明である。また、兵士たちが死体処理に苦勞したことは記されているが、二千に足らぬ少数の聯隊員が、いわゆる「大虐殺」のために忙殺されている様子は窺えない。かえって交代で十七日の入城式や十八日の慰霊祭にも参加し、一部は南京見物もしているその意味するところは何であったのか、本資料でそれを明らかにすることはできない。

第二碇泊場司令部関連記録

『太田供述書』について

この『供述書』は、在南京・第二碇泊場司令部々員太田壽男³⁰少佐が戦後、撫順戦犯管理所に戦犯として収監（当時中佐）されていた際に提出した一九五四（昭和二十九）年八月三日付の罪行供述書であるが、これは日本側関係者による南京における死体大量処理の唯一の証言であって、原文は昭和六十年南京江東門に開設された「侵華日軍大屠殺遭難同胞記念館」に保存されており、南京大屠殺史料編集委員会著『侵華日軍南京大屠殺史稿』江蘇古籍出版社（一九八七年）、軍事科学院外国軍事研究部編『日本侵略軍在中国の暴行』解放军出版社（一九八六年）などに引用されている。

供述書の要旨は、次の通りである。

- ① 太田少佐は昭和十二年十二月十五日期、許甫鎮より貨物船で出発し、十五日夕刻に南京下関に到着した。司令部は十一日常熟発南京に向かい、運河を小舟で航行して十三日に陥落直後の下関に到着した。
- ② 日本軍は捕虜及び住民約十五万人を殺害し、同僚の安達由巳²⁶少佐が十二月十四日、十五日の両日にわたり約六万五千体の死体を揚子江に投入した。
- ③ 太田少佐は命により、十六日から十八日まで安達少佐の死体処理作業に協力し、南京西部地区で約一万九千体の死体を処理した。安達少佐は東部地区で二万六千体を処理した。
- ④ 碇泊場司令部が担当処理した死体総数は約十万である。小舟約三十隻、輸送隊約八百人（第十一軍より配属）、トラック約十両を使用して、死体の大部分は下関埠頭及びその下流から揚子江に投入し、一部は浦口東方で焼却・埋葬した。

*

当時、第二碇泊場司令部は司令官・鈴木義三朗²³歩兵中佐、部員・安達由巳²⁶兵少佐、太田壽男騎兵少佐以下、少尉十三名、軍曹四名、伍長三十一名、衛生兵六名の総員五十七名であって、ほかに水上輸卒隊（隊長工兵少尉以下約百二十名）、クーリー約二百名（下士官が指揮）。使用船として司令部の連絡用に高速艇二隻、小蒸気と称する曳船、台湾漁船（大三十トン、小五トントくらい）約八十隻を有していた。

第二碇泊場司令部は中支那碇泊場監部（碇泊場監・田尻昌次¹⁸少将、在上海）の指揮を受け、これらの戦地・軍事船舶輸送機関は第一船舶輸送司令官（松田卷平¹⁵中将、在宇品）の指揮下にあった。

太田少佐は明治三十年生、愛媛の人。大正七年少尉任官。盛岡騎兵第二十四聯隊出身。昭和八年姫路騎兵第十聯隊中隊長の後、善通寺騎兵第十一聯隊に勤務中、昭和十二年十月に新設の第二碇泊場司令部々員を命ぜられた。

南京戦後、十六年十月に第四十師団騎兵隊長（通称「鯨兵团」、華中）、十八年三月に樺太混成旅団（後、第八十八師団）高級副官となる。終戦時、樺太豊原でソ連に抑留され、後に中国の撫順戦犯管理所に移送された。三十一年帰国、昭和三十九年五月十五日に死去した。

『梶谷日記』について

大阪騎兵第四聯隊出身の梶谷健郎軍曹の、召集された昭和十二年十一月五日から翌十三年十月七日までの日記である。本書では昭和十二年末までの分を掲載した。

日記によれば、梶谷軍曹は、昭和十二年十一月七日に大阪歩兵第三十七聯隊に召集され、第二碇泊場司令部に配属、安達少佐の直属の部下であった。十一月十三日門司を出港、二十日許甫鎮に上陸し、二十三日には常熟に移動した。十二月七日無錫支部設立のため午前九時半出発、午後八時水路無錫に前進した。

十二日安達少佐とともに先遣隊として無錫を出発、江陰、丹陽、湯水鎮を経て陸路十四日に南京に到着。鈴木司令官以下主力も夕刻南京に到着した。

十五日は海軍とともに下関付近の掃蕩に従事し、十六日午前には鈴木司令官、安達少佐と港内巡視、十七日は朝九時半から入城式に参列し、その後南京碇泊場の看板を掲げた。十九日からは碇泊場の業務が開始され、揚搭作業は多忙を極めた。二十五日になって常熟から太田少佐以下が南京に到着した。

二十五日には「梶谷軍曹は兵十、苦力四十をもって港灣の死体除去を実施すべし。これに要する機舟及び必要諸具は工務課に連絡し速やかに調達すべし。細部に関しては副官より指示せしむ」との命令を受け、二十六日から機舟（通称ヤンマー、船体後部にディーゼル機関をつけたもの）五隻に、おのおの兵二とクリーを分乗させ、急造のトビ

グチで死体を沖に流した。

死体処理数は約一千体であって、作業は翌々日の正午頃までかかった。（『騎兵第四聯隊史』参照）

梶谷氏は平成二年七月二十九日、死去した。享年八十四歳。

『太田供述書』と『梶谷日記』との相違点

太田少佐の供述書と梶谷軍曹の日記との相違点は次の通りである。

- ① 『太田供述書』によれば、碇泊場司令部は十二月十三日陥落直後の南京に小舟で到着したとあるが、『梶谷日記』によれば、鈴木司令官以下本隊は十四日夕刻、陸路南京に到着した。南京攻略の先頭部隊である歩三三の下関埠頭突入は十三日午後三時半頃であって、その時刻には埠頭周辺にはまだ多数の中国兵が残っていた。
- ② 『供述書』によれば太田少佐は十五日に許甫鎮から貨物船で南京に到着したとあるが、『梶谷日記』によれば太田少佐は常熟から二十五日に到着している。海軍第十一戦隊の「保津」、「勢多」が揚子江の烏龍山閉塞線を強行突破して下関に突入したのは十三日午後三時四十分であった。その後、烏龍山の閉塞線が排除され軍艦以外の貨物船が南京まで運行し始めたのは十八日以降のこととなる。
- ③ 『梶谷日記』によれば、安達少佐は梶谷軍曹とともに無錫から十四日午後南京に到着しているので、供述書のように十四日～十五日に安達少佐が六万五千もの死体処理を行うことは不可能に近い。また、『梶谷日記』に記されているように、南京到着後は当然、まず本然の輸送業務に着手するはずである。
- ④ 太田、安達の両少佐は十六日から十八日まで死体処理作業に従ったというが、十七日には入城式、十八日は方面軍慰霊祭が行われ、佐官級の将校は当然儀式に参列していなければならない。

⑤『梶谷日記』によれば、碇泊場司令部は二十六日から三日間死体処理を実施しているが、指揮官は梶谷軍曹であって太田、安達少佐ではない。従事したのは兵十、クーリー四十であって、供述書による八百名もの大人数ではない。また、当時中支那方面軍隷下に十一軍なるものは存在しない。

『菅原日記』と歩三六『第十二中隊陣中日誌』について

『菅原日記』及び『第十二中隊陣中日誌』は、当時第十一中隊長であった坂武徳³⁹期氏が収集した歩三六関係資料によるものである。

菅原茂俊少尉は金沢第九師団歩兵第三十六聯隊乙副官として九月三十日、上海に上陸した。その苦戦は日記に生々しいが、僧職にあった菅原少尉は人間の生死が紙一重で分かれるはかなさを淡々と綴っている。新聞記者として例外ではなく、無錫では朝日、読売の従軍記者が戦死している。

聯隊は南京への追撃に移り、強行軍の後、十二月八日に淳化鎮を抜くと、一拳に光華門前に殺到し、十日、伊藤少佐の率いる第一大隊は門内に突入、南京城一番乗りを果たしたものの門内で難戦し、大隊長伊藤少佐は戦死する。

中国側資料によれば、光華門の攻防と並行して通済門前でも激しい戦闘があり、多くの日本兵を殲滅したと記録されているが、菅原日記及び第十二中隊陣中日誌によれば、そのような戦闘が行われた形跡はない。ことに第十二中隊の属する第三大隊は防空学校にあって通済門の監視に当たっており、中国側の記録は誤りであろう。

南京占領後、歩三六は入城式、慰霊祭に参加し、交代に将校引率の下に南京市内を見学するなど、平穩に駐留している。

〔参考〕 歩三六の損耗を示す数字

『第十二中隊陣中日誌』を見ると、南京戦の時になっても上海戦での損耗が回復していないことが分かる。すなわち、十二月九日より十三日までの中隊の総員は僅か七十一名で、出陣時のおよそ三分の一である。

坂大尉の第十一中隊は上海上陸時の十月一日の総数一九四名が、蘇州河渡河戦に臨む十一月二日には九十六名（うち第一次補充員二十八名。坂中隊長も負傷、将校は小隊長の少尉一人）になり、渡河戦終了時の十一月十二日には百十五名（うち第一、二次補充員八十八名）、上陸時からの中隊員は僅か二十七名になっている。特に十一月三日は、一日で三十名の死傷者を出す激戦であった。

歩兵第三十六聯隊の上海及び南京戦における戦死傷者数

	戦死	戦傷	計
上海付近の戦闘	六九六	一七八四	二四八〇
南京攻略戦	二五七	五四六	八〇三
計	九五三	一三三〇	三二八二

『福元続日記』について

福元上等兵の所属した歩兵第四十五聯隊（鹿兒島）の戦闘については『南京戦史』本文を、特に第十一中隊については「第十一中隊の新河鎮の激戦」を参照されたい。

江東門地区は、現在「侵華日軍南京大屠殺遇難同胞紀念館」が建てられている場所で、南京西郊でのいわゆる「虐殺」の中心地とされているが、『福元日記』及び『歩四五・第二中隊陣中日誌』を見る限り、十四日以後、蕪湖へ出発の二十二日までの江東門・上新河地区は平穩で、福元日記によれば、十七日は午前十時より道路清掃のち入城式

に参加したという。

『歩四七・第二中隊陣中日誌』について

南京城南側城壁の一番乗りは、歩四七・第三中隊（三明隊）によって十二月十二日午後十二時二十分になされた。この日記の読み所はこれを掩護し、続いて城壁に登って苦闘した十二日の記述であろう。

南京城一番乗りは、十日の光華門への歩三六（脇坂部隊）とされているが、中国軍の反撃によって戦闘が膠着状態となっている間に、雨花台を攻略した第六師団は十二日、野戦重砲による城壁破壊を待たず、歩四七は竹梯子によって垂直壁を登って日章旗を掲げ、歩二三は水西門方面を制圧した。この方面を守備していた中国軍第八八師の新兵と救援の第一五四師は恐慌状態に陥り、師団長を先頭に同日午後退却を始め、これが端緒となり、ついに南京衛戍軍は崩壊した。

『歩四五・第二中隊陣中日誌』について

第二中隊は十二月十日以降師団予備隊となったため、戦闘には直接参加していない。十三日以降、聯隊主力に復帰したが、十四日に下関南側で軍馬十数頭を捕獲したほかは何事もない記述である。

十四日夜から二十二日まで聯隊本部と共に上河鎮に宿営しているが、十五日、付近の死体を清掃しよう会報があり、十六日、集成一小隊をもって宿宮地南方部落を掃蕩したが別に異常はなく、その他連日の中隊の勤務状況や人事を見ても平穩である。

『福元日記』と合わせ読むと、この南京城西側地区が中国側が主張するような惨禍に見舞われた場所とは信じ兼ねる。

『佐藤振壽手記と撮影写真』ならびに『文藝春秋』掲載「新聞匿名月評」について

東京日日新聞の従軍記者・佐藤振壽写真部員は手記の中で向井・野田両少尉の写真を撮影した体験を述べているが、このいわゆる「百人斬り競争事件」について中国側の軍事法廷は、「新聞記事」を唯一の「基礎」、すなわち証拠として「被告らがこうした殺人競争をした事実がないのであれば、日本の重要新聞が大きな紙面を割いて虚構を宣伝する道理はない」と死刑判決を下していることに注目したい（『侵華日軍南京大屠殺史稿』）。

すなわち、浅海特派員打電の記事が「確実な証拠」とされ、写真は「事実の証明を補強するもの」とされているが、佐藤写真部員が指摘しているように、当時国民の戦意昂揚のため事実を甚だしく誇張した取材競争が横行したことは本資料集所収『文藝春秋』昭和十三年一月号の「南京へー南京へー」と題する「新聞匿名月評」にも明らかである。

「南京一番乗り競争記事と、そして早手回しの内地の提灯行列騒ぎ」も、当事者の参戦者に尋ねると「一番乗りなど、あまり念頭になく、南京まで行けば内地に帰れる」との噂が流れ、兵士はそれを唯一の楽しみに行っていたと述懐する人が多い。この大騒ぎは、『匿名月評』の筆者RRK生も指摘するように販売競争を含む「新聞主導」の面が強く認められる。収録した「朝日」「東京日日」「読売」紙面を参照されたい。

なお、佐藤写真部員が十二月十三日南京に入って第一夜を過ごした励志社は、正式名称を「黄埔同学会励志社」と称して一九二九年前後創立され、黄埔軍官学校と中央軍官学校の卒業生をその会員とした。蒋介石が社長、黄埔霖が総幹事であった。『周佛海日記』昭和十二年八月八日（日曜日）の記事中「十二時に励志社での蔣先生の宴に出席

し、岳軍、布雷、天翼と（日中戦争勃発後の）大本宮の組織状況について話す」とある。

なお、佐藤振壽氏の写真撮影にまつわる諸事情については、「手記」のなかに詳述されているので繰り返さない。

『対支那中央政権方策』について

現中央政権が一地方政権に顛落する以前に、すなわち取り返しのつかぬ「南京占領」という事態を迎える以前に、その「面子」を保って講和に持ち込みたい。なんとしても「長期持久戦」は避けたいとする——これは当時の参謀本部作戦課の考えを知るための重要な文書で、昭和十二年十一月二十一日に作成されている。現地軍の表面華々しい戦果報道の陰に、参謀本部作戦課は深刻な危機感を抱いていたのである。

だが、翌二十二日には、中支那方面軍からは「事変解決ヲ速カナラシムル爲南京ヲ攻略スルヲ要ス」との意見具申が到着、二十八日にはそれが「決裁」される。

「それでは日中戦争の積極的な推進主体は何かというと、それは近衛内閣自体に求められる。近衛内閣は一貫して戦果の獲得に積極的で、戦局の拡大につれ戦争収拾に関する参謀本部との対立は微妙なものがあつた」（臼井勝美氏みずす書房『現代史資料・日中戦争2』解説より）

この対立を如実に示す興味あるペン書きの文書が近衛家に残っている。十三年一月初旬、トラウトマン工作打切り直前に書かれたものと思われる（筆者不明）。

「講和問題に関する所信」

一、政府としては従来屢々声明せる通り今次事変を契機として東洋永遠の平和の基盤を確立すべきものとし出来るだけ禍乱の根源を将来に残さざる様徹底なる解決を期し其為には相当長期に亘る対戦も敢て辞せざる覚悟と用意とをなし居れり、速に局を結ぶことは元より望ましき事なれども中途半端の解決をなして局を結び一兩年を出でずして再今回の事変を繰り返すが如きことありては昨年来の大犠牲を全く無意義に終らしむるものにて姑息なる妥協は極力排すべきものと考へ居れり。

一、今や南京陥落し蒋介石政権も昨今は頗る窮地に立つに至りし如くなるも未だ彼の權威全く地に墜ちたりと断ず可らず少しく手を緩めれば再頹勢を挽回し来るや明なり謂はゞもう一押しと云ふ所なりかゝる状態にある際我より進んで条件を提示し講和を促すことは我に重大なる弱点なき限り軽々になすべきことでなく却てそれが為に彼の侮を受けて彼の戦意を復活せしめ大害を将来に招く恐ありと考へらるる故に政府側としては独逸大使を通じての今回の交渉に対しては必ずしも中心より賛成せるに非ず只軍部側の切なる希望もあり且今回提示する要求は我最小限度の要求なりとの了解の下に賛成したるなり従てもし支那が此要求を全面的に承諾せざる場合には此交渉は当然打ち切るべきものと了解し居れり。

一、然るに最近に至り軍部側にありては支那が此要求の一部修正を申込み来る場合には更に多少の譲歩をなしても何とか此際講和を成立せしめんと希望せらるる由を聞く、元來我より進んで講和条件を提示することさへ如何かと思はるゝに被の一部拒絶に遭つて再び譲歩の色を見するが如きことありては益々彼の乗ずる所となるべきや明なり政府側としては軍部がかくの如き拙策を採りてまで講和を急がるゝ真意を了解するに苦しむ次第なり。

一、こゝに於て政府側としては軍部がかくの如く講和を急がるゝには何等かそこに深き事情が存するに非ずやと推測せざるを得ず、然るに今日迄の陸軍大臣の説明だけにては今日講和の急がざる可らざる理由明白ならず、もし真に此際講和を急がざる可らざる事情存するならば陸軍大臣は率直明白に之を他の閣僚に説明すべきものと信ず、閣僚も其説明により真に能く事情を了解するに至らばいかなる譲歩も之を忍び局を結ぶことに全力を注ぐことゝ成るべし、恐らく之に對し事情を解せざる一般国民の間には猛烈として、反対運動起るべきこと予想せらる其際各閣僚が陸軍大臣の説明により真に能く事情を了解し居れば一致団結断乎として政府の責任に於て之等反対運動を抑圧すべし、然れども不幸にして陸軍大臣の説明が十分他の閣僚を納得せしむる能はざる場合には政府全体としては軍部側と別個之独自の所信に向て邁進する外なかるべし、これ國務大臣として輔弼の責任を全うする所以なりと信ず。

(みずす書房『現代史資料・日中戦争2』、104〜105ページ)

この辺の機微について、多田参謀次長は、

「予ノ次長就任以来、政府トノ關係ニ就テ常ニ普通ハ強硬ナルヘキ統帥部力反ツテ弱氣ニテ 弱氣ニナルヘキ政府力強硬ナリシハ 奇怪ニ感セラルルモ真実ナリシ現象ニシテ スクナレルハ吾人ハ一日モ早ク戦ヲ止メント思ヘルニ政府ハ支那ヲ輕ク見 又滿洲國ノ外形丈ヲ見テ樂觀セシ為ナランカ」と回想している。

(防衛研究所戦史部所蔵「多田駿大將關係資料綴」)

近衛首相の言葉は辛辣である。

「(多田) 参謀次長なんか至ってはまことに判らない先生で、よくあすこまで行ったと自分なんかも思っている」と原田熊雄に語っている(原田熊雄述『西園寺公と政局』第六卷・203ページ・十三年一月十日の項)。

「事変第二期に入る」

松本重治氏の「事変第二期に入る」(『改造』昭和十三年二月号所載)は、当時発表せられた最もすぐれた警世の論文のひとつであろう。その要旨を氏の著書『上海時代・下』に即してみよう。

氏は、上海にあって東京から入ってくる南京占領を祝う提灯行列などのニュースを手にして日本国民の間に、「南京の占領で蒋介石はやがては降参してくるのではないか」といった「ふわついた誤った対中国認識」がひろがっているのではないかと憂慮し、この論文「事変第二期に入る」を『改造』に投稿したのであった。それは「これからが大変だということを日本の国民に警告」することを期していた。一は「蒋介石不投降の心境」であり、二は「立ち上る中共」、三は国際環境「支那事変と独・英・米」から成る。これが氏の当時の情勢認識の構図を成していた。まず一について。

「日華事変は今やその第二期に入った。……第一期が戦争工作第一主義であったに對し、今や始まらんとする第二期は復興建設工作を特徴とする。第一期の活動が単的直截なりしに比して、第二期の問題は複雑を極むるものである。第二期の当初に当たり、国民は、戦勝の酒杯を捨てて本當に、真面目に考うべきである。」

「蒋介石は、わが方が中国国民党を否認し、国民政府との外交關係を断つことがあつても、尙当分の間、わが方の相手として残る存在である……国内統一のシンボルに成り切った蒋介石は、金輪際『抵抗』の旗を下すわけにはいかない。」

「皇軍の南京入城式の早朝(十二月十七日)、蒋介石は声明を發して、日本軍に依る中国領土の侵略がある限り、

中国は断じて投降せずという『不投降』の宣言をした。』『不投降』の旗を押し立つる限りに於て、広西派の反抗を抑え、国民党をまとめて共産党に対抗し得るのである。」

次いで二について。

「事変を巧妙に利用して、将に立ち上らんとしつつあるのは中国共産党である」(西安事件後) 一年余にして、中共の勢力は西北を基地とし、駉々乎として中支を圧しきたり、紅軍は中央より武器と軍費との供給を享けて陝西を中心に有力なる再編成を遂げつつある。かくして日華事変でいちばん儲けたものは、中共と最近第八路軍と改称された紅軍とであって、中共と紅軍の将来は今迄のところ、事変第二期において最も注目すべきものとなりつつある。」

「中共の活動と相関連せしめて考究されるべきは、ソ連の対中国政策である。」

(国共合作の総論的大枠の中で、各論的には)「蔣が、中共とソ連とに警戒的態度あるにかかわらず、中共は、政治部面のほかに、社会部面において、その勢力の大衆的浸透に著しい躍進ぶりを示している。占領された農村地区においては、地権が自然的に抹消されてしまつて不在地主の統制は解消してしまつたのだ。華北その他の地方にオルグの活躍が伝えられるのもデマではないようだ。一方、紅軍は民衆武装の実践と訓練とに余念なく、その実力は漸次強大化しつつあるといわれている。」

転じて事変と独・英・米の動向を見よう。

氏はいう。それは、「必ずしも、祖国において一般に考えられるほど単純ではない。英国はわるい、米国はましだ、独、伊は大いによろしいなどと簡単に片附けられるべきではない」との前置きしたあとで、ドイツの支那事変に対する姿勢が、いかに中国の抗日実力を培養してきたものであるかについて論及したが、この部分は、日独協定の手前、軍と政府の検閲を憚つて『改造』誌の編集部で激論の末、没となつてしまつた。

ついで、英国の政策を論じて、「その投資が長期にわたるといふ特徴を有し、これが回収には、日中関係の安定を希望したことも事実だ。商品市場としての中国の長江一帯の購買力増進のために、中国の財政を軍備過大の変態より救つて、これを常態化せんがために……日中関係の緩和を祈念していたことも、疑い得ない」「従来より英国は、満州は日本の勢力範囲、中国は英国のものという独特の気持を……多分にもつていた」。しかし、「事変が上海に及ぶにいたつてからは、自分の縄張りを荒される危険を感じてその態度を急変したのであった」。しかし、英国の外交は、事変対策としてもたんに中国に対する援助に止まらず、「現実的な世界政策的な対策へ移行しつつあるのではあるまいか」。「英国が世界的な方策を考へるとすれば、ソ連をして北方より日本を圧迫せしむるという手もある。ドイツを表面に立てて、日中間の調停を試みるということも考え得られる。」

しかし、吾人として最も重視すべきは、英国が米国と組むということである。

「米国政府としては、国内の孤立政策を無視することは困難であろう。しかし、米国の国情よりして、政府は結局と論が要求するところに従わなければなるまい。非戦熱を特徴とする米国と論は、事変勃発以来、日本の中国に対する実力行使に対し、甚しく批判的であつた。このことは、十月五日の大統領の演説(シカゴにおける隔離演説)や、パネイ号事件の際における米国国論の沸騰ぶりに見ても容易に想像されることである。しかも、中国側の手による(対米)『残虐宣伝』も至れり尽せりの有様だ。かくて米国と論の動向は、決して樂觀を許さぬところである。」

右のごとく、松本論文は「事変第二期に入る」と蔣介石の「不投降」の決意は堅く、中共・第八路軍は立ち上らんとし、ソ連その他の列強は、日本に不利な姿勢をとらんとしつつあることを訴えようとしたものであつた。論文を結びにあつて、占領地区の中国人民の悲境につき、松本氏は左のごとき数行を加えないわけにはいかなかつた。

「占領地域の住民に対して、一日も早く善政の布かれんがために、吾人はあらん限りの協力を惜しんではならぬ。」

上海・南京 見た 撮った

元・毎日新聞写真記者 佐藤 振 壽 しん じゅ

激戦のすえ、わが軍は十二月十三日南京城を攻略。十七日の入城式までの五日間、私が撮影した「南京戦の実像」をここに収録した。



十二月十三日、私は中山陵の孫文像を撮影したのち、参道を駆け下り中山門に急いだ。右手に提げているのは当時報道写真撮影用として賞用されたバルモス・カメラ。

昭和十二年九月二十五日、私は東京日日新聞(現毎日新聞)の写真部から派遣され、第一師団(東京編成)の従軍記者として、中国軍に包囲されて苦戦中の上海市北方・呉淞地区に上陸第一歩を印した。

旧版『資料集』に所収の『松井石根日記』ならびに『上村利道日記』は、新たに昭和十二年八月十五日の上海派遣軍編成から上海戦におよぶ前半の日記を加えて『資料集Ⅱ』に収録しました。また、『松井日記』関連の『畑俊六日記』『杉山書簡』なども『資料集Ⅰ』から『資料集Ⅱ』に移しました。

南京は陥ちても支那は生きてゐる

左 門

高崎隆治選著『川柳にみる戦時下の世相』より

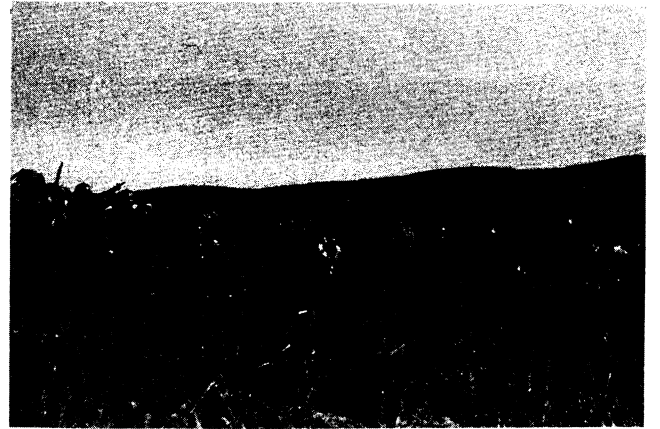
一本の日章旗を手にして茫然路頭に佇立する老翁を思え、意味知らぬ君が代を歌いつつ、喜々として戯れる難民収容処の児童を想像せよ、餓えたる乳児をかかえて、この寒空に食を乞う若き母を偲べ、彼らに、はたして何の罪ありや。」
(『上海時代・下』・253〜258ページ・中央公論社・昭和50年)
かくして十三年一月十六日、取り返しのかめ「蔣介石を対手とせず」の近衛声明が発せられ、トラウトマン和平工作は打切りとなり、支那事変は泥沼に足を踏み込んで行く。まさに「南京戦前後」こそ、のちに日本が辿ることになる大戦への道の、極めて重大な転機であった。

松井根大將戦陣日記

昭和十三年十一月二十八

日記の部

▶磨盤山を越えて、南京へ南
京へと完全軍装で強行軍す
る第十六師団大野部隊の兵
士。疲れ果てた下の写真の兵
士と比較せよ。戦場の実
相は千差万別である。



中国の『日軍南京大屠殺写真集』の中に、筆者が撮影した写真が、洞富雄氏の著書からの引用という形で無断使用されていた。空腹をこらえ、強行軍に耐えた兵の中には、疲労困憊のあまり乳母車まで使う者があった。そうした兵の苦しみに同情して撮影したものだが、洞氏の写真説明では撮影者の意図を無視して、この日本兵たちは悪者として非難されている。▼



予ハ七月下旬以来富士山中山荘ニアリテ静ニ心身ヲ養ヒ 時々出京シテ政府及陸軍当局ニ意見ヲ開陳シテ其決意ヲ促シツツアリ 蓋シ時局ニ対スル政府ノ態度ハ既ニ一ヶ月前 所謂重大決意ノ語ヲ以テ国内ニ声明セラレアルモ 内実政府部内ニ於テモ其決意未タ鞏固ナラス 国民ハ挙テ献金慰恤等熱誠ナル後援ノ意氣ヲ顯シツツアルモ 上層財界并ニ所謂自由主義者インテリ階級ノ時局觀ハ 必スシモ未タ意ヲ安ニスルニ足ラサルモノ多キヲ感シタリ

偶々十四日午後 陸軍次官ヨリ至急出京セラレ度旨電報ニ接シタルヲ以テ 急遽出慮シテ夜十時半陸相官邸ニ杉山陸相ヲ訪ヒ 始メテ政府ハ上海海軍ニ協力スル為メ上海派遣軍ヲ編成急派スルニ決シタルコトヲ知ル 然レトモ陸軍ノ意嚮ハ未タ中支方面ニ主作戰ヲ行フノ決意ナク寧ロ海軍ノ要求ニ応シ 不満足乍ラ之ヲ増援スルノ程度ニ於テ上海派兵ヲ決シタルニ過キス

十月十六日の日記原文

出征日誌

前記

昭和十二年五月北支芦溝橋日支軍ノ戦闘ニ端ヲ発シ 尔後河北地方ニ於ケル両軍ノ抗争遂ニ解ケス 政府ハ遂ニ意ヲ決シテ七月初旬第五、第六、第十ノ三師団ヲ動員シテ北支ニ増派シ 冀ニ朝鮮滿洲ヨリ増援セル第二十師団 熱河獨立混成旅并機械化兵団ヲ合シ 概ネ張家口ヨリ保定ニ至ル線以内ノ支那軍ヲ擊攘シテ北支ノ治安ヲ確保スルニ決セリ

超エテ八月十日上海ニ於ケル大山海軍中尉外一水兵 遽然支那保安隊ノ為メニ擊殺セララルミナラス 上海周辺ニ於ケル支那軍ノ我海軍陸戰隊ニ対スル挑戰日ヲ追フテ熾盛ヲ極メ 遂ニ八月初旬以來此地方又日支兩軍ノ真面目ナル交戦状態ヲ惹起シ 彼我飛行隊ノ爆撃ニ依リ戦況ハ漸次ニ局面ヲ拡張シ 日ヲ追フテ我海軍ノ兵力ヲ逐次増遣シテ 専ラ保留地ヲ守備スルニ至レリ

予ハ七月下旬以来富士山中山荘ニアリテ静ニ心身ヲ養ヒ 時々出京シテ政府及陸軍当局ニ意見ヲ開陳シテ其決意ヲ促シツツアリ 蓋シ時局ニ対スル政府ノ態度ハ既ニ一ヶ月前 所謂重大決意ノ語ヲ以テ国内ニ声明セラレアルモ 内実政府部内ニ於テモ其決意未タ鞏固ナラス 国民ハ挙テ献金慰恤等熱誠ナル後援ノ意氣ヲ顯シツツアルモ 上層財界并ニ所謂自由主義者インテリ階級ノ時局觀ハ 必スシモ未タ意ヲ安ニスルニ足ラサルモノ多キヲ感シタリ

偶々十四日午後 陸軍次官ヨリ至急出京セラレ度旨電報ニ接シタルヲ以テ 急遽出慮シテ夜十時半陸相官邸ニ杉山陸相ヲ訪ヒ 始メテ政府ハ上海海軍ニ協力スル為メ上海派遣軍ヲ編成急派スルニ決シタルコトヲ知ル 然レトモ陸軍ノ意嚮ハ未タ中支方面ニ主作戰ヲ行フノ決意ナク寧ロ海軍ノ要求ニ応シ 不満足乍ラ之ヲ増援スルノ程度ニ於テ上海派兵ヲ決シタルニ過キス

对支作战用兵ニ関スル第三艦隊司令長官ノ意見具申
 (昭和十二年七月十六日)

对支作战用兵ニ関スル意見
 一、作战指導方針ニ関シ
 支那第二十九軍ノ膺懲ナル第一目的ヲ削除シ、支那膺懲ナル第二目的ヲ作战ノ単一目的トシテ指導セラルルヲ要ス

(理由)
 (一) 武力ヲ以テ日支關係ノ現状打開ヲ策スルニハ支那膺懲即チ現支那中央勢力ノ屈服以外ニ途ナシ
 (二) 支那第二十九軍ヲ膺懲スルモ前項支那膺懲ノ實質ノ効果ナシ
 (三) 戦域局限ノ方針ニ依ル作战ハ期間ヲ遷延シ且敵兵力ノ集中ヲ助ケ我力作战ヲ困難ナラシムル虞大ナリ

二、用兵方針ニ関シ
 (一) 当初ヨリ戦局拡大ノ場合ノ作战(所謂第二段作战)ヲ開始セララルルヲ要ス
 (理由) 一項ノ部ニ同シ
 (二) 中支作战ハ上海確保及南京攻略ニ必要ナル兵力ヲ以テスルヲ要ス

從テ派遣軍ノ兵力ハ第十一師團(一聯欠)ト第三師團ト二個師團ニ 若干ノ直屬部隊ヲ附スルノ範圍ニ過キサルコトヲ知レリ

此クテ中支派兵ノコトハ政府力從來ノ局地解決、不拡大方針ヲ撤回シ、全支の抗争ニ因リ南京政府ノ反省ヲ強要シ、全面的日支關係ヲ恢復スルニ決シタルノ結果ニ外ナラス、海軍当局ハ之ニ関シ強硬ナル態度ト決意ヲ有シタルニ係ハラス、陸軍殊ニ參謀本部ノ方針ハ未タ此ニ至ラズ、依然陸軍ノ作戰主目的ヲ努メテ北支方面ニ制限スルコトヲ欲シアリテ、此間政府当局ノ態度尙明瞭ニ一致ヲ欠クモノアリ、外務当局ノ如キハ尙外交々涉ニ一縷否ナ多分ノ望ヲ屬シ、努メテ武力の圧迫ヲ忌避セントスルノ意嚮尙尙熄マサル等、今後時局ノ推移ニ対スル我政府并軍部ノ態度ニ関シテハ相當杞憂スヘキ現情ニ在ルモノト認メラル

◇八月十五日

午前十時御召ニ依リ宮中ニ参内シ謁ヲ賜ヒ、上海派遣軍司令官親補ノ光榮ニ接ス、回顧スレハ往年陸軍内部ノ紛糾ニ因シ予ノ引退ヲ決セシヨリ方ニ二星霜、此間予ハ努メテ陸軍内部ノ小乘の状勢ヨリ一身ヲ脱脚シ、所謂大亜細亞主義政策ノ貫徹ニヨリ内外重大時局ニ貢獻セムコトヲ期シ、大亜細亞協會ノ運動ニ畢生ノ努力ヲ致サンコトニ決シ、曩ニ昭和十年秋ヨリ十一年春ニ亘リ兩度滿洲國并支那ノ南北ヲ歴遊シテ其状勢ヲ窺ヒ、支那朝野ト我國民ノ反省ト覺醒ヲ促スニ微力ヲ尽シ、未タ一日亜細亞運動ノコトヲ忘ルルコト能ハサリシカ、尔来日支ノ關係ハ却テ悪化ノ趨勢ヲ辿リ、最近ノ形勢前記ノ如ク最早斷乎鉄鎚ヲ揚ケテ支那當局ヲ覺醒スルノ外ナキヲ痛感シ、徐口ニ政府当局并内外ニ之レカ画策ヲ焦慮シツツアリタルニ際シ、此次上海派遣軍ヲ統率シテ全支の解決ノ重任ヲ荷フニ至リタルハ、一身ノ光榮固トヨリ譬フルニ物ナク、殊ニ多年予ノ抱負美頭ノ機会ヲ得タルコト傾懷ニ過クルモノナシ、宜シク一身ノ毀譽褒貶ヲ顧ミス、死生ヲ超越シテ心身ヲ費シテ重任ヲ完フセムコトヲ期シタリ、乃チ宮中ヲ辞シテ、閑院、伏見、梨本、朝香、東久邇各宮及大宮御所等ニ參殿御礼ヲ言上シ

タルニ、梨本元帥殿下ヨリハ時局ニ対スル我陸軍ノ方針ニ付御懇切且ツ割切ノ御所見ノ開陳アリ恐懼ノ至リナリ、其要旨如左

過去十数年我陸軍ノ海外出兵ノコト一再ニ止マラス、然ルニ彼ノ西伯利事件、山東事件等多大ノ犠牲ヲ払ヒタルニ係ハラス、其成果ノ殆ト見ルヘキモノナカリシヲ真ニ陸軍ノ為メ痛歎ノ至リナリ

此次時局ニ関シテモ予ノ見ル所ニテハ、北支那ニ於ケル戰鬪ノ輸贏ハ支那ノ全般、尙問題ノ解決ニ対シ大ナル効果ナカルヘキハ想像ニ難カラス、宜ク政略戰略ノ全局ニ着眼シ真ニ出征ノ目的ヲ達成スルコトニ注意セサル可カラス、云々

尙殿下ヨリ予ニ対シ極メテ優渥ナル御語ヲ賜ヒ感激已マス、畏ミテ退出シテ窃力ニ令旨ノ存スル処ヲ拜シ、而カモ予ノ杞憂スル処ノモノト其揆ヲ一ニスルコトヲ懼ヘリ

昨夜在山中ノ文字ニ電信シテ帰京ヲ促シ、本朝文字、花ヲ伴ヒ急遽帰京シタレハ命シテ諸般ノ準備ニ万遺漏ナカラシム

◇八月十六日

朝十時參謀本部ニ出勤、総長殿下ヨリ奉勅命令并指示ヲ下シ賜フ、謹テ拜スルニ上海派遣軍ノ任務ハ

上海附近ノ敵軍ヲ掃蕩シ、其西方要地ヲ占領シテ上海居留民ノ生命ヲ保護スルニ在リ

其任務ノ消極ニシテ前記政府声明ニ副ハサルコト甚タ遺憾ナルノミナラス、其海軍トノ協定并司令部機關ノ編成等ニ関シテモ満足シ難キモノアリ、即陸戰隊ノ指揮關係ヲ明ニセサルコト及軍ノ任務達成上、最も重要ナル宣伝謀略ニ関スル機關ノ不備ナル等即是ニシテ、要スルニ參謀本部当局殊ニ第一部長カ上海派遣軍ノコトニ関シ、十分ノ熱意ヲ有セサルノ結果ナルヲ察ス、依テ本間第二部長ニ面会シテ、之ニ関スル予ノ意見ヲ接述シ其研究ヲ促スト共ニ、陸相ニ会見シテ右ノ事情ヲ述フルト共ニ、更ニ左記要旨ノ意見ヲ開陳、其熱慮ト努力ヲ希望セリ

(理由) 支那ノ死命ヲ制スル為ニハ上海及南京ヲ制スルヲ以テ最要トス

(三) 中支作戰ノ為派遣セラルル陸軍ヲ五箇師團トスルヲ要ス

(理由) 前号ノ理由ニ同シ

(四) 開戰劈頭ノ空襲ハ我ノ使用シ得ル全航空兵力ヲ以テシ、第二航空戰隊ヲモ当然之ニ含マシムルヲ要ス

(理由)

(一) 作戰ノ発端ニ於テ敵航空勢力覆滅ノ為ニ行フ空襲ノ成否如何ハ爾後ノ作戰ノ難易遲速ヲ左右スル鍵輪ナリ

(二) 第二航空戰隊ノ飛行機ハ特ニ遠距離空襲ニ適ス

(三) 作戰部隊軍隊区分(參考案)

第二航空戰隊ヲ北支部隊ヨリ除キ、之ヲ航空部隊中ノ空襲部隊トセラルルヲ要ス

(理由) 第二項(四)ノ理由ニ同シ

*第二十九軍團憲を改め、五箇師團を以て南京を攻略すべきとする第三艦隊司令長官の意見具申は注目に値する。なお、開戰劈頭の遠距離空襲に適するとして第二航空戰隊の飛行機は、新鋭の九六式陸上攻撃機である。

漢口上流居留民引揚ノ指示
七月二十八日午後三時十分
発電

(山本五十六中将)

發 海軍次官・軍令部次長

(嶋田繁太郎中将)

宛 第三艦隊司令長官

(長谷川 清中将)

(通報 在支大使館附武官・南

京漢口各駐在武官)

官房機密第五一番 電

天津軍ハ本二十八日朝ヨリ北平方面ヨリ北平方面ノ第二十九軍ニ對シ総攻撃ヲ開始セリ。当方トシテハ今後日支全面作戰ニマデ進展スルコトアルベキヲ予期シアル次第ニシテ、此ノ際差当リ漢口ヨリ上流各地居留民ハ之ヲ引揚グルノ要アリト認メラルルニ付、關係外務官憲トモ連絡ノ上現地ノ情況ニ応ジ機宜引揚ヲ開始セシムル様取計ハレ度。

尙外務省ヨリ上流各地領事宛各地ノ情況悪化セル場合ハ、領事ノ判断ニテ居留民ト共ニ早日ニ引揚實施差支ナキ旨回訓セリ。

*文字ニ松井石根夫人

今や時局ハ所謂不拡大方針ヲ解消シテ全面的解決ノ域ニ進ミアリ 即對支全般的政策并國軍ノ作戰ニ就キ考フルニ 宜シク其全力ヲ挙ケテ中支那殊ニ南京政府ヲ其目標トシ 武力的、經濟的の圧迫ニヨリ速ニ全局ノ解決ニ邁進スヘキノ秋トナレリ 我陸軍力徒ラニ過去ノ行掛ニ捉ハレ 或ハ對露乃至ハル余ノ對外關係ヲ過度ニ顧念シ 右顧左眈斷乎タル作戰ヲ回避スル如キハ却テ將來ノ國策ヲ危地ニ陥ラシムルモノノミナラス 我陸軍ノ伝統的精神ト作戰ノ方針ニ鑑ミルモ 所謂速戰速決重點把握主義ニ基キ今後ノ作戰ヲ実行スルコト極メテ肝要ナリ 此見地ニ基キ山東ニ一師團ヲ派遣スルノ計画ノ如キハ予ノ執ラサル処 山東ノ如キハ一時全然之ヲ放棄スルモ我權益ハ將來ニ於テ十分之ヲ確保スルコトヲ得ヘク 今や要點作戰ノ目的ニ向ヒ兵力ヲ使用スルコト緊要ナリ

以上ノ理由ニ基キ我軍ハ 速ニ南京ヲ攻略スルノ目的ヲ以テ中支地方ニ所要ノ兵力(約五師團)ヲ派遣シ 一挙南京政府ヲ覆滅スルヲ必要トス 而シテ南京政府ニ對スル圧迫ハ一方武力的の強力ニ依ルノ外 經濟、財政的の圧迫ヲ加フルコト更ニ有効ナリト認メラル 此見地ニ基キ支那沿岸ヲ封鎖スルコトヲ得ハ最モ其目的ノ遂行ヲ容易ナラシムヘク 之レカ為我政府ハ此際支那ニ對シ宣戰スルコト寧ロ有利ナリト考ヘラル 蓋シ宣戰ニ依ル戰爭状態ニ入ルコトハ 國際聯盟其他ノ中立諸國ニ對シ我國ノ受クル不利益固トヨリ尠カラサルヘキモ 之ニ依テ今次ノ時局ヲ速ニ解決スルニ与テ利益甚大ナルコトヲ信ス

加之此ニ更ニ考慮スヘキハ國內ノ情勢ニアリ 目下我朝野ノ時局觀ハ極テ熾盛ナリト雖 今後時日ノ經過ニ伴ヒ自然漸次緊張ヲ失フヘキコト前年ノ例ニ徵スルモ明カナルヲ以テ 能ク拳國時局ニ對スル覺悟ヲ鞏固ニシ動搖ナカラシムル為メニハ 宣戰ニ伴フ詔勅ノ降下ヲ待ツコト頗ル有効ナリ 加之由來支那ノ朝野ハ 近年ニ於ケル我對支那政策ノ發動ヲ軍部ノ陰謀的侵略主義ニ依ルモノト誤認シ 之ヲ以テ我拳國不動ノ政策ヲ發現ト認メアラサルハ今次時變ノ根本的原因トモ認ムヘク 此等ノ感情ハ英米其他ノ諸列國ニ於テモ同様ナレハ 此際更メテ詔勅ニ依リ我國策ノ嚮フ所ヲ明ニシ 正義皇道ノ真精神ヲ中外ニ宣布セラルルコトハ獨リ對支那關係

ノミナラス 一般今後ノ國際關係上極メテ有利ナルヘケレハナリ 云々

以上ハ大体ニ於テ杉山陸相個人的ニ異存ナキ模様ナレト 參謀本部ノ意嚮ニ伴ハサル為メ未タ同意ヲ表スルニ至ラス 却テ予ヨリ陸軍部外ニ對スル此種ノ言動ヲ慎マレ度様申入レ 其決意甚タ足ラサルハ遺憾トスル所ナリ

右終テ午後二時半米内海相、參謀、軍令部總長ヲ訪問挨拶ス 海相ノ時局ニ關スル意見ハ上記予ノ所見ト殆ト所説ヲ同フスルハ頗ル欣懷トスル所ナリ 即特ニ今後政策ノ指導ニ就キ尽力ヲ希望シ置ケリ

軍令部總長殿下ニハ特ニ予ヲ引見セラレ優渥ナル御諒アリ 特ニ陸海軍ノ協力ニ就テハ能フ限ノ尽力ヲ惜マサルヘキ旨力説セラレ 深ク感激ス

尚海軍大臣、軍令部次長ニ對シ軍令部今後ノ宣傳謀略ニ關シ海軍トノ密接協同ノ必要ヲ述ヘ 海軍ヨリ適當ノ人物ヲ軍令部ニ差獻セシメラレ度 犬塚大佐ノ如キ最モ適任ナルヘシトノ希望ヲ述ヘ 大体其同意ヲ得タルハ併セテ欣懷トスル処ナリ

◇八月十七日

朝九時有田元外相ノ申出ニヨリ東京俱樂部ニテ同氏ト會見 其云フ所ニ依レハ 広田外相ハ上海ニ於ケル外國々際調和ノ目的ヲ以テ有田氏ヲ上海ニ派遣シ度旨昨日同氏ニ勸説セリトテ之二関スル予ノ意見ヲ求メントスルニアリ 因テ予ハ

目下軍部ノ意嚮ハ上海ニ於ケル對支外交ニ就テハ極メテ自重主義ヲ取り 支那側ノ言説ニ惑ハサレサルコトヲ希望シアルニヨリ 此際有田氏ノ上海行ハ此見地ニ基キテ過早ナリト認メラル

尚有田氏ノ如キ地位アルモノカ 何等公的ノ資格ナクシテ上海ニ行クコトハ反テ内外ノ疑惑ヲ招ク虞アリ 行クナラハ寧ロ公然大使ノ資格ニテ川越ニ代ルコト可ナラン
ト考ヘ 有田氏モ大体同意ヲ表セルニヨリ 更ニ予自ラ広田外相ト會見シ且改メテ返答スヘキ

臨參命第七十三号

命令

- 一、上海派遣軍(編組別紙ノ如シ)ヲ上海ニ派遣ス
- 二、上海派遣軍司令官ハ海軍ト協力シテ上海附近ノ敵ヲ掃滅シ上海並其北方地区ノ要線ヲ占領シ帝國臣民ヲ保護スヘシ

昭和十二年八月十五日

奉勅伝宣

參謀總長 載仁親王

「石原莞爾中将回想答録」
昭和十四年秋(參謀本部作成)

上海出兵の経緯

石原 一般の空気の北支で解決し得るだらうとの判断の様でしたが、然し私は上海に飛火する事は必ず不可避であると思ひ平常からさう言つて居つたのであります。抑々上海に飛火をする可能性は海軍が揚子江に艦隊を持つて居る為であります。何となれば此の艦隊は昔支那が弱い時のもので現今の如く軍事的に發展した時には居留民の保護は到底出来ず一旦緩急あれば揚子江に浮んで居れないのであります。然るに軍令部は事変がある前に之を引揚げる事が出来なかつた為事変後軍艦を下航せしむる際漢口の居留民を引揚げしむることとなりました。大体漢口の居留民引揚は有史以來無いことであり若し揚子江沿岸が無事に終つたならば海軍の面子がないこととなります。即ち今次の上海出兵は海軍が陸軍を引摺つて行ったものと云つても差支へないと思ふのであります。そこに機微なるものがあると私は思ふのであります。

(竹田宮恒徳王大尉と対談)

ヲ約セリ

十時宮中ニ参内シ 左記優渥ナル勅語ヲ賜ヒ尚金千円菓子一包ヲ下賜セラル 天恩感激ニ耐ヘス

朕卿ニ委スルニ上海派遣軍ノ統率ヲ以テス 宜シク宇内ノ大勢ニ鑑ミ速ニ敵軍ヲ戡定シ 皇軍ノ威武ヲ中外ニ顯揚シ以テ予ノ倚信ニ応ヘヨ
依テ左ノ如ク奉答ス

臣石根

上海派遣軍司令官ノ大命ヲ拜シ 優渥ナル勅語ヲ賜ヒ恐懼感激ノ至ニ禁ヘス 畏ミテ聖旨ヲ奉戴シ惟レ仁惟レ威克ク皇軍ノ本領ヲ發揮宣揚シ 以テ宸襟ヲ安シ奉ランコトヲ期ス

次テ 陛下ヨリ今後派遣軍ノ任務ヲ達成スル為メノ方針如何トノ御下問アリタルニ依リ 軍ノ任務上特ニ密接ニ海軍ト協同シ 所在我外務官憲ハ勿論 列国外交団并列国軍トノ連繫ヲ密ニシ 協力以テ速ニ上海附近ノ治安ヲ恢復センコトヲ期シアリ
旨奉答セルニ 御満足ケニ御嘉納アラセラレ 退出セリ

次テ更ニ 皇后陛下ニ謁ヲ賜ヒ左ノ令旨ヲ賜フ
此次派遣軍司令官ノ重任ニ膺ルコト御苦勞ニ思フ 特ニ身体ノ養生ニ注意シ其任ヲ完フセンコトヲ望ム

依テ略前奉答ト同様ニ奉答シ 是亦御嘉納アリテ退出ス

終テ賢所ニ参謀長、角副官ヲ伴ヒ参拜ス

十一時寺内教育總監ヲ總監部ニ訪問挨拶ヲ述ヘ 尚今後対支政策、陸軍作戦ニ関スル前記意見ヲ開陳セルニ 寺内大将ハ全然予ノ意見ニ同意シ 今後杉山陸相ヲ鞭撻シ其実行に努力スヘキ旨約セリ

十二時四十分内閣総理大臣官邸ヲ訪ヒ 首相以下各閣僚ニ会見挨拶ヲ述ヘ 首相ニ対シ前同様ノ意見ヲ大要開陳セリ 首相ハ之ニ対シ賛否ヲ明言セサルモ大体意義ナキ意嚮ニ認メラル 唯体力健康等果シテ今後重大ナル時局ヲ担任スルニ耐ヘ得ルヤ否 聊力疑アラシメタルハ遺憾ナリ

ナリ

終テ閣僚ト会食中 更ニ時局ニ対スル予ノ意見ノ一端ヲ各閣僚ニ吹聴シツツ 更ニ食後広田首相ニ対シ昨日有田氏ノ言ニ付キ予ノ意見ヲ述ヘ 予ノ上海着後ノ形勢ニ応シ更ニ意見ヲ開陳スヘキニ依リ 其迄本件ヲ見合セラレ度旨申入同意ヲ得タリ

又軍ノ宣伝謀略機關ニ外務官憲ノ協同ヲ希望シ 大使館参事官及上海総領事等ヲ軍司令部囑託ニ充テラレ度旨申入 是亦同意ヲ得タリ

午後二時亞細亞協会ニ到リ 末次大将、建川中将、高木陸郎、下中、橋本、西原等ト会見 右時局ニ関スル意見ヲ述ヘ其活動ヲ希望セルニ 末次氏始全然同感ニテ今後ノ努力ヲ約セリ 又予ノ出征不在中末次氏ニ代理協会ノ総締リニ当ラレンコトヲ申出 是亦其同意ヲ得タリ

尚外相トノ会談ニ際シ 予ハ上海ニ於ケル宣伝外交ノ任ニ当ル為メ 佐藤安之助氏及萱野長知氏ヲ使用シ度腹案ナル旨ヲ予告スルト共ニ 幸ヒ列席ノ塩野法相ニ対シ予及広田氏ヨリ同人ノ保釈取扱ノ件ニ関シ 特別ノ取扱ヲ希望シ其快諾ヲ得タリ

午後三時ヨリ幕僚ト会シ 一般ノ状勢及軍ノ受ケタル命令及指示ニ関スル打合ヲ為シ 予ヨリ左ノ諸項ヲ当局ニ交渉方命セリ

一、宣伝謀略機關トシテ少クモ少將ヲ長トスル特別機關ヲ設置シ度コト
二、右ノ為メ海軍、外務ノ協同ヲ希望シ 可能人員ノ軍司令部囑託採用方ヲ軍部ヨリ交渉シ貰フコト

三、佐藤、萱野及岡田尚ヲ軍司令部囑託ニ採用方 取計ハレ度コト
四、軍ノ受ケタル命令中 海軍トノ協定不満足ニシテ殊ニ陸戦隊ノ指揮權ニ関シ不明瞭ナル点アルコト 即戦闘間高級先任者ノ指揮ニ委ヌルトノ意ハ此ヲ質シ 一層指揮關係ヲ明確ニスヘキコト

尚今後時局ノ推移ト之ニ応スヘキ我国策及陸軍ノ派遣方針ニ関スル予ノ意見ノ大要ヲ説述シ幕僚首役者ノ理解ヲ促セリ

上海・青島海陸軍協同作戰ニ関スル大海令

八月十四日午後六時 發電
軍司令部機密第四七番電
大海令第一三三號

昭和十二年八月十四日
軍司令部総長 博 恭 王

奉 勅

長谷川第三艦隊司令長官ニ命令
一、帝國ハ上海ニ派兵シ同地ニ於ケル帝國臣民ヲ保護スルト共ニ 当面ノ支那軍ヲ撃破スルニ決ス 青島ニ対シテハ陸軍派兵準備ヲ整ヘ待機セシム

二、第三艦隊司令長官ハ現任任務ノ外派遣陸軍ト協力シ所要ノ地域ヲ確保シ同方面ニ於ケル敵陸軍及中支那ニ於ケル敵航空兵力ヲ撃破スルト共ニ所要海面ヲ制圧シ必要ニ応シ敵艦隊ヲ撃滅スヘシ

三、第三艦隊司令長官ハ上海方面ニ派遣セラルル帝國陸軍ノ海上護衛及其ノ一部ノ輸送ニ任スヘシ

八月十四日午後六時十五分發電
軍司令部機密第四七八番電
大海令第一四四號

昭和十二年八月十四日
軍司令部総長 博 恭 王

奉 勅

永野聯合艦隊司令長官ニ命令

一、帝國ハ上海ニ派兵シ同地ニ於ケル帝國臣民ヲ保護スルト共ニ 当面ノ支那軍ヲ撃破スルニ決ス 青島ニ対シテハ陸軍派兵準備ヲ整ヘ待機セシム

二、聯合艦隊司令長官ハ第五戰隊、第二水雷戰隊、摩耶、五十鈴、大井、敵島及第二十四驅逐隊ヲシテ上海方面ニ派遣セラルル帝國陸軍ノ輸送及掩護ニ関シ 第三艦隊司令長官ノ指揮ヲ受ケシムヘシ

亜細亞協会ニ松井石根が会頭。

亜細亞民族の團結を唱えた思想団体。正確には「大亜細亞協会」。末次信正、本庄繁、荒木貞夫、平泉澄を始め鈴木貞一、本間雅晴、樋口季一郎、和知照二、影佐禎昭、今田新太郎、南雲忠一、石川信吾、加来止男ら多数の陸海軍人會員を擁した。

附記

本日御下賜ノ金品ハ之ヲ三分シ 其一分ヲ予自ラ戴キ 其一分ヲ兩師團長ニ 残余ノ一分ヲ軍司令部職員一同ニ分配シ聖恩ヲ頒タシメタリ

◇八月十八日

朝九時半軍司令部職員中既着ノモノ及第三、第十一師団ヨリ来レル連絡參謀ヲ集メ 勅語捧読式ヲ行ヒ簡單ナル司令部職員ニ対スル予ノ訓示ヲ与フ

十時平沼枢府議長ヲ其私邸ニ訪問 今後ノ時局觀之ニ対スル國策ノ確定 殊ニ宣戰及之ニ伴フ詔勅ノ下降ノ件ニ付意見ヲ開陳シ 同氏ハ全然予ノ所見ニ同意シ今後其實行ニ付努力スヘキヲ約ス

十一時軍司令部二本庄、阿部兩大将ヲ招キ同様ノ所見ヲ述ヘタルニ 阿部大将ハ略同意シ本庄大将ハ尚不拡大主義ヲ抱感セルノ感アリ 依テ今後更ニ研究シテ我陸軍当局今後ノ態度ヲ指導セラレ度依頼シ其目途ヲ得タリ

正午陸相官邸ニ於テ三長官ノ送別宴アリ 閑院宮殿下ノ台臨ヲ得テ幕僚隷下司令部員多數招致セラレ陸相ヨリ挨拶アリ 就中時局ハ既ニ不拡大方針ヲ撤棄シ全面的戰鬪状態ニ入レル旨ノ語アルハ 陸軍当局ノ意ノアル処漸ク強化シツツアルヲ感シ 予モ之ニ対シ積極的上海方面作戰ノ要アル旨言及シ 挨拶ト一般ヲ激励スルノ意ヲ諷ス

終テ別席ニ於テ総長殿下ニ対シ結局宣戰ノ必要ナルノ意ヲ言上シ置ケリ

午後三時參謀本部二次長及總務部長、第一、第二部長ノ会同ヲ求メ 前記ノ予ノ時局対策并作戰ニ関スル意見ヲ赤裸々ニ開陳シ当局ノ意見ヲ徵セルニ 第一部長始多ク語ラサルモ敢テ予ノ意見ニ賛成ノ意嚮ナキヲ確メタルニ依リ 更ニ其研究ヲ促シ置キタリ 宣伝機關特設ノ件ニ就テモ 在上海大使館附武官ヲ中心トスルニ止メ 直ニ予ノ意見ニ同意セス

要スルニ參謀本部ノ上海派遣軍ニ対スル意見ハ 凡テ甚タ消極的ニシテ現在ノ情勢ニ適セザ

ルハ甚タ遺憾トスル所ナリ 予ハ更メテ上海上陸後ノ狀勢ニ応シ公式ニ意見ヲ具申スルニ決シ大要此非公式意見開陳ニ止メテ東京ヲ出發スルニ覚悟ヲ定メタリ

此夜早川海城館ニ於テ大亜細亞協會同人ノ送別会アリ 会スルモノ二十余名一同誠意誠心ニ予ノ出征ヲ歎送スルト共ニ 之ニ依リ時局ノ根本的解決ト建設的事業ノ大成ニ就キ 熱烈ナル希望ヲ抱ケルハ予ノ本懐トスル所ニシテ 予ハ深く同志ノ厚意ヲ謝スルト共ニ 今後ノ後援ト国内朝野ノ指導ニ付特ニ同志ノ尽力ヲ期望セリ

◇八月十九日

朝九時家族并參集セル親戚一同ニ訣別シ征途ニ就ク

十時司令部員一同ヲ帶同シ 明治神宮ニ參拜シ神明ノ加護ヲ祈願シ 正午軍令部ニ於テ一同會食 杯ヲ挙ケテ 大元帥陛下ノ万歳ト 派遣軍武運隆盛ヲ祈ル

○時半參謀長以下司令部員約二十名ヲ帶同シ軍司令部ヲ出發 途上宮城ヲ遙拝シ東京駅ニ到ル

近衛首相、陸海兩相、寺内總監、大角大将、内山、柴兩老將軍以下多數ノ見送ヲ受ケ 午後一時東京駅發名古屋ニ向フ 感慨軼々深シ

午後六時半名古屋駅ニ着 藤田第三師團長、大岩市長等ノ出迎ヲ受ケ八勝館ニ投宿ス 西原少將、相沢等名古屋迄見送ル 此夜師團長ニ會シ第三師團動員狀態ノ可良ナルヲ聞キ安堵ス

◇八月二十日

朝六時八*山墓地ニ詣テ祖先及兩親ノ靈ニ報告加護ヲ祈願シ 三原、桜井、木村等ノ知己ニ告別ス

午前七時八勝館出發 熱田神宮ニ參拜武運ノ隆盛ヲ祈願シ 九時熱田埠頭出發 十時軍艦足柄二乘艦 十一時半拔錨第三師團先遣部隊ト共ニ揚子江口ニ向フ

八月十四日午後七時十五分 發電

軍令部機密第四七九番電 大海令第一五号

昭和十二年八月十四日

軍令部總長 博 恭 王

長谷川第三艦隊司令長官ニ指示 一、帝國陸軍上海派遣軍ノ編制左ノ如シ 上海派遣軍司令部 第三師團

第三師團(天谷支隊欠)

其ノ他所要ノ部隊 二、第三師團及第十一師團ノ各先遣隊ノ輸送ハ概ネ左ノ要領ニ依ルヘシ

(一) 第三師團先遣隊(約三千五百名)ハ八月十九日乃至二十日熱田ニ於テ海軍艦船二乘艦進發ノ予定、右艦船ノ乘艦地入泊期日ヲ八月十八日トス

(二) 第十一師團先遣隊(約四千名)ハ八月十九日乃至二十日多度津及丸龜ニ於テ海軍艦船二乘艦進發ノ予定 右艦船ノ乘艦地入泊期日ヲ八月十八日トス

昭和十二年八月十四日午後七時 (第三艦隊司令長官南京等空襲命令) 第三艦隊機密第六〇七番電

一、明朝黎明以後成ルヘク速ニ当方面ニ於テ使用シ得ル全航空兵力ヲ挙ケテ敵空軍ヲ急襲ス

- 二、攻撃目標
 - 第二空襲部隊 南京・広徳・蘇州
 - 第三空襲部隊 南昌(台北部隊)
 - 第四空襲部隊 南京(大村部隊)
 - 第五空襲部隊 二十二戰隊・杭州
 - 第六空襲部隊 第八戰隊・第十戰隊・第一水雷戰隊 飛行機 虹橋

ハ事墓地ニ名古屋市東南郊に在リ。松井大将は名古屋藩士、漢學者、武園の六男、日露戰爭には、歩兵第六聯隊中隊長として出征、首山堡の戰鬪で負傷後送されてい

昨日東京出発以来 沿線各駅ニ於ケル国民ノ熱誠ナル出征部隊欽送ノ状ヲ目撃シ 今又我等ノ郷里名古屋港ヨリ 予ノ出身聯隊タル歩兵第六聯隊等ノ第三師団ヲ率ヒ 并セテ豫テ二年間予ノ統率訓練セシ第十一師団オモ併セ率ヒテ此壯途ニ上ルハ 予ノ多年ノ心願ト支那ニ関スル抱負トニ鑑ミ快之ニ過クルモノナク心神自ラ鼓動ヲ禁セス 伊藤次郎左衛門ハ予ニ刀一振ヲ贈リ関谷惣助、河野甚七等ト共ニ埠頭ニ送ル

午前十一時半第五戦隊ハ三木少将ノ指揮ニ依リ 巡洋艦足柄、那智、羽黒、摩耶及第二水雷戦隊旗艦神通外駆逐艦十隻 一航陣トナリ堂々熱田港ヲ出航ス 天気晴朗一天ノ雲ナク微風僅ニ床ヨリ来リ 吾等ノ軍司令部及第三師団長藤田中將ノ率ユル第三師団ノ先遣隊(歩兵四大隊砲一大隊ヲ基幹トス)ヲ征途ニ送ル

午後二時伊勢灣口ニ達ス 乗員一同遙ニ伊勢神宮ヲ遙拜シ武運ノ隆盛ト加護ヲ祈ル

◇八月二十一日

昨日来平穩ナル航行ヲ続行ス 漸ク東海ニ入ルニ從ヒ風波愈々静ニ海面真ニ鏡ノ如シ 即句シテ曰ク

東海如磯航路易 和平来兮亞洲定

三木司令官、武田艦長以下懇切誠実輸送ニ任ス感激已マス 午後陸海全員乾盃シテ武運ノ隆昌ヲ祈念ス

夕陽漸ニ没スル頃風波愈々静ニ恰モ十五夜ノ満月東天ニ登リ 満星光ヲ失ヒ銀波翻々爽快極リナシ 即吟シテ曰ク

夜駕鯨鱗渡東海 滿天明月思悠々

宣揚皇道是此秋 十萬貔貅四百州

往年大正天皇御製ニ韻ヲ奉スル也

書シテ以三木司令官、武田艦長ニ贈ル

◇八月二十二日

朝二時艦隊ハ馬鞍群島ニ入り此地ニ仮泊ス

小林海軍少将ノ率ユル第九戦隊ハ第十一師団諸隊ヲ搭載シテ既ニ同錨地ニ先着シアリ 此二両師団ノ先遣諸隊力無事江口ニ集結スルヲ得タリ 桜井大佐ノ率ユル碇泊場部隊モ亦昨日来当地ニ着セリ 午前六時上海ニ先遣シ第三艦隊ト連絡シ上陸計画ニ任セル 西原大佐、芳村中佐帰来シ報告スル所アリ 幕僚ヲ会シテ上陸計画ヲ検討ス

昨日海上ニ於テ幕僚間ニ於テ研究セル上陸計画ハ 両師団ヲ川沙鎮附近ニ併列上陸シ 直接上海ノ背後及其退路ニ作動シテ敵軍ヲ捕捉セントスルニ在リ 然ルニ西原大佐等ノ携へ来レル上陸案ハ 第三師団ヲ吳淞南方地区ニ 第十一師団ヲ川沙鎮附近ニ上陸セシメ 前後上海附近ノ敵軍ヲ包圍攻撃セントスルニ在リ 吳淞附近ノ上陸ハ敵軍ノ中央ニ突入スルモノニシテ相当ノ困難ヲ予期セラルルモ 海軍陸戦隊約五百ノ上陸掩護部隊ト所在海軍艦船ノ援護射撃ニ依リ之ヲ強行セントスルニ在リ

幕僚ノ議一決セス兩論相争ヒシカ 予ハ目下ノ情勢上密接直接ニ海軍ト協力スルノ必要ト居留民ノ危急ヲ速ニ直接救脱スルノ考慮トニ依リ 大要西原大佐等ノ携行セル第二案ヲ可ナリト認メ之ニ裁決ヲ与ヘタリ 蓋シ參謀長以下支那情勢ニ通セサルモノハ 専ラ大学校流ノ作戰ヲ欲シ軍ノ現任務ヲ輕視スルノ觀アリ 殊ニ支那軍ヲ蔑視シテ専ラ戰略的行動ニヨリ敵ヲ敗退セシメント欲スルモ 是レ支那軍ノ現情ニ通セサル結果ニシテ 軍現在ノ兵力ヲ以テ少クモ七個師団ノ支那軍ニ對スル先遣部隊ノ行動トシテ 余リニ理想ニ捉ハレタルモノニシテ 所謂敵ヲ知り己レヲ知り百戰始カラサルモノク今日ノ狀勢ニ適スルモノト認メタルニ由ル 即本計畫ニ依リ命令ノ作為ニ當ラシメ 午前九時兩師団長ヲ軍艦足柄ニ召致シ之ヲ下達スルト共ニ上陸計畫ニ関スル予ノ主旨ヲ説明シ 尚相當作戰ノ困難ヲ予期シ慎重ニ當ルヘキ旨ヲ訓示セリ 又便衣隊及土民ノ對日感情ニ鑑ミ將兵能ク身辺ノ注意警戒ヲ忘ル可カラサルコト 水及

『飯沼守上海派遣軍參謀長日記』
八月十八日

三長官招宴ノ席上司令官ノ挨拶中軍ノ任務ニ不滿ナル意味アリ (參謀本部) 中島總ム部長カラ作戰命令モ勅語同様ノモノニテ之ヲ批判スルカ如キハ不謹慎ナレハ克ク言フテ置テクレトノコト 補佐ノ足ラサリシカ
十八日午後三・〇〇

次長、総務、第一第二部長集合(松井)司令官 局地解決不拡大量ハ放棄サレタルニ就キ作戰モ之ニ轉移順應スヘキモノト考フ 國民政府存在スル限り解決出来ス從來通りノ姑息ニテハ不可トノ政府ノ聲明ナリ 蔣下野國民政府没落セサルヘカラス 英米ソ國ノ關係アルモ對支目的ニ邁進スルヲ必要ト考フ

先ツ支那問題ヲ解決セサレハ對ソハ解決セス支那問題片付ケハ對ソモ颯ラスシテ或程度解決セラルヘシ 英モ支那問題ヲ断乎解決セハ隨從スヘシ

必要ノ兵力ヲ用ヒ速戰即決、北支ニ主力ヲ用フルヨリモ南京ニ主力ヲ用フルヲ必要トス 之二就テハ結末ヲ何処ニスヘキヤノ議論アル

モ大体南京ヲ目標トシ此際断乎トシテ敢行スヘシ 其方法ハ大体五、六師団トシ宣戰布告シ堂々トヤルヲ可トス

次ニ武力ノミニテヤルハ不可、經濟の二圧迫ス 英米ノ援助ヲ遮断スル為封鎖ス 斯ク短時ニ南京ヲ攻略ス

此際白紙ニ立チ歸リ考究セラレタシ 首相外相モ敢テ反對セザリキ 此作戰ヲ容易ナラシムル為宣傳謀略ヲ必要トシ軍ニ特別ノ機關ヲ設ケ海軍、外務一体トナリテモヤル上海占領直後ニ出来レハ最モ可軍ニ直接關係ナキ事ハ外務關係ニテヤルトノ指示ニテ現在ハ適當ナルモ將來ハ軍司令官ノ一手ニテ握リ度シ

次ニ海軍トノ關係、陸上作戰ニ移リタル時海軍航空隊力果シテ從來通り積極的ニナリ得ルヤ疑念アリ 故ニ少クモ陸上ニ在ル海軍ハ指揮下ニ入レラレタシ

石原(莞爾)今ノ作戰目的ヲ達セラレタル後南京ヲ幾何ノ兵力ヲ以テ幾何月ニテ攻略シ得ルカヲ研究サレタシ 今ノ処ニテハ昨年以來全然變化シ不可能ト考ヘアリ 個人トシテハ永ヒケハ全体ノ形勢カ危イモノト考ヘアリ

耕作物ノ撰取ニ際スル支那人ノ毒物投入等ニ付十分ノ注意ヲ加フヘキ旨ノ注意ヲ与ヘ 杯ヲ挙ケテ兩師団ノ武運ノ隆盛ヲ祈リ告別ス

兩師団長殊ニ山室師団長ハ決意眉宇ニ顯シ頗ル緊張セル態度ヲ以テ 万難ヲ排シテ任務ノ達成ヲ計ルヘキヲ誓ヒ勇躍辞去ス 又藤田中將ノ悠々迫ラサル態度モ亦推賞ニ値ス

午後三時重艦足柄ヲ離レ巡洋艦神通ニ移乗シ(第二水雷隊旗艦)夜九時錨地出航揚子江ヲ溯航 夜半ビルブイ附近ニ於テ駆逐艦綾波ニ転乗遊航ヲ続行ス

兩師団ノ部隊ハ夫レ夫レ馬鞍仮泊地ニ於テ第一第二水雷隊ニ移乗 午後五時以降逐次呉淞ニ向ヒ遊航ス

◇八月二十三日

朝二時第八戰隊旗艦由良ニ移乘呉淞錨地ニ到ル 司令官南雲少將歡迎ス 南雲少將ハ先年来亜細亞協會ニ於ケル同志ニシテ旧知ノ人ニシテ 同少將ハ本上陸作戰ニ於テ同戰隊及第一水雷戰隊ヲ指揮シテ直接軍ニ協力スルコトトナリ 公私共頗ル好都合ナリ

此クテ幕僚ヲ伴ヒ艦橋ニ登リ兩師団上陸ノ狀勢ヲ觀察ス 此頃ヨリ兩上陸地附近ニ猛烈ナル砲声起ル 呉淞鎮附近ニハ火災ノ起ルアリ是レ我援護艦隊ノ砲撃ニシテ 海軍ハ昨日午後既ニ右兩上陸地附近ヲ砲撃、爆撃シ 又上海七了口附近并杭州灣浦沿岸ニ達シ陽動ヲ行ヒタリシカ 本朝又直接上陸戰鬪ニ協力スル為メ本砲撃ヲ開始セルモノニシテ 殊ニ第三師団上陸直接援護トシテ陸戰隊五百ヲ派遣協力セル等 熱誠ナル行動ニ對シテハ感激ノ至ナリ

第三師団ハ午前三時ヨリ陸戰隊(歩43ノ一中隊ヲ付ス)ノ掩護ニ依リ上陸ヲ開始シ 敵ノ歩兵約二中隊(砲兵ヲ附ス)ノ抵抗ヲ排シテ逐次上陸ヲ敢行シ 午前八時師団司令部ノ上陸ヲ最後ニ第一次輸送部隊ノ上陸ヲ了ル 第二次部隊ハ午後十時頃続テ呉淞棧橋ニ上陸ス

第十一師団ハ午前二時上陸開始ノ予定ナリシカ 約二時間遅レ(移乘其他ノ事情ノ為メ)午前三時五十分ヨリ上陸ヲ開始シ 同七時頃第一次輸送部隊ヲ以テ川沙鎮兩側地区ノ淺岸ニ上陸

ヲ敢行ス 後ハ微弱ナル敵ノ抵抗アリシノミナリシカ 第二次部隊ハ本日中未タ來着セス

要之敵ノ抵抗ハ其兵力多カラサルモ 兩方面共頗ル勇敢ニ戰鬪シ多クノ死者ヲ遺棄シテ退却シ 我方ノ損害ハ兩師団ヲ合シ死傷四十余名ニシテ 兎ニ角兩方面共予定ノ上陸ニ成功シタルハ將兵ノ勇敢ニ頼リシハ勿論ナレトモ 先日來天候極メテ可良ニシテ又夕時モ滿潮時ヲ利用シ得タルニ因ルモノニシテ 偏ニ天佑ニ頼ルモノト感激スル所ナリ

此日兩師団ハ遂ニ予定ノ線ニ迄占領スルニ至ラザリシカ 夫々上陸地ノ前方ニ確實ナル地歩ヲ獲得シ 尔後ノ攻撃ヲ準備スルヲ得タリ

仍テ右陸上成功ヲ不取敢參謀總長ニ報告スルト共ニ 第三艦隊長官ニ對シ協力ニ關スル感謝ノ電報ヲ發シ 兩師団ニハ各々其成功ヲ祝スト共ニ 幕僚一同ト共ニ盃ヲ挙ケテ大元帥陛下ノ万歳ヲ三唱セリ

◇八月二十四日

早朝旗艦由良ハ呉淞錨地ヲ出港セシメ川沙鎮沖ニ遊航シ 第十一師団方面ノ戰況并上陸ノ狀況ヲ視察シ 軍參謀ヲ師団司令部ニ派シテ直接連絡ヲ行ハシム

第十一師団第二次部隊ハ昨夜半錨地ニ到着セシモ 上陸地附近ハ遠淺ノ為メ每滿潮時三四時間位ノ外ハ舟艇ノ接岸ニ適セス 自然諸隊ノ揚陸遲延シ此日中第二次部隊ノ人員約八割ヲ揚陸セシニ過キス 諸材料并彈藥、糧食等ハ僅ニ所要ノ一部ヲ揚陸セシメタルノミ 殊ニ上陸地附近ノ土民ハ殆ト避難シ 残留者ノ態度甚タシク疑ハシク 所謂便衣隊ノ残留シテ狙撃ヲ行フナトアリ 師団ノ前進ニ伴フ後方連絡補給極メテ容易ナラス 已ムナク海軍ヨリ人夫ヲ借用シテ輸送ニ當ラシメントスルモ 人員寡少ニシテ其効程見ルヘキナク 此ニ折角敵ノ背後ニ上陸セシ師団モ 速ニ其前進ヲ起スコト能ハサルハ頗ル遺憾トスル処ニシテ 要ハ揚陸及補給ニ必要ナル人員材料ノ準備甚タ不備ナリシニ起因スルモノナリ

第三師団ハ未明敵ノ逆襲ヲ受ケタルコト二回ニ及ヒシモ 能ク之ヲ擊退シ夕刻迄ニ概ネ予定

司令官 意見ノ相違ナルモ尚研究セシ
次長(中島鉄藏) 南京攻略ノ着想ハ誰レシモ同様ナルモ具體的ニ研究スレハ困難益々加ハル
蔣介石ハ如何ナル情況ニテ下野スルヤ
司令官 南京ヲ攻略セハ下野スヘシ

午後 八月十五日午前一・一〇
發表ノ政府聲明ヲ陸軍次官ヨリ通牒ヲ受ク

*「支那軍の暴戻を膺懲し以て南京政府の反省を促す為今や断乎たる措置をとるの已むなきに至れり」いわゆる「暴支膺懲」聲明。異例の真夜中の発表である。八月十五日という日付も後に至って想えば、感慨深い。

臨命第四百五十二号

指示

臨參命第七十三号ニ基キ左ノ如ク指示ス

- 一、上海附近ノ情況別冊ノ如シ
- 二、第三艦隊(旗艦出雲第八、第九、第十一、第十二戰隊第三及第五水雷戰隊第一聯合航空隊等ヨリ成ル)ハ長江流域ニ在リ其陸戰隊約四千五百ハ大川内少將指揮ノ下ニ上海開北附近ニ位置シ在上海帝國臣民ノ保護ニ任シアリ
- 三、作戰上海軍ト協同ニ關シテハ別冊「參謀本部ト軍部トノ協定抜萃」ニ準拠スヘシ又其航空ニ關シテハ上記ノ外別冊「中支作戰ニ關スル陸海軍航空協定ノ抜萃」ニ準拠スヘシ
- 四、上海ハ國際都市トシテ列國ノ利害錯綜シ且列國軍環視ノ中ニアルヲ以テ軍ノ行動ニ關シテハ特ニ左ノ件ニ留意スルヲ要ス
イ、我力正当ナル行動ヲ中外ニ理解セシムルヲ要ス
ロ、努メテ列國軍ト協調ヲ保持ス
ハ、上海租界ニハ兵禍ヲ及ホササル如ク努ム

ノ線二前進スルヲ得タルモ 呉淞鎮家屋二堅固ナル陣地ヲ有スル少数ノ敵ハ砲若干ト共ニ依然
同地附近ヲ占拠シ 第三師団部隊ヲ側射シ行動容易ナラサルノミナラス 黃浦江口出入ノ小艇
ニ対シ狙撃ヲ試ムルナトアリ 尚対岸浦東地区ニモ所在不明ノ砲兵アリテ 時々後方ヨリ我軍
ヲ射撃シ師団ノ運動ヲ著ク妨碍シ連絡線ヲ脅威シツツアリ
此クテ予ハ由良ニ在リテタ刻再ヒ呉淞鎮地ニ歸來仮泊ス

◇八月二十五日

此日呉淞鎮地ニ止リ兩師団戦況ノ發展ヲ待ツ

第十一師団ハ歩43(Ⅲ欠)ヲ以テ昨日夕瀏家鎮ヲ占領シ 尔余ノ主力ヲ以テ川沙鎮根拠地ヨ
リ昨日午後以來羅店鎮ニ向ヒ前進シ 昨夜羅店鎮北方地区ニ於テ相応ノ兵力ヲ有スル敵ノ逆襲
ニ遭ヒ之ヲ撃退シ 本朝來更ニ前進ヲ続行シ正午羅店鎮ヲ占領スルヲ得タリ 一部ヲシテ瀏家
行方向ニ敗敵約三百ヲ追撃セシメ 主力ヲ以テ嘉定ノ攻撃ヲ準備シツツアリ
昨日上陸未済ノ人馬材料ハ 揚陸材料ノ不足ト遠淺ノ為メノ困難ニ闘ヒツツ此日中人員ノ全
部ヲ揚陸セシメ 逐次羅店鎮ニ追及セシメ 今朝來統テ錨地ニ著セル人馬ノ揚陸ヲ続行ス

仍テ軍ハ第十一師団ニ命シ速ニ嘉定ヲ攻撃スヘキヲ命セリ
第十一師団ノ上陸以來ノ死傷ハ約四百〇〇名ニシテ 師団參謀下坂少佐ハ上陸直後敵飛行機
ノ爆撃ノ為メ戦死シ 師団長以下土塊ヲ冠レリト云フ

第三師団ハ晝夜間斷ナク攻撃ヲ続行シ 漸次黃浦江岸ニ沿フ地域ニ於テ戦線ヲ前進セシメ得
タリ 然レトモ呉淞鎮附近ヲ頑守セル敵ノ歩砲兵ハ依然師団ノ背後ヨリ射撃シ 尚前面ノ敵ハ
此日午後二至テ再ヒ兵力ヲ増加シテ攻撃シ來ルアリ 自然死傷続出シ上陸以來戦死百余名 死
傷總計三百余名ニ達セリ
當面ノ敵ノ兵力未詳ナルモ呉淞西南江灣鎮ヲ中心トセル地区ニ現在スルモノ約二万ニシテ
更ニ敵ハ閘北東端ヨリ大場鎮ニ巨ル陣地ヲ占領シアルモノノ如ク 尚其西方南翔鎮附近ニモ陣

地アルモノノ如ク 其一部ハ昨日來嘉定方面ニ増援セラレツツアル如シ

此クテ第三師団ハ呉淞鎮攻撃ヲ此日夜遂ニ決行スルヲ得ス

◇八月二十六日

此日依然呉淞鎮地ニアリテ 兩師団戦況ノ發展ト後続人馬ノ揚陸ヲ督励区署ス

第十一師団ノ戦況

第十一師団カ一昨夜來既ニ羅店鎮、瀏河鎮ヲ占領セリトノ報ハ誤報ニシテ 此日正午頃43 i
(Ⅲ欠)ハ尚瀏家鎮南方地区ニ於テ 敵兵約二聯隊(捕虜ノ言ニシテ過大ナラン)ト尚交戦中
ニシテ 師団ノ主力モ同時頃尚羅店鎮附近ニアル兵力未詳ノ敵ニ対シ攻撃中ナルヲ知ル 師団
ノ前進ハ後方補給ノ困難ナルコトモ亦遲滞ノ一因ナリ
仍テ碇泊場司令部ヲ督励シ 上海ヨリ小蒸汽、ライター及人夫ヲ徵発シ揚陸及陸路ノ輸送ニ
努ム 幸ヒ昨夜來先遣隊殘留人馬及輜重ノ一部到着セルヲ以テ 其協力ニ依リ夕刻頃ヨリ揚陸
効程ヲ増加シ 連絡線ノ補給モ容易トナリツツアリ

尚此師団ノ動員人馬ハ此日夕刻其一部ヲ錨地ニ到着シ 漸次師団兵力ヲ増加スルニ至ル

第三師団ノ戦況

第三師団ハ依然昨日來ノ陣地ニ在リテ戦線ヲ保持シ 僅ニ西方正面ニ於テ其戦線ヲ進メ得タ
ル外 江岸ニ沿フ前進モ昨日報告ノ如ク意ノ如ク進捗セス

殊ニ呉淞鎮附近ノ状況依然トシ 間斷ナク背後ヨリ脅威ヲ受ケアルモ師団ノ現況ハ未タ直ニ
同地ヲ攻撃スル能ハス 之レカ為メ揚陸地附近モ屢々敵ノ射撃ヲ受ケ今後ノ揚陸ニ支障アルヲ
以テ 第三師団ヲ督励シテ呉淞鎮ヲ攻撃セシメントシ 尚成シ得レハ海軍陸戦隊ノ協力ヲ得ル
為メ海軍側ノ意嚮ヲ實シツツアリ 師団正面ノ敵ハ計約一師団ニシテ江灣鎮附近ノモノヲ合ス
レハ約二師団内外ナルヘシ

之レカ為メ幕僚中ニハ第十一師団ノ一部ヲ以テ呉淞鎮攻撃ニ協力セシメントノ意見アルモ

二、飛行機ヲ以テスル対地攻撃就
中爆撃実施ニ方リテハ目標選定其
他ニ関シ國際關係ヲ顧慮スルヲ要
ス

ホ、涉外事項ニ関シテハ任務達成
上直接關係アルモノノ外ハ努メテ
外務官憲等ノ処理ニ委ヌ之カ為可
成在帝國外務官憲ト密接ニ連繫ヲ
保持ス

五、催涙筒ノ使用ニ関シテハ別ニ
示ス
六、補給交通衛生及輸送ニ関シテ
ハ別ニ指示ス

七、參考ノ為左記書類ヲ附与ス
(略)

昭和十二年八月十六日
參謀總長 載 仁 親 王

上海派遣軍司令官 松井石根殿

八月二十八日
英國駐華大使ヒューゲッセン、
わが海軍飛行機ノ誤射により負傷
(九月二十一日、外交折衝により
解決)

上海派遣軍作戦要領案

第一方 針

軍ハ有力ナル一兵団ヲ以テ瀏河
鎮方面ニ主力ヲ以テ呉淞方面ニ上
陸シテ當面ノ敵ヲ撃破シ爾後上海
及同地北方ノ要線ヲ占領ス

第二 指導要領

一、軍ハ概ネ第十一師団ノ主力ヲ
以テ瀏河鎮方面ヨリ第三師団及
軍直部隊主力ヲ以テ呉淞方面ニ
上陸シ上海周辺ノ敵ヲ掃滅ス呉
淞方面ニ上陸スルニ方リテハ海
軍陸戦隊ノ掩護ヲ予期ス
二、掃滅作戦ノ進捗ニ伴ヒ状況之
ヲ要スレハ黃浦江上流方面ニ機
動シテ滬杭鐵道ヲ遮断セシムル
コトアリ

三、當面ノ敵ヲ撃破シタル後上海
及其北方ノ要線ヲ占領シテ租界
ヲ掩護ス

四、情況ニ依リ当初一部ヲ以テ上
海租界内ニ上陸シ海軍陸戦隊ヲ
増援スルコトアリ
五、上陸後成ルヘク速ニ上海附近
ノ飛行場ヲ占領整備ス

ライター Lighter 〓 はしけ 〓 船の
積荷を運搬して波止場との間を往
來する平底船 〓 三省堂ホルト英和
辞典

是レ過早二軍ノ根本的作戰方針ヲ動揺セシムルモノナルヲ以テ之ヲ採用セス 依然第三師団ヲシテ海軍ノ協力(或ハ多分艦砲援助ノミナラン)ニヨリ之ヲ奪取スルノ方針ヲ繼續シ之レカ準備ノ為メ時日ノ遷延ハ已ムナキコトトセリ

要之呉淞鎮ノ攻撃ハ軍幕僚始メ往年下元旅団ノ失敗ノ歴史ナトヲ思ヒ稍臆病ニ過クル感アリ師団モ前面ノ敵情ヲ奔命シ速ニ呉淞鎮ヲ攻撃スルノ意氣乏シキ感アルヲ以テ 聊カ之ヲ督励スルノ要ヲ認メタル次第ナリ

參謀總長、陸軍大臣、小磯朝鮮、香月北支那司令官ヨリ上陸戰鬪成功ノ祝電ヲ受ク
又此日廟議ニ依リ山東省ニ於ケル軍ノ作戰ヲ止メ 青島居住民ハ要スレハ撤去ノコトニ決シタル旨海軍ヘ入電アリ 又參謀本部ヨリ北支作戰ヲ迅速ニ解決スル目的ヲ以テ方面軍ヲ編成シ(寺内大將司令官)新二16D及特設108・109ノ三師団ヲ派遣シ 第一軍(香月)第二軍(西尾)ヲ編成スルコトニ決シタル旨電報アリ

當軍ニ對シテハ昨日更ニ重砲兵及攻城砲ノ一部ヲ増加スルノ入電アリタルモ 第十一師団ノ一聯隊及第十四師団ニ就テハ尚何等ノ電示ナシ 參謀本部ハ尚當軍ノ兵力増加ノ意決セサルモノノ如ク 況ヤ根本的對支作戰ノ方針トシテハ依然北支ニ重点ヲ置クノ意變ラサルモノト思ハレ 當局ノ固執セル作戰方針ヲ持統ニ関シ不少遺憾ノ念ニ禁セス 仍テ原田少將ヲシテ大使館附武官ノ見地ニ於テ 當方面ノ敵狀判斷ニ就キ意見ヲ當局ニ打電セシムル様申含メタリ 蓋シ予ハ江南地方ニ於ル支那軍ノ作戰ニ相當攻勢の意志アルモノト判斷シタレハナリ

◇八月二十七日

此日依然呉淞鎮地ニアリテ後続人馬ノ來着ヲ俟ツ

第十一師団方面ノ戰況

第十一師団ハ依然昨日來ノ線ニ於テ 後方補給ノ整備ヲ俟チツツ主トシテ敵情ノ偵察ヲナス 羅店鎮ニハ相應ノ防禦設備アリ 尚此地及嘉定縣城ニ對シテ敵軍漸次兵力ヲ増遣シツツアル

モ其兵力未詳

此日各部隊ノ大小行李人馬ハ殆ト上陸ヲ了リ 更ニ騎兵中隊モ上陸ヲ了リ輜重一中隊モ本夜泊地ニ到達ノ予定

尚本日第十一師団ヨリ歸來セル軍參謀ノ言ニ依レハ 去二十五日我工兵中隊ハ一時羅店鎮ニ侵入スルヲ得タルモ 敵ノ攻撃ニ遭ヒ敗退シタルモノニシテ 補給ノ不充分ニ伴フ步兵隊ノ前進遅レタル為メ此不覺ヲ取りタルハ遺憾ナリ

尚第一線部隊ハ既ニ携帶口糧ヲ使用シ尽シ 人家ヨリ米ノ若干ヲ徵發シ粥ナトヲ食シアリト云

第三師団方面ノ戰況

第三師団モ依然昨日來ノ陣地ニ在リテ敵情ノ偵察ヲナス 夫々此師団前面ノ敵ノ攻撃ハ稍ヤ緩和セルモノノ如ク 左翼方面ニ於テハ殷行鎮ヲ占領シ其戰線ヲ若干前進セシメタルモ 此方面ニ於テ過早ノ前進ハ徒ラニ戰線ヲ拡大スルニ過キササルヲ以テ注意ヲ与ヘシメタリ

吳淞鎮及其西北方地区ニハ敵兵若干増加ノ模様アリ 師団ハ此方面ノ敵ヲ攻撃スル為準備中ナルモ 未タ成案ヲ得ルニ至ラサルハ遺憾ナリ

海軍ヨリ陸戰隊ノ一部ヲ増援セシメ度希望ナルモ 是亦今日ノ処実行不能ノ狀勢ナリ 此日迄ニ於ケル師団ノ死傷ハ約五百ヲ算シ死者割合ニ多シ

此日68 iノ人馬、聯隊砲等ノ一部來著 陸揚ヲ了リ漸次兵力ヲ増シツツアリ

◇八月二十八日

此日依然呉淞鎮地ニ在リ

第十一師団ノ戰況

第十一師団ハ今朝來海軍ノ爆撃ニ次キ午前八時ヨリ羅店鎮ノ攻撃ヲ開始シ 正午同地ヲ占領シ同鎮西方、南方地区ヲ占領シ尔後ノ前進ヲ準備ス

*下元旅団ノ失敗ノ歴史II第一次上海戰當時、下元能弥少將の指揮する歩兵第二十四旅団が苦戦したことを指す

松井軍司令官の訓示

茲ニ大命ヲ奉シテ上海派遣軍ヲ統率スルニ方リ冷ク隷下部隊ニ告ク 上海派遣軍ノ任務ハ速ニ上海附近ノ敵ヲ掃滅シ在留帝國臣民ヲ保護スルニ在リ

惟フ二支那國政府ノ不信ニシテ暴戾ナル神人共ニ許サザル所今ヤ上海ニ於テモ不法攻撃ヲ我ニ加ヘ勇敢ナル海軍之ニ應戰シテ激闘ヲ交フルコト尙余ニ及ヘリ

軍ハ速ニ上海附近ニ上陸シ其ノ急ニ應セサルヘカラス 各部隊宜シク万難ヲ排シ死力ヲ竭シ奮勇ヲ示シ敵ヲ擊破シ上宸襟ヲ安シ奉リ下國民ノ待望ニ副ハンコトヲ期スヘシ

今次戰場ハ彼国内ニシテ加フルニ列國ノ權益近ク存在ス 軍ハ斷乎敵軍ノ剿滅ヲ計ルト共ニ無辜ノ被國民ニ對シテハ善ク仁慈ヲ施シ在留諸外國軍並ニ外國人民ニ對シテハ其ノ權益ヲ尊重シ言動ヲ慎ミ秋毫ノ隙アルヘカラス 是即チ皇軍ノ本領ニシテ武威ヲ宇内ニ顯ハシ

シ正ヲ中外ニ掲ケテ戰勝ヲ百世ニ完フスル所以ナリ
戰ニ臨ミ敵ヲ恐レサルト共ニ之ヲ侮ルヘカラスハ明治天皇夙ニ聖訓ニ諭ヘ給フ所特ニ細心ノ注意ヲ望ム 又今次戰鬪ノ成果ハ殊ニ海軍ト密接シク陸海一心和衷協力ノ実ヲ挙ケ以テ目的ノ達成ニ務ムヘシ

之ヲ要スル二軍ノ任務ハ重大ナルノミナラズ今後狀勢ノ推移ニ應ジ其ノ責任更ニ重キヲ加ヘントシ軍緒戰ノ成否ハ皇國ノ興廢ニ關スル所真ニ大ナルモノアリ
隷下將兵夫レ克ク軍一體各々訓練ノ精華ヲ最高度ニ發揚シ本職ノ示ストコロニ邁進シ速ニ暴虐ナル敵軍ヲ戡定シ以テ 大元帥陛下ノ御倚託ニ副ヒ奉ランコトヲ期スヘシ

昭和十二年八月二十一日
於軍鑑足柄

上海派遣軍司令官 松井石根

敵ハ主力ヲ以テ大場鎮方面ニ一部ハ嘉定方向ニ退却ス 其兵力五、六團ヲ算ス
瀏河鎮方面ノ状況依然タル如シ 師団ハ強テ之ヲ攻撃スルノ企図ヲ有セサル如ク何等ノ報ナ
シ

第三師団ノ戦況

師団ハ依然現在地ヲ固守シ徐ニ呉淞鎮ノ攻撃ヲ準備中ナリ 此夜正面ノ敵ハ我戦線ニ向ヒ攻
撃シ来レルモ之ヲ撃退セリ 第三師団ノ呉淞鎮攻略ハ第三師団ノ兵力余力少ナキト同地陣地ノ
堅固ナルニ因シ師団ノ計画意ノ如ク進捗セズ 仍テ第十一師団ヲシテ月浦鎮、楊行鎮方面ヨリ
有力ナル部隊ヲ以テ之ニ協力セシムルコトニ決シ 其内意ヲ第十一師団ニ伝ヘ準備セシム 蓋
シ幕僚ノ意見ハ寧ろ第十一師団ヲシテ呉淞ヲ攻撃セシムルヲ利トスルノ意見多キモ 予ハ第三
師団ノ名譽ノ為メ依然同師団ヲシテ之ヲ実行セシメ 第十一師団ノ一部ヲシテ之ニ協力セシム
ルヲ可ナリトシ 右様取計ヒタルモノニテ海軍ノ密接ナル協力ヲ頼リ 呉淞鎮北方江岸方面ヨ
リ之ヲ攻撃セシムルコトトナレリ 尚海軍陸戦隊ヲシテ之ニ協力セシムルコトハ到底海軍ノ欲
セサル所ナリト察セラレタルニ依リ 之ヲ要求セサルコトトセリ
此日軍司令部ノ残部到着 各部長ト会見ス一同元氣ナリ

◇八月二十九日

此日由良ニ在リテ川沙鎮江岸ニ転錨シ 第十一師団根拠地状勢ヲ視察シ夕刻呉淞鎮地ニ帰還
ス

第十二師団方面ノ戦況

第十一師団ハ此日現在地ニ於テ尔後ノ前進ヲ準備ス
先遣支隊ノ残留人馬ハ此日ヲ以テ全部ノ揚陸ヲ了ヘ 根拠地ノ設備モ海軍ノ協力ニ依リ漸次
整頓シツツアリ 揚陸効程モ水路ノ設定ト上海ヨリ徵用セル小蒸汽、ライターノ到着ニ依リ著
ク増加セルト 潮ノ干満漸減ニヨリ最早終日揚陸ヲ実行シ得ルコトトナレリ

第三師団方面ノ戦況

第三師団ハ昨夜全線ニ於テ再度敵ノ逆襲ヲ受ケタルモ之ヲ撃退セリ 歩第六聯隊長倉永大佐
之レカ為メ戦死ス

第三師団ノ呉淞鎮攻撃ハ其後海軍ト協同偵察ノ結果 愈々明後三十一日朝ヲ以テ江岸方面ヨ
リ決行スルコトニ決シ 第十一師団ヲシテ有力ナル歩砲部隊ヲ以テ之ニ協力セシメ 且ツ呉淞
砲台、宝山县城附近ノ敵ヲ掃蕩スヘキヲ命令セリ

第三師団ノ揚陸地ハ終日終夜呉淞鎮ノ敵部隊及新二江灣鎮附近ニ布置セラレタル敵重砲ノ射
撃ヲ受ケ 揚陸困難ニシテ運送船ノ船長以下船員ノ死傷相次クニ至リ 一時運送船ノ荷物揚陸
ヲ見合セ呉淞鎮地ニ仮泊セシムルノ已ムナキコトトナレリ

此日軍直属高射砲隊、無線電信隊等ノ揚陸ヲ了リ 高射砲隊ハ第三師団長ノ指揮ニ属シテ根
拠地附近ノ防空ニ任セシム

由來軍ハ「ミミズ」ノ如キ形ニテ輸送セラレツツ 而カモ其先端ハ海軍輸送ノ為メ益々前方
ニ引延サレタルモノニテ 上陸以來一週日ノ今日漸ク先遣隊全部ノ集結ヲ了セリ 此間幸ニ大
規模ナル敵ノ攻撃ナカリシ為メ能ク予定ノ線ヲ占領シ兵力ノ集結ヲ完フスルヲ得タルハ 我將
兵ノ勇武ニ頼ルコト勿論ナルモ天候其他天佑ニ俟ツモノ多ク 殊ニ此間海軍ノ密接熱心ナル援
助ノ結果ナリト信ス 第三師団方面ニ於テ殊ニ然リトス

◇八月三十日(杉山陸相ニ私的意見具申)

此日依然呉淞鎮地ニ在リ

第十一師団方面ノ情况

昨日來当師団方面ノ視察ニ赴キタル長參謀歸來セリ 其報告ニ依レハ二十八日羅店鎮ノ攻撃
ハ中々ノ苦戦ニシテ 和地聯隊長自ラ軍刀ヲ振フテ敵数名ヲ斬リタル程ニテ 能ク敵ヲ撃攘シ
テ同鎮東南地区ヲ確保シアルモ前面ノ敵ハ約二万二連シ 新ニ嘉定方面ヨリ増援セルモノヲ合

『上村利道參謀副長日記』
八月二十八日 夕刻驟雨稍下ル

(11D羅店鎮占領)

第十一師団ハ正午頃羅店鎮ヲ占
領ス、今度ハ確實ナル事實ナリ、
聊カ明朗ナル氣持ス、3Dノ呉淞
鎮攻撃尚策定11Dニ救援ヲナサシ
メントセリカ軍司令官ハ師団ノ面
目ヲ思ヒ之ニ同意セズ、武士ノ情
モツラキモノナリ

『飯沼守日記』八月二十九日

二十九日朝ノ戦鬪ニ於テ歩6倉
永聯隊長戦死ノ報告アリ 戦死者
ニ対シ云々スルハ礼ニアラサルモ
師団幕僚ノ間ニ於テ同聯隊長ノ二
十三日以来ノ戦鬪指揮勇敢ニモア
ラス巧ニモアラストノ声アリシヲ
以テ之ヲ耳ニシ強ヒテ戦死シタル
ニアラサヤトノ疑ヲ抱ク向アリ
其真偽ハ別トシテ殊ニ緒戦ニ於ケ
ル隊長ノ指揮、勇敢ハ隊ノ掌握ハ
勿論延ヒテハ其隊ノ戦力ニ影響ス
ル処少カラス

『上村利道參謀副長日記』
八月二十九日 晴、曇

由良溯江川沙鎮江沖ニ至ル、上
陸シテ軍需品ノ集積状況ヲ視察ス
流汗瀰リナリ

倉永歩六長本朝戦死ノ報アリ午
前五時半頃戦況視察ニ本部ノ宿舍
ヲ出テシ途端、小銃弾飛來シ胸部
ヲ貫通セシ由ナリ、氣ノ毒ナリ
呉淞鎮攻略ノ要愈々切ナルモノ
アルヲ覺エ、軍司令官ハ3Dノ面
目ヲ重シ本日モ11Dノ一部ヲ以
テスル此攻撃ヲ承認セラレズ3D
ハ明後三十一日午前十時実施スル
予定ニシテ目下準備ヲ実施中

歩兵第四十四(高知)聯隊長

歩兵大佐 和知應二6期

シ 依然我戦線近ク対峙シ我ヲ反撃スルノ姿勢ニアリ当方面ノ情况如此 而カモ軍ハ昨日有力ナル部隊ヲ以テ呉淞方面ノ敵軍掃蕩ヲ命シタルヲ以テ 師団ハ已ムナク瀏河鎮方面ヨリ43聯隊本部ト砲兵中隊ヲ召致シ 残余ノ一大隊ヲ以テ退イテ湯宅南方地区ヲ占領シ師団ノ右側ヲ援護セシメタリ

斯クテ43 i (一大欠) 砲兵一中隊ハ夜半羅店鎮附近ヲ出発シ 月浦鎮附近ヲ經テ呉淞方面ニ前進スルコトナレリ

第三師団方面ノ情况
第三師団ハ現在ノ線ニ在リテ明日ノ為メノ呉淞鎮附近攻撃ヲ準備シ 近藤海軍少將ノ指揮スル第八水雷戦隊トノ間ニ密接協同動作ヲ図リツツアリ

此師団ノ応急動員部隊ノ充足人馬ハ今朝來続々呉淞鎮附近ニ到着シ 一部ノ材料、糧秣等ノ外人馬ノ全部ヲ揚陸スルヲ得 明日ノ呉淞攻撃ニ要スル兵力ヲ増加シ得タルハ幸ナリ

要之第三師団方面ノ戦況ハ之ニ因テ一時ノ小康ヲ得 又漸次呉淞鎮附近ヲ攻略シテ根拠地ヲ安固ナラシメ得ルノ見込立チタルモ 第十一師団方面ノ戦況ハ今後更ニ困難ヲ加フルノ危険アリ 篤ト考慮ヲ要スヘキ情勢ニ在リト判断セラレ 幕僚ニ命シテ一般情勢判断ノ研究ヲ命スルト共 私信ヲ杉山陸相ニ送り此際上海南方ニ対スル考慮上カラモ 一師団ノ増兵ヲ必要トスル旨申遣ス

数日前在南京英国大使ヒューゲッセン氏ハ 陸軍武官其他ト共ニ自動車ニ依リ南京上海道ヲ上海ニ來ル途中 某飛行機上ヨリ機関銃射撃ヲ受ケ重傷ヲ負ヘリ コハ多分我海軍飛行機ノ射撃ニ依ルモノラシキモ 昨今支那軍飛行機モ機体ニ赤丸ノ印ヲ附シ我飛行機ニ模スル事実アリ果シテ日支何レノモノナルヤ明カナラス 殊ニ支那共産党ハ此際日本軍ノミナラス上海租界其他ヲ爆撃セシ事実アリ 又一昨日米商船フーパー号ハ呉淞下流揚子江内ニ仮泊中 支那飛行機ノ爆撃ヲ受ケ死傷者ヲ生セシ事実モアリ 今後共産派ノ行動ニ付テハ端倪シ難キモノアリ自然上記英国大使ノ負傷ノ如キモ敢テ之ヲ我軍ノモノト断定スルヲ得サルノミナラス 仮令我

軍ノ射撃ニヨルモノトスルモ 警告ナク戦場内ヲ通過スル内外人カ戦闘ノ傍杖ヲ受クルコトハ已ムナキ次第ニシテ 我國ヨリ敢テ慌テ遺憾ノ意ヲ表スヘキ性質ノモノニ非ス 我政府及上海外ム、海軍ノ態度ハ余リニ慌テ過キタル感アリ

又先日來英国商船ノ上海港ニ出入スルモノ毎日数隻ニ及ヒ 内「ガソリン」船ト認ムヘキモノノ英国軍艦ニ護衛セラレ入港セルコトモアリ 英国船力支那側ヲ利スヘキ輸入ヲ続行セルコトハ事実ナリ 蓋シ今後は等ノ状勢ハ戦時状態ノ永続セラレ支那軍需品漸ク欠乏ヲ告グルニ際シ益々頻繁ヲ加フヘク察セラル 依テ予テ希望セシ沿岸封鎖ヲ実行スルノ手段ニ出ツコト益々必要ナルヲ痛感ス 依テ此旨大使館附武官ニ通シ重ネテ之ニ関スル意見ヲ具申スヘク懇懇ス 因ニ海軍ノ行ハントスル封鎖ハ消極的ニシテ第三国船ニ対シテ実功ナシ

◇八月三十一日(參謀總長、陸軍大臣ニ情勢判断具申)

此日呉淞鎮地ニ在リテ第三師団ノ呉淞鎮攻撃ヲ視察ス

第十一師団ノ情况

第十一師団ハ依然現在地ニ在リル後ノ攻撃ヲ準備ス

瀏河鎮方面敵ノ進出ハ予ノ最モ痛心シアル処ナルモ幸ニ未タ此事ナク 我第一水戦隊ノ駆逐艦二隻ハ近ク瀏河河口附近ニ在リテ同方面我部隊ニ協力シアリ

第三師団ノ呉淞砲台攻撃ニ協力スヘキ43 iノ部隊ハ 此日近ク獅子林砲台ニ迫リ同方面ノ敵ヲ攻撃中

第三師団方面ノ戦況

鷹森大佐ノ率ユル68 i (II欠) 砲一中隊ハ 第八水雷戦隊及第八戦隊ノ有力ナル砲撃并飛行機ノ爆撃ニ次キ 午前十時発動艇ニヨリ呉淞鎮北方江岸ニ上陸シ同地附近ヲ占領シ 終日敵ノ頑強ナル抵抗ヲ排除シツツ砲台灣附近ヨリ呉淞鎮西端ニ至ル線ニ前進ス 前面ノ敵ハ依然呉淞砲台、商船学校附近ヨリ西方大金家村附近ニ巨ル線ヲ保持シ夜ニ入ル

「上村利道參謀副長日記」
八月三十日 晴

〔軍司令官ノ後統部隊到着〕
3 Dノ呉淞攻撃ニ11 Dノ僅カニ一大隊B A一中ヲ以テ協力セシムルノミニテ軍ノ意図ニ合セス然モ此大隊長ハ一番鈍重ナルモノナリト聊力軍ト師団トノ間ニ於テ感情ノ疎隔ヲ來セルモノナキヤ
11 D參謀校井少佐本夜到着、參謀本部ニテハ当方ノ情况サッパリ判ラスト稱シ居ル由、アレ丈發電セルカ此電報力到着シオラヌ模様ナリ

「飯沼守日記」八月三十一日

〔上海派遣軍〕第二課(作戰課)ノ情勢判断トシテ中央軍ノ最精銳部隊ヲ此正面ニ用ヒ且集中セル兵力意外ニ大ナルヲ以テ我レモ五ヶ師団位ヲ以テ之ニ一打撃ヲ与フルコトカ即時局ヲ迅速ニ收拾スル所以ナルヲ中央ニ打電

「上村利道參謀副長日記」
八月三十一日 晴

(68 i 呉淞鎮ヲ占領ス)
午前十時カラ開始セラレタル3 Dノ68 i主力ノ呉淞鎮攻略ハ見事ニ成功ス、海軍ノ協力ノ効大ナルモノアリ、周密ナル計画ノ下ニ断行スルトキハ成功間違ナシ
長少佐帰來11 D方面ノ戦況頗ル苦境ニ在ルヲ訴フ、N大佐ニ対スル反感相當醸成セラレツツアルヲ見ル

昨日来ノ研究ニ基キ 予ハ參謀総長及陸軍大臣ニ対シ江南方面作戦ニ関スル状勢判断ヲ具申ス 其要支那軍ハ津浦鐵道方面ヨリ招致セル陳誠ノ軍ヲ併セ 計約十五六師團ヲ以テ機ヲ見テ我軍ニ対シ攻撃ヲ開始スル如ク 軍ハ是等ノ大兵團ニ対シ鉄槌ヲ加フルヲ要シ其兵少クモ五ヶ師團ヲ要スヘク 差当リ第十一師團ノ天谷支隊及待機中ノ第十四師團ヲ当方面ニ派遣スルヲ要スト云フニアリ 尚此判断ハ第三艦隊及川越大使ニ通報シ其同意ヲ得タルヲ以テ 右両方面ヨリモ夫々外務、海軍ニ意見ヲ具申スルコトニ取計ヒタリ

南京政府ハ一昨二十九日 露支不侵略条約(廿一日締結)ヲ発表セリ 其内容從來露國ト西歐諸國トノモノニ大要同一ナルモ 我大使館附武官ノ得タル情報ニ依レハ露支兩國間ニハ同時ニ秘密協定成立シ 或程度ノ攻守同盟ヲ締結セシコト事実ナルカ如シ

◇九月一日

吳淞錨地ニアリテ吳淞砲台攻撃ヲ視察ス

第十一師團方面ノ情況

狀勢変化ナシ

淺間支隊(43 i)ハ朝来獅子林砲台附近ノ敵ヲ攻撃シ夕刻全ク同砲台ヲ占領ス

此日第十一師團ノ天谷支隊(12 i砲兵一大)ハ派遣軍ニ復帰セシメラル筈ノ旨參謀本部ヨリ來電アリ

第三師團ノ方面ノ情況

鷹森聯隊ハ朝来攻撃ヲ続行シ正午頃商船学校附近及大金家村附近ヲ占領セシモ 砲台ニ占拠セル敵ハ頗ル頑強ニ同砲台ヲ死守シ 同日没迄我海軍ノ背後ヨリ援助射撃ニ係ハラス遂ニ之ヲ占領スルヲ得ス

吳淞クリーク右岸地区ニ於ケル敵ノ反撃ハ此兩三日来殆ト已ミ 僅ニ江灣鎮附近ノ砲兵(重砲)ニヨリ鐵道橋樑附近ノ我揚陸作業ヲ妨害スルニ過キス 然レトモ此間我軍ノ揚陸ニ支障多

ク効程著ク遅延セリ 而カモ第三師團ノ後統部隊モ既ニ吳淞ニ着 揚陸ヲ急クヘキ情勢ナルヲ以テ軍ノ糧秣其他ノ荷物ハ一時上海楊橋浦埠頭ニ揚陸セシメ 海軍ノ監視ニ依頼スルコトナレリ

此朝參謀次長ヨリ軍參謀長宛 昨日ノ意見具申ニ対シ返電アリ 其要ハ軍現在ノ任務ト実況ニ応シ今直ニ我意見ニ同意スル能ハサルノ意ナリ 尚第十四師團ハ既ニ北支ニ向ケ派遣セラレタル旨通報アリ 僅ニ天谷支隊ヲ第十一師團ニ復帰セシメタル外何等從來ノ方針ヲ改メス 予ハ今更乍ラ參謀本部ノ迷見固執ニ対シ深ク遺憾ニ禁ヘサルモ 暫ク狀勢ヲ靜觀シ自然ノ成行ニ委スコトニ決意セリ

尚昨日第三師團ノ吳淞鎮攻撃ニ際シ 恰モ同時黃浦江口ヲ下航シ來レル仏國砲艦カ著ク我発動艇ノ航行ヲ妨害セルノミナラス 該艦中ヨリ「ピストル」ヲ以テ我小艇ヲ射撃セシモノアリ 其事状明カナラサレト或ハ支那人カ仏艦ニ便乗シ來リ戰況ヲ視察セントシ 此種ノ惡戯ヲ為セシモノナルヤトモ察セラルルヲ以テ 直ニ第三艦隊及川越大使ニ通報シ仏國側ニ対シ嚴重抗議スヘク申入レタリ 尚將來此種ノコトアルニ於テハ 我陸軍ハ必スシモ仏國艦船ノ安全ヲ保証セサルヘキ旨通告セシムルコトトセリ

兩三日来支那空軍ノ來襲ハ頗ル少シ 毎朝川沙鎮江岸及上海ニ対シ小數飛機ノ小爆撃アルニ過キサルニ至レルハ 敵空軍ノ勢力萎靡セルカ爆弾ノ欠乏ニ因ルモノナルヘシト思ハル際 既述露支密約ノ結果 蘇國ハ近ク新疆方面ヨリ飛行機七十余台ヲ支那ヘ応援スル旨日本カララジオ放送アリ 真否疑ハシキモ將來此種ノ事実現ノ機アルハ疑フヘクモアラス 我軍ノ特ニ注意ヲ要スルモノナルコトヲ痛感ス。

◇九月二日

此朝吳淞錨地ニアリ 午前十時頃吳淞砲台上ニ日章旗ノ翻フルヲ見欣懷極リナシ 終日同錨地ニアリテ68 i 43 i宝山鎮方面ニ向フ戰況ノ發展ヲ俟ツ

臨參命第九十号
命 令

- 一、天谷支隊ヲ上海ニ派遣ス
 - 二、參謀総長ハ天谷支隊ヲ上海ニ派遣シ上海派遣軍司令官ノ隸下ニ入ラシムヘシ
 - 三、天谷支隊ハ揚子江口到着ノ時ヲ以テ參謀総長ノ指揮下ヲ脱シ上海派遣軍司令官ノ隸下ニ入り且其編組ヲ解キ本來ノ所屬ニ復帰スルモノトス
- 昭和十二年九月一日
奉勅伝宣

參謀総長 載仁親王

參謀總長 載仁親王殿下

上海派遣軍司令官 松井石根殿

淺間支隊ハ淺間義雄16男大佐の指揮する徳島歩兵第四十三聯隊

『飯沼守日記』九月一日

軍当面ノ敵ヲ徹底的ニ撃滅スルハ時局ヲ迅速且有効ニ收拾スル所以ニシテ之カ為ニハ最少限五師團ヲ要スル旨ノ情勢判断ニ対シ次長ヨリ同意シ難キ旨電報アリ且独14 Dハ既ニ北支ニ使用セラレ天谷支隊ハ当軍ニ復帰セシメラルル筈トノコト

九月二日 閣議で北支事變を支那事變と改稱。

「仏國砲艦云々」ピュリッツァー賞を受けたニール・シーハン著『輝ける嘘 A BRIGHT SHINY NG LIE』(一九八八)による。当時、在上海・アメリカ第四海兵連隊情報部のブルート・クシタ中尉は、望遠レンズを装備した海軍のカメラマンを乗せたタグボートを指揮し、陸上を砲撃中の日本の駆逐艦隊の間を悠々と縫って揚陸作業中の日本軍の秘密兵器・上陸用舟艇を撮影し、それを元にした模型を付した報告書を作ワシントンのホランド・スミス

第十一師団方面ノ情况

当師団主力方面ハ朝敵ノ攻撃ヲ受ケタルモ之ヲ撃退セリ 劉河鎮方面戦況変化ナシ 淺間支隊ハ今朝來獅子林砲台東南方ニ進出セルモ午後前進セス 月浦鎮方面ノ情况不明ナルモ同鎮及其東方地区江岸ニ巨ル地区ニ相当ノ敵兵アルカ如シ

第三師団方面ノ情况

呉淞クリークノ右岸地区ハ殆ト敵ノ来襲已ミ 鐵道棧橋附近ノ揚陸モ容易トナレリ クリーク左岸ニ於ケル68 iハ今朝呉淞砲台ヲ占領シ其西方大金家村ニ巨ル線ニ在リ 前面ノ敵ハ尚尹家宅附近ニ在リテ抵抗シ 宝山城ニ逃入セル敵兵五百ハ依然城内ヲ占拠ス 第三師団長ハ努メテ宝山城守備兵ノ強攻ヲ避ケ 宣伝宣布ニ依リ投降セシムルノ策ヲ案シア ルモ恐クハ実功ナカルヘシ

第三師団ノ後続兵団ハ昨日來呉淞錨地ニ着シアルモ 揚陸効程涉取ラサル為待機シアリシカ 本朝呉淞砲台ノ占領ニ依リ商船学校埠頭ニ上陸セシメ得ルニ至リシヲ以テ 海軍ノ援助ニ依リ 同棧橋ノ修理危険物ノ除去ヲ了ヘ 午後ヨリ第十八聯ノ部隊ノ揚陸ヲ開始スルヲ得タリ

於此軍ハ第三師団長ニ命シ 第廿九旅団ノ上陸終了后之ヲ基幹トスル部隊ヲ以テ楊行鎮ヲ占領シ 尔後刘家行、顧家宅ノ線ニ前進セシメ 呉淞クリーク右岸ノ部隊ハ現在地ニ在リテ漸次西方ニ其戦線ヲ拡張スヘキヲ命セルモ 第廿九旅団ノ前進開始ハ早クモ五日朝トナルヘシト察セラル

曩ニ青島ニ派遣セラレタル天谷支隊ハ 第十一師団ニ復帰セシメラレ今夜半呉淞錨地ニ到達スル旨來電アリシヲ以テ 此部隊ハ其携行スル上陸材料ニヨリ呉淞鎮北側江岸ニ上陸セシメ 連二月浦鎮附近ノ小敵ヲ撃破セシ羅店鎮ニ向ヒ前進セシメ 同方面敵ノ側背ヲ攻撃セシメ師団長ノ隷下ニ入ラシムルコトトシ之ニ戦車一中隊ヲ配属セリ 此部隊ハ遅クモ五日朝出發シ得ルナラン

又淺間支隊ハ天谷支隊ト協力シ月浦鎮北方地区ヨリ羅店鎮ニ復帰セシムヘク区処セシム

本支隊ハ元來宝山城附近ノ掃蕩ニ任シタルモノナレト 其前進意ノ如ク進捗セサルヲ以テ其目的ヲ放棄セシムルニ決シタル次第ナリ 之レ他面宝山城ノ掃蕩ハ最早此支隊ノ援助ヲ要セサルニ至レルニ由ル

尚公大飛行場西側地区ノ占領ハ予テ第三師団ニ命シタル処ナリシカ 当面ノ状況ニヨリ今日迄着手スルニ至ラス 一方飛行場ノ設備ハ略終了シ我偵察隊モ既ニ昨日錨地ニ到達シタルヲ以テ 第三師団ニ命シ來着セル18 iノ中隊ニ野砲一中隊ヲ附セシメ 之レニ軍直屬ノ戦車一小隊ヲ配属シ楊橋浦埠頭ニ上陸セシメ 該方面海軍陸戰隊指揮官ノ隷下ニ属シ沈家巷鎮東側ニアル敵ノトウチカ陣ヲ攻撃該地附近ヲ占領セシムルコトトセリ 尚該部隊ハ陸戰隊ノ状況ノヲ許セハ其目的ヲ達シタル後 第三師団ニ復帰セシムル様海軍ト交渉中ナルモ 一度此方面ニ増援セル部隊ハ今後恐クハ之ヲ撤去スルコト能ハサルヘシト予想セラルルニ依リ 此方面ニ使用スル兵力ハ本目的ヲ達スルニ必要ナル最小限度ニ之ヲ使用シタル次第ナリ 蓋シ將來軍ノ攻勢転移ノ場合ニ於ケル呉淞クリーク右岸地区ノ攻撃ハ 勉メテ其正面ヲ鐵道(呉淞―上海)ノ西方ニ制限シ 江湾鎮ヲ避ケ其西方大場鎮方面ニ攻撃セシムルノ意圖ヲ有スレハナリ

◇九月三日

此日依然呉淞錨地ニ在リ

第十一師団方面ノ戦況

情勢変化ナク羅店鎮前面ノ敵ハ漸次其兵力ヲ増加シテ我右翼ヲ包围シツゝアリ

劉河鎮方面ノ敵ハ依然攻撃シ來ラサルモ 尚根拠地防禦ノ為メ第十一師団ノ一中隊ヲ江岸ニ沿ヒ配置セシム

淺間支隊ハ終日沙竜口ノ線ニ迄漸ク前進セシム 前面ノ敵ニ阻止セラレ前進甚ク遲滞シアルハ遺憾ナリ

天谷支隊ハ今朝未明呉淞錨地ニ到着セリ 依テ直ニ呉淞鎮北側地区ニ上陸セシメル後ノ前進

准將に提出した。

日本の駆逐艦はアメリカの国旗をかかげたタグ・ボート通過中は、砲撃を中止し敬礼を送ったという。

スミス准將は、のちに海兵隊を指揮して硫黄島に進攻し「近代水陸両用作戦の父」と言われた人物である。

この結果、サイパンからノルマンディーまで、第二次世界大戦で活動した標準上陸用舟艇LCVPほかが開発される。(同書上巻345頁347ページ参照)

また、「松井日記」九月二十二日の項に「運輸界の重鎮」として、その上海着任を喜ばれた田尻昌次18期少将こそ、アメリカ軍が模倣したその「大発」を独自に創案し、多年開発にその心血を注いだ人物であった。

「上村利道参謀副長日記」
九月三日 晴 昨日ニ比シ幾分涼シ

68 iノ呉淞攻略ハ日和見ニシテ成功セス、淺間支隊(43 i)ノ進捗亦遅々タリ、軍司令官連日ノ採ミ出サレシ感アリ何レモ連日ノ戦闘ニテ戦闘力衰減ノ結果ナランカ

天谷支隊長命令受領ノ為メ來艦、貴部隊ノ戦闘行動コソハ一ノ標準ト見ルヲ得ヘキナリ

3 Dノ公大飛行場攻略ニ就テ海軍満足ノ感ヲ与エス陸海軍ノ協同ニ龜裂生セントス

参謀本部ノ西村少佐昨夜命ヲ受ケテ來部

ヲ準備セシメタリ 此朝艦上ニテ天谷少将ニ会见シテ命令ヲ与ヘ 師団カ一刻千金ノ思ヒニテ支隊ノ来着ヲ待チアル旨ヲ告ケ 速ニ浦鎮方面ニ前進シ師団前面ノ敵ノ側背ニ進出スヘキヲ命ス

二、第三師団方面

宝山城附近ノ敵ニ対シ今朝飛行機ヨリ投降勧告ヲ与ヘ 午後二時ヲ期シ聴カサレハ之ヲ攻撃スルコトニシタルカ敵兵毫モ動揺ノ色ナキヲ以テ 午後三時ヨリ砲撃ヲ開始シ若干攻撃ニ前進セシカ当師団ノ宝山攻撃ノ氣勢昂ラス 終日積極的攻勢ニ出テサルハ天谷支隊ノ進出ヲ遅レシムルヲ以テ 夜ニ至リ更ニ第三師団長ニ諭スニ速ニ宝山城ヲ攻略シテ天谷支隊ノ進路ヲ開クヘキヲ以テセリ

尚此日第三師団ハ再度明日勦降ヒラヲ撒布シ度意嚮ヲ報セルヲ以テ 軍ノ威信ヲ害スルモノト認メ之ヲ否認セリ

公大方面攻撃ニ協力スル陸軍部隊ノ兵力寡弱ナルニ付 海軍側ノ感情面白カラサル模様 最モ至極ニ付更ニ該方面ノ攻略方法、使用兵力ニ付研究ヲ命ス

◇九月四日

此日呉淞鎗地ニ在リ

一、第十一師団方面ノ戦況

全般ニ変化ナク羅店鎮前面ノ敵ノ攻撃ハ尚已マサルモ漸次小規模トナリ 我砲火ニ依ル敵砲兵ノ沈黙ニヨリ当面敵ノ志気モ逐日衰傾ノ色アリトノ報アリ 先ツ此方面モ当分ハ少クモ安心ナリ

浅間支隊八月浦鎮北方各所ニ江岸ニ向ヒ 配置セル敵ト交戦ヲ続ケ相当ノ戦鬪ヲナシ兩大隊長死傷シ砲彈モ尽キタルコトヲ確メ 其支隊ノ前進遅カリシ所以ヲ知ルヲ得タリ 依テ此夜呉淞ヨリ更ニ砲彈ヲ補給シ明日ニ於ケル天谷支隊トノ協同戦鬪ニ当ラシムルコトトセリ

天谷支隊ハ停泊場司令部大小発動艇ノ努力ニヨリ 本日正午迄ニ其戦鬪部隊ノ上陸ヲ了ヘ即時前進ヲ図リシモ 宝山城及其西方ノ敵兵尙後退セサル為メ已ムナク其前進ヲ明日ニ遅延スルノ已ムナキ事トナレリ

第三師団方面ノ戦況

呉淞クリーク右岸ノ敵ノ志気ハ糧食ノ欠乏ニ因シ日々衰傾シツツアル如シ

宝山城及其西南方地区ハ依然敵兵頑強ニ抵抗ヲ続ケツツアリ 師団ハ68 i (一大隊欠) ヲシテ之ヲ攻撃シタ刻迄ニ漸次其西方河岸陣地迄圧迫スルヲ得タルモ 遂ニ之ヲ撃破スルニ至ラズシテ夜ヲ徹ス 此クテ宝山城ノ攻撃ハ明日迄之ヲ遷延スヘキ師団ノ意圖ナルヲ知り 天谷支隊前進ヲ遅滞セシムルノ不利ヲ思ヒ 午後三時ニ至リ更ニ師団ヲ督励スルノ意味ニテ速ニ宝山城ヲ攻略スヘキ命令ヲ与ヘ 又此日上陸ヲ完了セル曰砲大隊ヲ一時第三師団長ノ指揮ニ属シ宝山城ノ攻撃ニ協力セシムルコトトセリ

公大飛行場方面攻撃ニ関スル海軍トノ感情融和ニ就キ 特ニ芳村参謀ヲ派遣シテ第三艦隊ノ諒解ヲ遂ケシメ 尚当方面ニ使用スル18 iノ兵力ヲ完全ナル一大隊ニ増加シ 円滑ニ該方面陸戦隊トノ間ニ協力攻撃ノ準備ヲ整ヘツツアリ 明後六日払暁ヨリ攻撃ヲ開始スルヲ予定ナリ

以上ノ情况ニ基キ 予ハ全軍志気ノ振興上可成速ニ軍司令部ヲ水産学校附近ニ上陸セシメンコトヲ欲シ 前日来之カ準備ヲ急カシメアリシモ 通信設備ノ未了ニヨリ其意ヲ果スヲ得サルヲ以テ 不取敢輸送船一隻ヲ残置シ之ニ移乗シテ該地江岸ニ横付セシムルコトニシ 之レカ準備ヲ急カシメタリ

五郎上海ヨリ来ル 岡田尚ヨリモ書面アリ共ニ元氣ノ由 清モ上海ニアル由ニ付之レ又速ニ帰京スヘキ様申付ケタリ

◇九月五日(第三師団ノ消極態度)

此日宝山城前面船中ニ在リテ戦況ヲ視察ス

『飯沼守日記』九月三日

三・〇前大西参謀来艦、3 Dノ飛行場攻撃ハ全ク誠意ヲ認メ難ク海軍トシテハ将来協力シ得ス中央ニ電報スト迄激昂セリトノコトヲ伝ヘ3 Dヲ反省セシメントス 依テ兼任参謀ノ態度ニ就テモ話シ尚3 D参謀長ニ手紙ヲ書キ芳村参謀ヲ3 D、三艦隊ニ派遣スルコトトセリ

『飯沼守日記』九月四日

昨日艦隊 陸戦隊 3 D連絡ノ為派遣セル芳村参謀ノ言、3 D参謀長ハ予ノ手紙ニ対シ非常ニ憤慨シ芳村参謀ヲ叱ツタトノコト 中隊ニテ3 Dハ責任ヲ以テトチカ地帯ヲ奪取ストノコトニテ艦隊側モ陸戦隊モ免モ角了解セリ 別ニ3 Dニ連絡セル寺垣参謀ノ言ニ依レハ3 Dハ軍ヨリノ電報ニ依リ飯田大隊ヲ完全大隊トセリト

『上村利道参謀副長日記』

九月四日 晴

此日作戦ノ進展見ルヘキモノナシ 参謀本部ノ西村少佐ヨリ状勢ヲ聞ク、軍ハ現在ノ兵力ニテ消極的任務ニ甘んゼサルヘカラサル現状ニ在リ

一、第十一師団ノ情況

羅店鎮、劉河鎮方面變化ナシ

天谷支隊ハ午前七時吳淞砲台西北方地区ニ展開シ 18 iノ中間地区ヨリ前進シ独力宝山城ノ敵ヲ抑ヘツツ其西方西門大街ノ線ニ前進ス 其行動可賞

淺間支隊ハ依然沙竜江ノ線ニ在リテ天谷支隊ノ進出ヲ俟ツ 同師団ノ輜重ノ残余ハ本日ヨリ貴陽灣根拠地ニ上陸ヲ開始ス

二、第三師団ノ情況

吳淞クリーク右岸ノ狀勢變化ナシ 第六十八聯隊ノ主力ハ漸次敵ヲクリーク右岸ニ驅逐スルニ曹家沙東側橋頭堡ハ夕刻迄未夕之ヲ奪取スルヲ得ス

歩兵第二十九旅団ノ半部ハ昨日既ニ其兵力ヲ張家上附近ニ集結セルモ 34 iノ上陸未完ノ為メカ師団長ハ此日其部隊ヲクリーク右岸ニ進出セシメサルノミナラス 宝山城ノ攻撃モ之ヲ決

行セス 自然天谷支隊ヲシテ独力西門大街ノ線ニ前進セシムルニ至レルハ 其協同動作上遺憾少カラサルノミナラス昨日ノ軍命令ヲ輕シタルノ責アリト認ム 其原因孰レニアルヤ調査ノ上

今後ノ為メ適當ノ措置ヲ取ルノ必要アリト感ス 之ヲ要スルニ本日ノ戰況ハ第三師団ノ消極的態度ニ依リ 天谷支隊ノ進出ヲ遲延セシメタル

ノミナラス 第三師団ノ楊行鎮方面前進ノ準備ニ於テモ遺憾ナキヲ得ス 軍直屬ノ重砲兵部隊ハ昨夜吳淞錨地ニ到着即時上陸ヲ開始セリ 明日中ニハ概ネ戦列部隊ノ

上陸ヲ完了スル見込ナリ 公大方面攻撃部隊ハ歩兵二中隊ヲ増加シ 海軍陸戰隊ト円満密接ニ協力シ明日ノ攻撃ヲ準備

中ナリ

◇九月六日(宝山城占領)

此日依然宝山城沖ニ於テ戰況ヲ視察ス

「上村利道參謀副長日記」

九月五日 晴

3 D參謀長ヨリ西原大佐宛干涉差控エラレ度強硬ナル電報來ル、兩師団共難局ニ在リテ氣ノ立ちアル勢力平常ニ於テ見ラレサル光景ナリ

九月五日 わが海軍、全中国沿岸封鎖を宣言

「上村利道參謀副長日記」

九月六日 晴

〔敵軍正ニ「ダニ」ト蠅ノ如シ陣地ニツケハ「ダニ」ノ如応ス一掃スレハ蠅ノ如ク又集マル〕
天谷支隊モ予想外ニ進展セス將來ノ戰鬪推移亦概ネ予想シ得ヘシ

此夜軍艦由良ニ敵機ノ爆彈ヲ受ケ艦側海上ニ三発落下(約卅⁺彈)破片ノ為メ水兵二名傷キシカ 予ハ知ラスニ眠リ居リシハ可笑

第十一師団方面ノ情況

羅店鎮、劉河鎮方面變化ナシ

天谷支隊ハ今朝來宝山城西方地区ニアル敵ヲ擊破シ 夕刻概ネ吳淞クリークノ線ニ進出スルヲ得タリ

此戰鬪ニ於テ敵ノ降服スルモノ約五百ニ算セシモ 其後尚抵抗ノ意ヲ顯セシヲ以テ尽ク之ヲ擊殺セリ

此夕上陸ヲ完了セシ野戰重砲兵聯隊本部并第一大隊ヲ天谷支隊ニ配屬シ当面ノ攻撃ヲ容易ナラシム

第三師団方面ノ情況

吳淞クリーク右岸依然變化ナシ

公大飛行場方面攻撃ノ18 iノ一大隊ハ 此日一部ヲ以テ江岸方面ヨリ主力ヲ以テ楊橋浦方面ヨリ敵陣ヲ攻撃シ 予定ノ第一線地步ヲ獲得スルヲ得タリ

吳淞クリーク右岸地区ニ於テハ天谷支隊ニ協力シ概ネクリークノ線ニ進出セリ 宝山城ハ早朝ヨリ臼砲及榴彈砲ノ猛射ノ後攻撃ヲ実行シ 十一時頃先ツ西南門方面ヨリ次テ南門及東南門方面ノ城壁ヲ占領シ 終日城内ニ残留セル敵ノ掃蕩ニ当ル

此クテ本日ヲ以テ軍ハ吳淞クリーク右岸一帯ノ地ヲ占領シ其根拠地ヲ確保スルヲ得タリ 然レトモ当面ノ敵ノ死守の健闘ト之ニ反スル第三師団ノ消極態度ニ依リ 攻撃ニ時日ヲ費シ自然此間敵軍ノ後方陣地構築ト一部ノ増強トヲ召致シ 今後月浦鎮方面進出時期ヲ遲延セシメタリ

參謀本部西村騎兵少佐情況視察ノ為メ一昨日來着 其言ニ依ルニ參謀本部ノ当方面作戰ニ關スル方針依然改メラレス 先ツ北支ヲ片付ケ次テ余力アレハ之ヲ江南ニ使用セントスル意嚮ナルト聞キ 其妄ヲ改メサル愚直サ加減ニ一驚セリ 仍テ予ノ江南作戰ニ関スル軍ノ立場ヲ説明

シ 少クモ不取敢一ヶ師団ヲ増加スルコトハ 西方及南方ニ対シ上海ヲ確保スルニ緊要ナル旨ヲ懇切ニ説明シ將來速ニ善処ヲ約セシム 尚今後ノ軍ノ情勢判断ハ固トヨリ軍ノ任務達成上我軍ニ向ヒ攻勢防禦ヲナセル敵ヲ撃破スルヲ必要トスルノ意ナルコトオモ説明シ置ケリ

◇九月七日

此日前日来ノ期望漸ク成リ 夕刻商船瑞穂丸ニ移乗シ吳淞砲台南側ノ商船学校埠頭ニ横付シ此第二師団トノ連絡ヲ容易ニシ全般ノ指揮上好都合トナレリ

第十一師団方面ノ戦況

羅店鎮、劉河鎮方面依然タリ

天谷支隊ハ前面ニ残留セル敵ヲ駆逐シツツ 夕刻迄ニクリーク右岸王家宅、金家宅、梅家宅ノ線ニ前進シ 其北方貴家宅(江岸) 顧家宅ノ線ニ進出セル浅間支隊ト確實ニ連繫スルニ至レルモ 敵ノ抵抗中々頑強ニシテ一挙ニ浦鎮攻撃ヲ実行シ得サルハ遺憾ナルモ 明日ハ重砲兵ノ増援協力ニヨリ其目的ヲ達シ得ルモノト樂觀ス 尚師団ノ輜重ハ殆ト全部貴陽灣根拠地ニ上陸ヲ終了ス

第三師団方面ノ情况

吳淞クリーク右岸地区依然タリ

飯田大隊ハ本日僅カニ敵陣地ニ接近セルモ 損害多ク攻撃意ノ如ク進捗セズ

吳淞クリーク左岸地区ニ於テハ 第十八聯隊(Ⅲ欠) ヲシテ68 iノ主力ト共ニクリークヲ超エテ進出シ 夕刻迄ニ天谷支隊ト連絡王家宅、徐家宅、金家祠堂、沈家宅ノ線ニ進出セルモ戦線尙夕刻迄此線ニ膠着ス 蓋シ軍ハ先日師団ニ命スルニ第二九旅団ノ全力ヲ以テ此方面ニ進出ヲ命セシモ 師団長ノ此方面ニ対スル兵力使用ヲ惜ム為メ思フ様ニ戦況發展セズ 更ニ天谷支隊ノ月浦鎮攻撃ヲ容易ナラシメ得サルハ遺憾ナリ 是レ第三師団力今後軍ノ作戦方針ヲ能ク了解セサルニ起因スルモノト認メ 明朝西原大佐ヲ師団長ノ許ニ遣シ能ク軍ノ意嚮ヲ伝ヘシメ之

ヲ鞭撻セシムルコトトセリ

此日第三師団ニ配属セシ臼砲ヲ軍直轄ニ復シ 其一中队ヲシテ吳淞鎮北側地区ニ於テ浦東方面ニ対シ陣地ヲ占領セシム 尚高射砲隊ヲ統制 師団及停泊場司令部ニ配属シ根拠地ノ防空防禦ヲ完フセシム

軍艦由良ニ於テ南雲司令官以下ト乾盃告別ス 便乗半ヶ月ニ於ケル司令官、艦長以下ノ熱誠ナル援助ニ付キ深甚ノ感謝ヲ表シ 併セテ尚一同第八戦隊ト密接ナル協同戦闘ヲ予期シ之ヲ希望シ置ケリ

◇九月八日(軍兵力ノ増加)

昨夜久振ニ安眠シ 今朝来船中ニ在リテ根拠地状勢陸揚等ノ模様ヲ視察ス

一、第十一師団方面ノ情况

嘉定東方地区ニ於ケル敵ハ漸次其砲兵ヲ増シ(十五加農モアリ) 又兵力ヲ其左翼方面ニ移動シ 夜間飛行機ノ爆撃オモ加ヘ羅店鎮ニ向ヒ攻勢ヲ取ルニ至レルモ 該師団ハ常ニ敵ノ攻撃ヲ撃退シツツ志気旺盛ナリトノ報アリ 然レトモ此方面ニ於ケル敵ノ圧迫ハ軍ノ最モ危惧スル処ナレハ 此ニ兵力ノ増加ヲ欲スルモ貴陽灣附近根拠地ヨリスル道路ノ改修未成ニシテ重砲ヲ送付ノ法ナク 已ムナク軍直轄機関銃大隊ノ一中隊ヲ車馬ヨリ脱シ 明早朝駆逐艦ニヨリテ貴陽灣ニ輸送シ直接第十一師主力ニ増援セシムルコトトセリ

天谷支隊ハ浅間聯隊ト確實ニ連携シテ 月浦鎮東方地区ニ増援シ来レル敵ヲ撃破シ夕刻迄ニ若干前進セルモ 敵ノ抵抗頑強ナルト地形陰蔽シテ砲兵射撃ノ観測意ノ如クナラサル等ニヨリ攻撃意ノ如ク進捗セズ

仍リテ此夜襲ニ天谷支隊ニ増加セル野砲大隊ノ外 今朝迫撃砲大隊(一中隊欠)ヲ増加セル外 更ニ軍直屬機関銃大隊(一中隊欠)ヲ此夜ニ行軍ニテ該支隊ニ増加シ其攻撃ニ協力セシム 一、第三師団方面ノ情况

『上村利道參謀副長日記』
九月七日 晴

少壮幕僚部隊ニ氣兼シテ明日ハ陸上司令部ニ引越スコトヲ主張ス、適當ナルヲ以テ同意、陸上ノ設備ヲ急カシムルモ管理部長ハ明日迄ハ引キ受ケス此日戦況發展セズ特ニ公大方面上ノ支隊ノ戦況進展セズ悲觀スヘキモノアリ

臨參命第九十七号

命令

- 一、台湾ヨリ重藤支隊(台湾守備隊ヲ充ツ)ヲ上海ニ派遣ス
 - 二、台湾軍司令官ハ重藤支隊ヲ上海附近ニ派遣シ上海派遣軍司令官ノ指揮下ニ入ラシムヘシ
 - 三、重藤支隊ハ揚子江口到着ノ時ヲ以テ台湾軍司令官ノ指揮下ヲ脱シ上海派遣軍司令官ノ指揮下ニ入ルモノトス
- 昭和十二年九月七日
奉勅伝宣

參謀総長 戴仁親王
上海派遣軍司令官 松井石根殿
台湾軍司令官 古莊幹郎殿

臨參命第五〇八号
指示

臨參命第九十七号ニ基キ左ノ如ク指示ス
一、重藤支隊上海附近派遣ノ目的ハ主トシテ飛行場ヲ設定セシムルニ在リ
二、支隊ハ先ツ応急動員ニヨル大部ヲ海軍ニヨリ輸送セラる
右輸送ハ第三艦隊ノ一部ニ任シ九月十二日中基隆ニ於テ乗艦ス

吳淞クリーク右岸ノ部隊依然タリ

クリーク左岸地区ニ於ケル第三師団ノ攻撃ハ 其右翼部隊即68 i (一大欠) ヲ34 iノ一大隊ニヨリ交代セシメ 18 i (一大欠) ヲ其左ニ列ヘテ攻撃ヲ準備シアリ 依テ軍ハ西原大佐ヲ今朝師団長ノ許ニ遣シ 軍ノ意図并ニ今後ノ攻撃計画ノ大要ヲ指示シ速ニ揚行鎮ノ攻撃ヲ敢行スヘキヲ督励セルモ 師団長ハ之□ニ兵力ヲ出借スルノ意強ク 思フ様ニ此方面ニ突破的攻撃ヲ速ニ行ハサルハ遺憾ナリ 仍リテ此夜更メテ第十一師団主力方面并天谷支隊苦戦ノ情ヲ通報シ其攻撃ノ進捗ヲ督励ス

第六八聯隊ハ此日宝山県東南地区ニ兵力ヲ集結シ 軍(二大隊)及師団(一大)ノ予備トナル

公大飛行場方面攻撃ノ清水支隊ハ 今朝來迫撃砲一中隊ノ増援(軍直轄ノモノヲ配属ス)ヲ得テ攻撃ヲ敢行シ 此夕迄ニ軍工路ノ線ニ進出シ敵軍トチカ陣地ノ二ヲ奪取スルヲ得 從テ數日前ヨリ公大飛行場ニ待機中ノ我偵察中隊ハ此日ヨリ飛行ヲ開始スルヲ得タリ 此支隊ノ功績ハ偉大ナリ

此日參謀總長ヨリ來電アリ 左ノ如ク軍兵力ヲ増加セラルルコトナレリ
一、野重砲一大隊、目下北支ニ向ヒツツアルモノヲ洋上ヨリ転航シ來ル 一兩日中着スルナラ

二、後備歩兵十大隊、砲、工兵各一中隊 内歩四大隊ハ軍艦ニテ輸送セラレ十日頃來着ノ予定
三、重藤少將ノ指揮スル台灣守備軍歩兵四大隊、山砲一大(二中)

右ハ第一項部隊到着後同軍艦ニテ吳淞ニ輸送セラルル筈 來着時日未定

此クテ軍ハ此ニ各種取交セ約一ヶ師団分ノ兵力ヲ増加セラルル事トナリ 当局ノ苦心ノ程ハ万々諒スルモ当局力敢然既往ノ方針ヲ一新シテ 江南作戰ニ專制ノ利ヲ占ムル態度ニ到リ得サルヲ遺憾トス 然シ事ニ此迄到レルハ原田少將屢次ノ意見具申ト西村少佐視察招致ノ結果ナリト認メラレ 之レニテ軍ハ兎ニ角軍現下ノ任務ヲ達成スルニ最少限必須ノ兵力ヲ得タルヲ欣ブ

ルモノトス

昭和十二年九月七日
參謀總長 載仁親王
上海派遣軍司令官 松井石根殿
台灣軍司令官 古莊幹郎殿

臨時第五〇九号

命令

一、台灣ヨリ重藤支隊ヲ上海ニ派遣セシメル

重藤支隊人員四、三〇〇名ハ軍艦ニヨリ九月十二日基隆ヨリ乘艦上海方面ニ輸送ス

二、貴官ハ右部隊ノ乘艦ヲ援助スルト共ニ支隊殘余ノ人員一、二〇〇名馬匹一九六頭ヲ九月十三日基隆ニ就テ乘船シ支隊主力ニ追及セシムヘシ

馬鞍群島到着後ノ行動ハ重藤支隊長ノ要求ニヨルモノトス

昭和十二年九月八日

參謀總長 載仁親王
第一船舶輸送司令官 松田卷平殿

尚此日參謀總長ニ電シテ今後ノ會戰ノ損傷約五千(現在約二千五百)ヲ予想シ既往ノ死傷補充ノ外 會戰直後ノ用ニ間ニ合フ様九月中旬中ニ右補充ヲ見越輸送セラルヘキコトヲ要求セリ

前日来両師団ニ於テ少数ノ下痢患者ノ發生シ居リシカ 昨日來天谷支隊ニ於テ約六十ノ悪性下痢患者發生 虎列拉ノ疑アリテ防疫検査中ナリ

軍兵站諸隊ハ本日既ニ其一部ノ揚陸ヲ了ヘ 統テ揚陸ヲ統行中ナリ

七夫、文字ニ書状及封ヲ送り追送品ノ要求ヲナス

九月初秋吳淞錨地偶感

東天告曉日晨揚 江岸遙野旭旌纛

忽聞重砲雷擊響 王洲十萬救四民

九月初六宝山県城奪取直後

旭旌飄處觀月台 可憐重砲雷擊跡

時迎雅客含歡秋 殘月出懸宝山城

◇九月九日(飯田大隊ノ殊勲)

此日瑞穂丸上ニ在リ 軍司令部ノ大部ハ水産学校ヲ修復シテ此處ニ事務ヲ取り得ルニ至レリ
一、第十一師団方面ノ戦況

羅店鎮方面ノ敵ノ攻勢ハ概萎靡セルモノノ如ク 此日陸海軍飛行機ノ嘉定及其東方敵陣ニ對スル爆撃ハ相當ノ効果ヲ挙げタルモノノ如シ 殊ニ第十一師団全般ノ志氣ニ与ヘタル好影響顯著ナリ

今朝八時半当方面ニ増加セル機関銃中隊ハ 水雷艇ニ依リ貴陽灣ニ上陸セシメ直ニ羅店鎮ニ急行セシム 又海上ヨリ転航シ來レル後備大隊中二個ハ 夕刻ヨリ軍艦ニヨリ貴陽灣附近ニ到着シ直ニ揚陸ヲ開始セシメ 羅店鎮附近守備トシテ第十一師団長ノ隸下ニ入ラシム
之レニテ先日來憂慮セル当方面ノ情勢ハ最早心配ヲ要セサルニ至リ安堵セリ

感状

飯田支隊

長歩兵第十八聯隊第三大隊長

飯田七郎

歩兵第十八聯隊第三大隊

同 速射砲小隊(一分隊欠)

戰車第五大隊第一中隊第一小隊

野砲兵第三聯隊第九中隊

迫撃第四大隊第一中隊

工兵第三聯隊第二中隊第二小隊

獨立工兵第六聯隊第一中隊ノ

七夫、松井七夫、松井石根大將の弟。予備役陸軍中將。奉天特務機關長、支那政府応聘奉天督軍顧問歴任。

砲は砲の正字

初六は六日の月、三日月は初三

天谷支隊ハ今朝来月浦鎮及其東方陣地ノ敵ヲ攻撃中ナルモ 僅ニ數百米ヲ前進セシノミニテ 攻撃意ノ如ク進捗セズ 蓋シ同支隊ハ上陸来既ニ相当ノ損傷ヲ招キタルト飲用水ノ欠乏ト暑氣ノ酷烈等ニ起因シ 下痢患者ノ發生等ト共ニ少カラス其攻撃精神ヲ弛緩セシメタルモノト認ム

一、第三師団方面ノ情况
歩二九(旅団)ノ主力ノ攻撃ハ其兵力ノ不充分ト氣勢揚ラサル為メ 僅ニ其地歩ヲ進メタルニ過キサルハ遺憾ニシテ 天谷支隊ノ攻撃進捗ニモ影響スル処尠カラス 仍テ新ニ此師団ニ来着ノ軍直屬十二榴一大隊ト輕渡河材料一中隊ヲ増加シ 全般ノ大局ニ鑑ミ速ニ楊行鎮ヲ攻略スヘク指導ス 蓋シ当師団ハ最初ヨリ68 iニ与ヘタル任務過重ニシテ 第廿九旅ヲ出シ借シタル為メ此結果ニ陥リタルモノニテ 師団長モ今ヤ其大勢ヲ覺リ奮然明日ノ攻撃ヲ期シツツアリ (68 iノ損傷ハ兵員ノ半数以上ニ達セリ)

公大方面攻撃ニ任シタル18 iノ飯田大隊ハ朝来猛烈壯烈ナル攻撃ヲ敢行シ 此日中過ニ敵ノトウチカノ三個ヲ奪取セルハ偉トスヘシ 而カモ此間大隊長以下三中队長、大隊副官等尽ク名譽ノ最後ヲ遂ケタルハ 該大隊幹部ノ率先勇敢ニヨルモノニシテ感激ニ禁セス 而カモ將兵志氣衰ヘス依然攻撃ヲ続行シアルノ報ニ接シ感涙自ラ下ルヲ禁スル能ハス 由テ師団長ニ命シ感状稟申ノ意ヲ伝ヘ 尚当大隊増援ノ為メ34 iノ一中隊ヲ此夕迄ニ該地ニ転用セリ 蓋シトウチカヲ失ヒタル当方面ノ敵ノ恢復攻撃ヲ警戒シタルニ因ル

本戦闘間海軍ハ江上ヨリ砲撃ヲ以テ協力セルモ 該方面陸戰隊ノ行動ハ甚タ振ハサルハ遺憾ナリ 漸ク第三艦隊長官ノ命ニヨリ遅レテ其一部分ノ線ヲ前方ニ推進セルニ過キス 蓋シ海軍部隊ニ陸上ノ奮闘ヲ望ムハ固トヨリ無理ナルヘキモ 将来陸戰隊ノ行動ニ対シテハ能キ指針ヲ得タルモノナリ

此クテ公大飛行場ハ此ニ確立セラレ 午後以来多数ノ陸海飛行機ノ此ニ活動ヲ開始スルヲ得タルハ全ク飯田支隊拔群ノ功績ナリト認ム

本日入手セル東京亞細亞協會ヨリノ通報ニ依レハ 天津大亞細亞協會ハ去月二十一日震燹元

一部

第三師団通信隊ノ一部
第三師団衛生隊ノ一部

公大北方軍工路付近ノ敵ヲ驅逐シテ公大飛行場ニ於ケル陸海軍飛行隊ノ根拠地ヲ安全ナラシムルコトハ優勢ナル敵ニ対スル上海派遣軍ノ作戰指導上特ニ緊要トセシトコロナリ

第三師団飯田支隊ハ九月六日以来之カ攻略ニ任シ堅固ニ陣地ヲ占領セル優勢ナル敵ニ対シ海軍ノ協力下ニ勇戦奮闘スルコト四日此間屢々敵ノ逆襲ニ会ヒ又支隊長以下幹部ノ多数ヲ失フニ至リシモ闘志毫モ屈スルコトナク必勝ノ信念ヲ堅持シテ志氣益々旺盛ニ各隊協力一致遂ニ其任務ヲ達成セリ 其攻撃精神ノ旺盛ニシテ図結ノ鞏固ナル真ニ全軍ノ模範トスルニ足ル 仍テ茲ニ感状ヲ授与ス

昭和十二年十月

上海派遣軍司令官 松井石根

新二会长トナリ 東野俊興日支提携、防共等ニ関スル声明ヲ發表シタル旨承知欣懐ニ禁セス 又中谷武世ヨリノ来電ニ抛レハ北支我軍権モ遅レ乍ラ治安殊ニ思想工作ノ必要ヲ痛感シ 漸次此方面ニ努力スルノ氣運トナリツツアリトノ事ニテ満足ノ至リ 中谷モ能ク予ノ意ヲ諒シ此際北支軍民ト謀リテ亜細亞運動ニ邁進スヘキ旨申来リ 是亦満足ノ至リナリ 願ハクハ我等ノ興亜運動ハ此ニ北支ニ其声ヲ拡大シツツ 将来当方面戦況ノ一段落ト共ニ此江南地方ニモ相応シテ亜細亞運動ノ發動最モ望マレリ 今ヨリ之カ準備ヲ要スルモノト認メ原田少将ニモ此旨ヲ陳ヘ置ケリ

◇九月十日(初度上陸)

今朝一時中央ヨリ電文アリ 新二第九、第十三、第百一師団ヲ一時増加スル旨来示アリ 豫テノ希望ヲ達成セルニ付大ニ満悦ス 然レトモコレ唯一時的ノ増兵ニ過キス 軍ノ任務ハ從來ト異リナキハ尚可ナルモ 遅クモ十月末迄ニ二師団(内一ハ特設師団)丈残シ他ノ主力ヲ北方ニ転用スル予定ナリト知り吃驚セリ 如此シテ軍ノ攻撃ハ甚タ不徹底トナリ敵軍攻撃ノ半途ニシテ之ヲ打切り 上海北方ニ小サクニケ師団ヲ以テ防守センナトハ到底上海確保、人民安護ノ所以ニアラス 且ツ皇軍ノ威信ヲ傷クルコト絶大ナリト考ヘラレ憂慮ニ禁ヘス 然レトモ先ツ直前ノ攻撃ハ此兵力サヘアレハ相当大規模ニ実行シ得ラルヘク満足スヘク 後ノ事ハ又其時ノ形勢カ自然ニ解決スルモノト樂觀ス

即此日午後初メテ陸上元水産学校内ニ設備セル軍司令部ニ至リ 本兵力増加ニ対スル幕僚ノ今後ノ作戰方針ニ付協議ス 大体極メテ消極的ニシテ最初ノ意氣ニ欠クル所多キヲ以テ 更ニ一同ヲ激励シ研究ヲ再考スヘキヲ命シタリ 一、第十一師団方面ノ戦況

羅店鎮方面大ナル変化ナク 曩ニ送リシ機関銃中隊ハ無事着ノ外後備大隊ニケモ今晝来貴陽灣ニ上陸ヲ終リシヲ以テ 直ニ羅店鎮ノ後方ニ召致シタル由ニテ此方面ハ先ツ当分安心ナリ

中谷武世「法政大学教授。下中弥三郎と共に大亞細亞協會の中心人物の一人。常任理事兼事務局局長となる(昭和15年)。

『上村利道參謀副長日記』
九月十日 晴

(軍事郵便開通)
軍司令部モ午後二時三十分陸上軍司令部ニ到着、増兵後ニ於ケル作戰ニ就テ案ヲ練ル 作戰陣ノ案ト司令官ノ考案ト合致セス更ニ案ヲ練ルトシテ引キ退ル
本夜敵飛行機ノ爆音ト対空(?) 砲撃トニテ眠全カラス

天谷支隊、淺間聯隊ハ協力シテ夕刻迄ニ大体月浦鎮ヲ占領セルモ 尚全陣地ヲ奪取スルニ至ラス統テ攻撃統行中トノ事 先ツ此方面モ之レニテ一応愁眉ヲ開クノ感アリ

二、第三師団方面ノ戦況

歩第廿九旅団ノ攻撃ハ尚五六百米位前進セシニ過キスシテ楊行鎮ヲ占領スル能ハス 攻撃依然緩慢ナルハ遺憾ナリ

公大飛行場西側地区ノ占領後 尙当面ノ敵力飛行場ヲ射撃スル為メ安全ナラサル為メ 更ニ此方面戦果ノ拡大ヲ海軍ヨリ希望シ来レルモ 目下軍ノ兵力ヲ多ク此方面ニ割クコトハ甚タ不利ニ付 篤ト研究ヲ要スルニ付幕僚細密研究ヲ促シ置ケリ

先日來ノ虎列拉疑似病ハ 細菌検査ノ結果略ホ虎列拉ト認定セラレタルモ幸ニ其後左程蔓延ノ模様ナク 本日中ニ収容セル患者ハ百名以内ニテ天谷支隊ヲ主トシ 68 i之二次概シテ宝山城方面ニ動ケル部隊中ニ在リ 原因ハ格別敵ノ工作ニ依ルモノニアラス クリークノ水ヲ飲用セシ結果ト思ハル 死者ハ三十余名ニ止リ其他ハ漸次良況ニ向ヘル模様ニ付隔離、消毒等ニ万遺憾ナキ様軍医部長ヲ督励之ニ当ラシム

尙目下兩師団ノ給養ハ水ヲ第一トスルニ付 其研究ト実行ニ付經理部長及第三課ニ命シ努力ヲ促セリ 尙此日幸ヒ來訪セル日高大使館參事官ニ頼ミ 今後上海在留邦人等ニ依リ水船ヲ以テ呉淞及貴陽灣ニ給水方尽力ヲ希望シ置ケリ

九月七日移乘瑞穂丸

応悅優輪名瑞穂 本是蓬萊來往船

王洲來鎮江南秋 滿目沃野今欲綠

◇九月十一日(水産学校ニ移ル)

此日正午愈々瑞穂丸ヲ離レ 先日來設備中ノ水産学校跡ノ軍司令部ニ移ル 船長以下乗船中能ク待遇セシカ去ルニ臨ミ特ニ寢台、椅子、机奇贈ス好意可掬 御蔭ニテ僅ニ雨露ヲ凌クニ足

ル軍司令部内ニ起居スルニ至便ヲ得タリ 船中ボウイ川井磯一郎嘗テ蓬萊丸ニ在リ 先年予ノ台灣來往ノ際予ヲ知ルノ故ヲ以テ特ニ予ニ随ヒ戦陣中ノ使丁タランコトヲ願出テシニ依リ 其望ヲ容レ随伴セシム

離船ニ際シ軍今後ノ作戦ニ関シ 左ノ要旨ノ意見ヲ私信ニテ陸軍大臣ニ申遣ス

一、軍兵力ヲ更ニ三師団増加セラレタルコトヲ感謝ス

二、然レトモ之ヲ遅クモ十月末迄ニ北方ニ転用セントスルハ 大演習カ凶上戦術ノ考ニテ現情ニ即セサルコト

三、軍ノ任務上少クモ敵ヲ常熟、蘇州、嘉興ノ線以外ニ駆逐シ 其地形ノ利ト政治、經濟上江南ノ要地ヲ攻略シテ一般ノ状勢ヲ転換セシメサル限 少数ノ兵力ヲ以テ上海西方附近ヲ防守スルハ 再度、三度、軍派遣當時ノ状勢ニ逆転スルノ形勢ニ陥ルコト明カナルコト

四、仍リテ軍ハ五師団ノ兵力ヲ少クモ十一月中保持シテ 右ノ目的ヲ達スルコト緊要ナルコト
五、之レカ為メ速ニ陸海軍事參議官會議ヲ開キ 今後ノ对支作戦ノ根本ヲ決定セラレ 參謀本部責任者ノ固執セル方針ヲ一新スルコト緊要ニシテ 要スレハ責任者ヲ更代スルコト必要ナルコト

尙參謀本部ノ要求ニ依リ 兎ニ角努メテ既報現在ニ於ケル同部ノ意見希望ニ基キ今後軍ノ作戦方針ノ大要ヲ刻電報ス 本案ハ固トヨリ予ノ満足セサル処ニシテ 幕僚内ニハ參謀本部ノ要求ニ応セン為メ可ナリ消極糊塗ノ意見モアリシカ 予ハ之ヲ排斥シ予ノ抱有スル方針ニ努メテ接近シ中央部ノ意図ヲ可成尊重シタルモノナリ 即

一、百一師団ノ來着ヲ俟チ六師団ニテ大場鎮、南翔ノ線ヲ攻略シ 続イテ嘉定ヲ攻撃シ努メテ敵ヲ太倉、安亭以西ノ地区ニ撃攘スルコト

二、尔後概ネ嘉定、南翔附近ノ線ヲ占領スヘキモ其守備線ノ決定ハ時ノ情勢ニ依リ決定ス

三、浦東地区ハ後統兵団ノ一部ヲ以テ漸次之ヲ掃蕩スルコト

重藤支隊ハ來十四日頃着スヘク 之力使用方面ニ関シテハ 幕僚内ニテハ或ハ浦東ニ或ハ公

臨命第九十九号 命 令

一、左記部隊ヲ上海ニ派遣ス

第九師団

第一百一師団

第十三師団

獨立機關銃第一、第二大隊 (近衛師団長管理)

野戰重砲兵第五旅団 (留守第三師団長管理)

獨立野戰重砲兵第十五聯隊 (近衛師団長管理)

迫擊第一大隊 (近衛師団長管理)

近衛師団第一乃至第四野戰照空隊 (近衛師団長管理)

獨立工兵第十二聯隊(戊) (留守第十六師団長管理)

第三飛行団司令部 (台灣軍司令官管理)

野戰電信第二十九中隊 (第九師団長管理)

野戰電信第四十四中隊 (留守第十六師団長管理)

無線電信第三十一乃至第三十七小隊 (近衛師団長管理)

野戰瓦斯第一、第二中隊(甲) (近衛師団長管理)

第三師団架橋材料中隊

(留守第三師団長管理) 第十師団架橋材料中隊 (留守第十師団長管理)

兵站電信第八中隊 (留守第六師団長管理)

兵站自動車第四十、第四十一中隊 (留守第三師団長管理)

兵站自動車第八十五、第八十六中隊 (留守第十六師団長管理)

五号予備馬廠(第七師団長管理) 野戰予備病院第十三班 (留守第五師団長管理)

野戰予備病院第十五班 (留守第六師団長管理)

野戰予備病院第三十一班 (留守第十六師団長管理)

五号患者輸送部本部 (第七師団長管理)

患者輸送部第十二班 (留守第五師団長管理)

患者輸送部第十四班 (留守第六師団長管理)

患者輸送部第三十一班 (留守第十六師団長管理)

四号兵站病馬廠 (第七師団長管理)

攻城重砲兵第一聯隊ノ一大隊(乙) (第十二師団長管理)

攻城砲兵廠ノ一部 (第四師団長管理)

攻城工兵廠ノ一部

大方面ニ使用スル意見多カリシカ 予ハ予ノ将来ニ対スル希望ニ応スル該支隊ノ使用ヲ顧慮シ
大体之ヲ第十一師団方面ニ使用スルニ決シ 其上陸地ハ今後月浦鎮方面ノ情勢ニヨリ決スルコ
トトセリ

仍テ公大飛行場ノ安全ヲ確保スルコトト軍増加兵団揚陸上 上海、吳淞路ヲ開放スルノ必要
トニ鑑ミ 此ニ一大英断ヲ以テ歩兵第五旅団長ノ指揮スル步兵第六聯(一大欠)重砲兵一中、
野重砲二大隊ヲ以テ 従来ノ飯田支隊ヲ合セ股行鎮―沈家香鎮ノ線ヲ占領セシムルコトトシ
一時之ヲ軍ノ直轄ニ置クコトトシ 別ニ吳淞クリーク右岸従来ノ守備地区ハ 小田兵站司令官
ニ歩兵ノ一大隊ト後備歩兵ニ大隊(二中欠)ヲ以テ之ヲ守備セシムルコトトセリ
尚浦東方面ヨリ上海殊ニ楊橋浦附近ニ対スル敵ノ砲撃ニ對抗スル為メ 臼砲一中隊ヲ楊橋浦
附近ニ配置セリ

(此日七夫、文字ニ電信シ又亞細亞協會ニ電シ鹿子木博士ヲ北支ニ派遣スルコトヲ申遣ス)
一、第十一師団方面ノ情況

羅店鎮方面大ナル變化ナク逐次後備大隊ヲ右翼及内方ニ集結シアリ 又歩兵一大隊砲兵一小
隊ヲ以テ右翼方面ヨリ練塘ノ線ニ向ヒ攻撃セシメ 此夕迄ニ概ネ唐宅、王宅ノ線ニ進出シ得タ
ル如シ

月浦鎮方面ノ攻撃ハ未タ終日大ナル發展ヲ見サリシモ 殆ト月浦鎮ノ南北ヲ包圍今一挙ノ状
勢ニアルモノト認メラル

二、第三師団方面ノ情況
吳淞クリーク右岸既述ノ如シ

楊行鎮ニ対スル攻撃涉々シカラサルハ遺憾ナルモ 是亦其東南ヲ包圍的ニ近接シ今一步ノ情
勢ニアリ

仍テ軍ハ68 iノ一大隊ヲ軍ノ予備トスルノ外 残部ヲ師団長ノ隸下ニ復帰シ其攻撃ヲ督励ス
ルノ意ヲ表ス

過日來宝山城南側地区ニ飛行場ヲ予定シ偵察中ノ処有望ナルニヨリ 海軍ノ人夫一千人ニ第
三師団輜重兵六百ヲ増援シ 急遽此ニ陸海共同飛行場ヲ設置スルコトトセリ 其陸軍用ノモノ
ハ数日中ニ完成ノ見込ナリ
此日新二飛行集團司令部及偵察戰闘各一中隊ヲ軍ニ増加セラル

◇九月十二日

陸上第一夜ノ夢靜ニ 六時起床洗面後遙ニ東天ヲ拜シ祈念ヲ捧ケ校内ニ設ケアル小亭ニ思ヲ
送ル 亭遙小花固ヨリ荒涼スルトモ雜花尚笑ヲ呈ス 更ニ夾竹桃数本アリ執レモ満開可掬殊ニ
情緒ノ綿々タルモノヲ感ス 即吟シテ曰ク

江南由來艷麗地

蕪楊佳人競妍姚

仁俠王洲成登峯

開花似媚夾竹桃

一、第十一師団ノ情況

羅店鎮方面變化ナシ

天谷支隊ハ此日朝漸ク月浦鎮ヲ占領シ 敵ヲ追撃シテ其西方約半里東錢橋、張宅ノ線ニ前進
スルヲ得タルモ 月浦鎮東側橋梁破壞ノ為メ砲兵ノ追隨ヲ致サス 由テ架橋中隊一ヲ配屬シ舟
橋ノ架設ニ依リ該車輛ノ前進ヲ図ル

淺間支隊ハ師団長ノ希望ニヨリ羅店鎮ニ急進スル筈ナリシカ 当方ノ意嚮ニ由リ天谷支隊ト
協力 羅店鎮東方地区ノ敵ヲ掃蕩スルコトトナレリ
二、第三師団ノ情況

上野旅団ハ早朝楊行鎮ヲ占領シ 敵ヲ追撃シテ其西方約三千米顏十房ノ線ニ前進セルモ 尚
近ク敵ノ抵抗アリテ前進涉々シカラス

第五旅団長片山理一郎ノ指揮スル部隊ハ 今夕後備大隊ニ其守備ヲ交代シ転進ノ準備中ナリ
要之月浦、楊行兩地ノ敵ハ昨夜暗ヲ利用シテ退却セシモノノ如ク 我兩旅団ハ其後陣ヲ占領

(第四師団長管理)
第十一師団後備工兵第一、第二中
隊 (留守第十一師団長管理)
第五牽引自動車隊(甲)

(第四師団長管理)

第十四師団第一乃至第五陸上輪卒
隊 (留守第十四師団長管理)

第十六師団第三乃至第五陸上輪卒
隊 (留守第十六師団長管理)

第五師団第一水上輪卒隊

(留守第五師団長管理)

第六師団第一水上輪卒隊

(留守第六師団長管理)

第十四師団第一乃至第三建築輪卒
隊 (留守第十四師団長管理)

第一野戰建築部

(第一師団長管理)

二、第九、第一百、第十三師団長
ハ上海ニ到リ上海派遣軍司令官
ノ隸下ニ入ルヘシ

三、第一項所掲ノ動員管理官ハ
夫々其動員部隊ヲ上海ニ派遣シ
上海派遣軍司令官ノ隸下ニ入ラ
シムヘシ

四、第一項所掲ノ部隊ハ内地港灣
出發ノ時ヲ以テ上海派遣軍司令
官ノ隸下ニ入ルモノトス

五、細項ニ関シテハ參謀總長ヲシ
テ指示セシム

昭和十二年九月十一日

奉勅伝宣

參謀總長 載仁親王

上海派遣軍司令官 松井石根殿

台灣軍司令官 古莊幹郎殿

近衛師団長 飯田貞固殿

第一師団長 河村恭輔殿

留守第三師団長 田中稔殿

第四師団長 松井命殿

留守第五師団長 安田郷輔殿

第七師団長 武藤一彦殿

第九師団長 園部和一郎殿

留守第十師団長 吉住良輔殿

留守第十一師団長 森田宣殿

第十二師団長 吉岡豐輔殿

留守第十四師団長 山田乙三殿

留守第十六師団長 小畑敏四郎殿

第一百師団長 中岡彌高殿

第十三師団長 伊東政喜殿

荻洲立兵殿

九月十二日 中国政府、日中間の
紛争を國際連盟に提訴

セシモノニシテ自然追撃ノ時機モ遅レ其氣勢モ昂ラサルハ 地形ト天候トノ関係モアルヘケレト聊カ遺憾トスル所ナリ 即歌ヲ曰ク

月のまゆ(前) 楊の腰にひっかゝり

あまや(天谷) ウーさん(下野) 流連五日

マアコンナ実状ナリ 将来考慮ヲ要ス

尚偵察飛行機ノ報ニ依レハ 本日正午頃ヨリ敵兵月浦、楊行両方面ヨリ西南方ニ退却シツツアリ 大場鎮ヨリモ南翔方向ニ自動車ノ続クヲ見ルト云フ 兎ニ角敵ノ前線ハ一体ニ崩壊セルコト疑ナキカ如シ

◇九月十三日

此日水産学校跡軍司令部ニ在リ 夕刻来細雨至リ夜ニ入りテ相当ノ雨量アリ 宿舎雨漏リテ騒キタルモノケ月振ノ雨ニテ満目草木蘇生セル如ク 将兵亦渴ヲ医シテ喜悅セルコトト思フ

唯夜中亦冷エテ下痢患者ノ続出スルコトナキヤ心配ノ種ナリ

一、第十一師団方面ノ戦況

羅店鎮方面大体変化ナシ 唯和知聯隊一大、砲兵一大ハ依然練塘ノ線ニ向ヒ攻撃中ナルモ情

況不明

天谷支隊(浅間聯隊長) 前面ノ敵ヲ追撃シテ 淑里橋、小顧宅、西毛巷、北字宅ノ線ニ進出セルモ 前面ノ敵ノ抵抗尚在リテ追撃意ノ如クナラス、

二、第三師団方面ノ情况

第三師団主力方面ハ敵ヲ追撃シテ 北潘徑、顔十房ヲ経テ宝宅ノ線ニ前進セルモ顔十房前面ノ敵ノ抵抗強ク 尚敵ハ顧家宅、東方陳宅、王宅附近ヨリ番里、十二房、周家巷附近ニ巨ル線ニ陣地ヲ占領シ攻撃意ニ任セス 吳淞クリーク右岸根拠地前面ニ於テハ 西正面ニ於テ尚五六百ノ敵兵迫リ抵抗シアリ 夜間

後備隊ノ新ニ交代セル陣地ニ夜襲シ来ルコト二回ニ及ヒ其兵力計三百位ナリシモノヲ撃退セリ

江湾東方地区ニ於テハ飯田支隊前面ノ敵朝来窺見エス 飯田支隊ハ若干前方ニ進出シツ、アルコトヲ知り 片山支隊ヲシテ前日来ノ攻撃計画ヲ止メ一挙淞滬鉄道東側地区ヨリ江湾鎮方面ニ前進シ 陸家橋(鉄道沿線)ヨリ盛家宅、齊家宅ノ線ニ進出シ江湾鎮攻撃ヲ準備スヘキヲ命シ 此支隊ハ午後二時半守備線ヲ出発シ夕刻迄ニ前記所命ノ線ニ進出スルヲ得タリ 江湾鎮東端及直ク其東方ニ尚敵ノ陣地アリテ敵兵之ヲ固守ス

前日来ノ虎列拉ハ続発ノ模様ナク 各隊多少ノ下痢患者ノ続出アルモ大数ニアラス 軍ハ第三課ニ命シ極力水ノ補給ニ努力セシメ 又上海居留民団ニ配水ノ配慮世話ヲ依頼セルモ結果未タシ

建川中将ヨリノ電信受取ル 中央部モ漸次南京方面作戦ヲ重視スルコトニ傾キツツアリトノ事ナレト 軍ニ対シテハ未タ其後様子ノ響ナシ

此日岡田清上海ヨリ来ル旨ヲ諭シテ帰京セシムル様取計ヒタリ

自分今朝下痢セルニ付粥食トシ静養セルカ夕刻ニ至リ全癒セリ 水ノ更リタル為ナラン憂フルニ足ラス

◇九月十四日(重藤支隊来着) *

此日陰雨時々襲来スルモ夕刻ニ至リ快晴トナリ 半弦明月清シ

一、第十一師団方面ノ情况

羅店鎮附近変化ナシ

天谷、浅間支隊ハ若干前進シテ 其浅間支隊ハ金宅、重家宅ヲ占領セルモ天谷支隊前面ノ敵ハ依然頑強ニ抵抗セルト 此支隊ノ損傷既ニ八九百ニ達シ(内虎列拉及下痢患者二百内外)タル等ニ因リ前進意ノ如クナラス 只確實ニ師団トノ連絡ヲ遂ケタル迄ナリ 仍テ曩日ノ命令通此日ヲ以テ同支隊ハ師団長ノ隷下ニ復帰ス

*九月十四日の出来事について

「南京事件」に関する資料として高く評価されている松本重治著『上海時代』(下)217、222ページによると、松本同盟上海支局長は九月十四日午前十一時過ぎ、軍司令部を訪問、松井大将と昼食を共にして懇談、松井大将は「上策は南京に行かず、戈を収めるにある。これについて、俺は日夜心胆を砕いているところだ。この点については絶対に他言は無用」と語ったと、六ページの紙幅を割いているが、九月十一日軍司令部は瑞穂丸から陸上に移ったばかりであり、当日、十四日は重藤支隊が台湾からようやく来援したもの、上海戦の見通しは暗澹としていて「南京に行かずに戈を収める」どころではなかった。

「松本証言」に言う松井大将訪問の日は、後掲「松井日記」十月九日(初めて邦人記者と会見)に違いない。

重藤支隊ハ此朝貴陽灣ニ到着直ニ上陸ヲ開始ス 仍テ重藤少将ヲ軍司令部ニ召致シ詳敷今後ノ軍方針ヲ説明シ 第十一師団ト協力シ先ツ前面ノ敵ヲ擊攘スヘク命ス

重藤支隊ノ兵力ハ必急動員兵力歩四大、砲一中ニ過キサルモ 九州ニテ動員中ノ補充員ハ三日中ニ来着スヘク 外ニ台湾ヨリ人夫千余人ヲ牽連シ来レルヲ以テ之ニ因テ補給ノ任ニ當ラシムルヲ得 相当活動ノ力アリト認ム 且ツ重藤ハ多年予ノ訓陶ヲ受ケタルモノ将来ニ望ヲ囑ス

二、第三師団ノ情况

第三師団主力ハ依然前面敵ノ抵抗ニヨリ進出ノ氣力ナシ

片山支隊ノ情况モ変化ナシ 江湾鎮附近ノ敵ノ兵力ハ多カラサルモ其陣地堅固ナルノミナラス 敵兵漸次其両翼ニ陣地ヲ拡大シ来ル等情勢左程安カラス 唯左翼方面ハ敵兵既ニ退却シタルヲ以テ 海軍陸戰隊モ元飯田大隊ニ連繫シ概ネ松颯路ノ線ニ進出スルヲ得タリ

吳淞附近根拠地守備地域異状ナシ 只昨夜飛行機ノ来襲アリトテ我高射砲之ヲ射撃セシモ効ナク 敵機亦爆撃ノコトナシ

川上天山訂正

月浦揚行既失守 月浦揚行已擊攘

市政樓上旭旌竿 旭旗更雁市朝台

妖雲一過慈雨来 妖雲一過南風至

淞滬風物皆欲蘊 淞滬物情蘊色来

此日文字ニ始メテ委シキ書状ヲ出シ 留守中各地留守司令部予備病院慰問ノコトヲ申シ付ク 建川ト西原ニ書状ヲ出シ万事ヲ頼ム

◇九月十五日(終日小雨歇マス温度亦下ル)

今日ハ大命拝受第一ヶ月ノ記念日ナリ

此間軍ハ此ニ上陸後概ネ予定ノ線ニ地歩ヲ獲得シ 尔後ノ大場鎮、南翔、嘉定ノ敵陣攻撃ヲ準備スルヲ得タルハ 一ニ御稜威ニ依ルコトト感激ス 只此間兩師団將兵約四千二百ノ死傷ヲ生シ軍馬又約三百頭ヲ損失シタルハ哀悼ニ禁ヘス 今後大ニ志氣ヲ緊張シ増加兵団ノ来着ヲ俟テ 一挙決戦ヲ試ムヘク心念ヲ固メタリ

一、第十一師団ノ情况

羅店鎮方面変化ナク 其右翼方面ニ於テ敵ノ来襲アリシモ之ヲ擊攘セリ

左翼(元天谷、淺間支隊)ハ北曹、南曹附近ヨリ吳家宅、吳家橋ノ線ニ進出セルモ 最左翼ハ尚南毛巷、北家宅ノ線ニ在リテ 前面近ク何家店、曾家巷ヲ固守スル敵ト相對ス

二、第三師団ノ情况(終日小雨)

師団主力ハ前面ノ敵ヲ統テ攻撃シ 最右翼騎兵聯隊ヲ以テ小舎宅、威家宅ノ線ヲ 次テ歩二十九旅ヲ以テ北潘徑、火燒場、小朱宅、楊木橋ノ線ニ前進シ 其左翼ハ尚遲レテ養家塘、張宅ノ線ニ在リ 又II/68ヲ以テ其左翼ニ到リ新宅、賀宅ノ線ヲ占領スルモ 砲兵彈藥(主トシテ榴彈)ノ不足ト天候ニ妨ケラレル後ノ前進停滞ノ状ニアリ 更ニ兵力ヲ増加セサレハ劉家行、顧家宅ノ線ニ進出スルコト困難ト思ハル

吳淞根拠地及片山支隊方面情勢変化ナキモ 江湾鎮附近ノ敵兵尚依然陣地ヲ固守シ 却テ日々其両翼ヲ張出シテ我ヲ脅威シアリ

此日參謀本部派遣ノ有未少佐着ス 其謂フ所ニ依レハ參謀本部ノ北方ニ對スル配慮ハ何等ノ根拠ナク 只将来情勢ノ変化ヲ顧念スルニ過キサルコトヲ知り安心スルト共ニ 予ハ一度増兵ヲ得ハ飽迄其兵力ヲ以テ最小限蘇州、常熟、松江ノ線ニ迄進出スヘキ決心ヲ強クセリ 七夫ヨリ電信アリ佐藤ノ件ヲ申来ル

『上村利道參謀副長日記』
九月十四日 微雨後晴

(重藤支隊到着川沙江上陸)
新戰場の夕
稲田に稲は実れども
苅る人はなき秋の暮
鳥は宿舎に急げども
戦禍は続けて家はなし
此処吳淞の新戰場
夕陽赤く静かなり
敵は嘉定、南翔、大場、江湾の
線に後退中なるか如し

參謀本部作戰課員 砲兵少佐有未
次31期

◇九月十六日（小雨尚間歇）

天氣鬱陶敷第一線我將兵ノ安否ヲ思フト共ニ 經理部長ヲ督シテ給養ノ可良ヲ図ル 終日今後ノ作戰ヲ練ル

一、第十一師団方面ノ情況

大体變化ナシ

師団長ハ重藤支隊ヲ中央ニ集結シ中央突破ヲ図ル如シ 翼側ニ向フ攻撃ハ既往ノ經驗ニ鑑ミ徒ラ我正面ヲ拡大スルノ結果トナリ 無限ノ敵兵力ニ対スル戦法トシテハ考慮ノ余地多シ

尚旧天谷支隊ハ傷病多ク 殊ニ虎列拉ノ關係上前線突破後ハ一応後方ニ集結シテ 徹底的防疫手段ヲ講スルトノ事ナリ適當ノ配慮ト認ム 軍ハ之カ為メ本日軍防疫部ノ人員ヲ同隊ノ許ニ追及セシメ之レカ善後措置ヲ講セシム

尚師団ノ左翼隊ハ443合一旅団指揮ノ下ニ 馬橋、北塘口ノ敵陣地ヲ奪取セシモ爾後ノ攻撃未タ進捗セス

二、第三師団方面ノ戰況

師団主力方面ハ金家灣、楊家宅ノ線ニ進出セシモ爾後兩翼ノ戰況發展セス 仍テ軍ハ該方面兵力ノ増加ヲ必要ト認メ 曩ニ片山支隊ニ配屬セシ重砲兵大隊、獨立工兵中隊及第十八聯（隊）ノ一大隊、第三四（聯隊）ノ一中隊ヲ引抜キテ師団長ノ隸下ニ入ラシメ 又軍予備ノ68iノ一大隊ヲ師団ニ復帰セシム

尚片山支隊ノ為メ根拠地守備ノ6iノ一大隊ヲ同支隊ニ復帰セシメ更ニ後備歩兵一大隊ヲ増加ス 此正面ノ敵モ漸次兵力ヲ増加シ 時々我部隊ノ間隙ニ反擊ヲ試ムルナト形勢決シテ樂觀スル能ハス

此日新ニ後備歩兵五ヶ大隊來着ス 依テ其ニ大隊ヲシテ吳淞クリーク左岸根拠地ノ守備ニ一大隊ヲ右岸守備ニ配屬シ 一大隊ヲ片山支隊ニ残余ノ一大隊ヲ軍予備トス

第二課ノ情勢判断ニ依レハ敵軍頻ニ全般的ニ其兵力ヲ増加シ 大場、南翔、嘉定ノ線ヲ第一陣地トシ此ニ決戰ヲ企図スルモノノ如ク 尚師団前面ノ敵兵執拗ニ抵抗ヲ持續スル真意判シ難シ

◇九月十七日（終日小雨間歇）

今日モ鬱陶敷天氣ナリ 毎朝東天ヲ拜シテ天候ノ恢復ヲ祈願スルモ尚効ナク 日夜將兵ノ健康ヲ思フテ心安カラス

一、第十一師団方面ノ情況

羅店鎮方面大ナル變化ナシ

重藤支隊ハ川沙鎮南方ニ其兵力ヲ集結シ 一部ヲ川沙鎮西方約一里ノ吳家宅、南樊宅附近ニ出シテ前面ノ敵狀搜索中

師団右翼隊ハ馬橋、南塘口ヲ占領シ又淺間聯隊ハ此夜夜襲ヲ以テ馬家宅ヲ奪取セリ

尚天谷支隊方面戰況進展セス 虎列拉ハ其後統出ノ模様ナク敵ニ防疫中

二、第三師団方面ノ情況

主力及片山支隊兩方面共變化ナシ

有末少佐本日日出発帰京ニ付左ノ要旨ヲ伝言ス

一、軍將來ノ作戰ニ関スル意見具申

右ハ大要常熟、蘇州、嘉興ノ線迄作戰ヲ繼續シ 此ニ軍事、經濟、政治上江南ノ要地ヲ扼シテ之ヲ南京政府ト遮断セントアリテ 軍ハ最小限此迄攻撃ヲ遂行セサレハ爾後兵力ノ転用等至難ニシテ 結局軍ハ其任務達成上再度ノ増兵ヲ必要トスルニ至ル可 軍ノ威信ヲ傷クルコト甚大ナルヲ以テ 若シ北方ノ情勢是非軍ノ攻撃作戰ヲ中途ニ中止シテ 最小限ノ兵力ヲ以テ消極的態度ニ移ルヲ要スル場合ハ 寧ロ上海ヲ放棄スルコト軍ノ威信保持上有益ナリト云フニアリ

「上村利道參謀副長日記」
九月十六日 時々雨 冷氣加ハル

〔敵兵力46師団ニ達ス〕

降雨三日雲低ク聊カ氣腐ル、戰況余リ進展セス 本日ノ情報ニ依レハ敵ハ逐日増加シ 四十六師ニ達ス、氣ノ弱キモノハ叱驚ス

本夜本郷少佐ヨリ蔣介石対日戰闘法ニ関スル指令ヲ承知ス 敵ナカラ天晴ノ戦法ナリ、吾等ハ之ヲ破ル手ヲ考ヘサルヘカラス

○一点逐次崩シノ歩砲ノ緊密ナル協同 ○歩兵ノ前進姿勢ヲ低クシテ急カス ○重火器ノ逐次撃滅

○幹部ノ服装ヲ兵ト同様ニスルコト ○効力アル射撃、A、S A

○縦深配備新テノ攻撃

尚此場合軍ノ作戰ハ十二月初旬ニ亘ルヘク 然ル後已ムヲ得サレハ軍ノ兵力ヲ最小限五ヶ師団、後備歩兵十二大隊ト減スルコトヲ得ヘシ

二、軍目下ノ情勢判断

敵ノ兵力漸次増加シテ既ニ四十三ヶ師ニ及ヒ 今後尚二十師位増兵ノ可能性アリ 而カモ敵ハ大場、南翔、嘉定ノ線ニ在リテ我ニ決戦ヲ求ムルノ模様アルコト

尔後敵ハ常熟、蘇州、嘉興ノ線 次テ其後方江陰、無錫、杭州ノ線ヲ最後ノ陣地トシテ此ニ抵抗ヲ試ムヘク 最後ノ復廓陣地ハ南京東南方ノ線トシ逐次持久消耗戦ヲ試ムルナラン云々

尚別ニ予個人ノ意見トシテ 今後南京攻略ヲ実行スル場合ノ作戰方針并兵力ニ関スル所見ヲ筆記シ 次長ノ参考迄依托シ遣シタリ 其大要

一、作戰方針

軍ノ主力ヲ以テ江南地方太湖両側ノ地区ヨリ 南京東方及南方ヨリ之ヲ包圍的ニ攻略ス 別ニ一部ヲシテ杭州ヲ占領セシメ東浙地方ヲ領有ス

又一部隊ヲシテ江北地方通州、揚州、浦口等ノ要地ヲ占領シ 北支トノ遮断ヲ図ルコトアリ 二、所用兵力編組

方面軍司令部 一

特ニ有力ナル謀略機関ヲ附属ス

第一軍 野砲二、山砲一師団ヲ基幹トス

主トシテ太湖北方ヨリ南京東方ニ向ヒ作戰ス

第二軍 野、山砲各一ヶ師団

主トシテ太湖南方ヨリ南京南方ニ向ヒ作戰ス

独立山砲一ヶ師団

杭州ヲ占領シ東浙地方ヲ領有セシム

軍直屬部隊

重砲一旅団及其他ノ攻城砲兵

後備歩兵約十五大隊

鐵道一聯隊

其他略

方面軍ノ兵站監部 一

兵站諸隊ハ従来ノモノヲ若干増加スルノ外 特ニ水路兵站ニ必要ナル人員材料ヲ附属ス 但之ニ要スル小船舶ハ大部分当方ニ於テ徵用シ得ル見込

作戰時期

第一期 自十二月中旬 至一月下旬

江陰、無錫、湖州ヲ攻略シ 常州、宜興、広徳ノ線ニ進出

第二期 自二月上旬 至 同下旬

鎮江、句陽(谷)、漂水、寧国ノ線ヲ占領ス

第三期 自三月上旬 至 同下旬

南京攻略

右ハ十二月上旬迄ニ福山、常熟、蘇州、嘉興ノ線ヲ占領スルモノトシ 之ニ繼續スル作戰ヲ立案セシモノニシテ 今後軍謀略ノ成果如何ニ依リ其兵力及作戰時期ヲ減縮シ得ルモノトス 右ノ外今後軍ノ為メ人員彈薬ノ補充ニ付当局ノ考慮ヲ促シ 十月中旬中ニ更ニ約五千ノ補充ヲ必要トスルコト 及浦東ニ対スル作戰ハ其國際關係ニ及ホス關係深キニ因リ(浦東地区ニハ多数ノ外国工場アリ又南市ノ攻略ニ依リ多数兵民ノ各租界ヘノ遁入ニヨリ数多ノ混雜ヲ惹起スル虞多シ)努メテ一般上海西方地区ノ決戦ニ因リ 自然的ニ浦東及南市附近ノ敵ノ退却ヲ図リ 此方面ノ武力の強圧ハ努メテ之ヲ軽減シ度希望ナルヲ以テ 之レカ為メ我海軍及居留民間ニ多少ノ不満ヲ感スルコトアルモ 之ヲ忍フヘキ方針ナルコトヲ予告セシメタリ

又軍既往ノ作戰ノ經驗ヨリセハ 包圍戦法ハ目下我軍ノ最モ奨励セル戦法ナルモ 目下ノ如キ殆ト無限ニ優勢ナル敵軍ニ対スル包圍攻撃ハ 徒ラニ我正面ヲ拡大シ我軍ノ突撃力ヲ薄弱ナラシムルニ過キス 寧ロ中央突破的攻撃法ヲ優レルモノト認ムルコトオモ附言セリ
此他軍目下ノ虎列拉ヲ始メ多大ノ戦傷ヲ生セシコトハ 誠ニ恐懼ノ至リナルモ真ニ已ムヲ得サル事情ニ出ツ 今後一層注意ヲ倍従シ誓テ軍任務ノ大成ニ努力センコトヲ期スル旨 総長殿下ニ言上方依頼ス

尚今日迄知り得タル軍ノ戦傷ハ十五日調ニテ死傷約五千五百ニ達シ 外ニ各種病患者五百ヲ突破シ死者総計ハ二千ニ垂ントス 痛惜ノ極ナリ

◇九月十八日

朝来小雨尚歌マス陰鬱極リナシ 重ネテ東天ヲ拝シテ天候ノ恢復ヲ祈念ス

一、第十一師団方面ノ情况

概シテ大ナル変化ナシ

仍テ軍ハ当師団ニ対シ前面ノ敵ヲ攻撃シテ努メテ速ク西方ニ之ヲ撃攘スヘキヲ以テセリ 蓋シ軍ハ当初該師団ニ嘉定攻撃ヲ命シタルコトアルモ コハ其後ノ情况ニ応シ自然的ニ延期セラレアリ 其後軍今後ノ作戰ノ為メ速ニ該師団当面ノ敵ヲ西方ニ驅逐スヘキ希望ハ 既ニ屢々内示シ該師団亦之ヲ実行シツツアリタルカ 其進捗ノ捗々シカラサルト軍ノ意図ヲ明示シ置クノ必要ヲ認メタルカ為メニシテ 敢テ該師団ヲ激励スルノ意ニハアラス 思フニ第十一師団ハ当初来久敷苦戦ヲ重ネ 又今天谷支隊ノ傷病極メテ多数ニ登リ其情状察スヘキモノアリ 予ハ今特ニ之ヲ激励スルノ情ニ忍ヒサルモノアレハナリ 因テ此意ヲ幕僚一同ニ伝ヘ善処方特ニ注意ヲ与ヘタリ

此夜師団ノ一部ハ馬家橋「宅」ヲ夜襲シ雨天ト薄暮ヲ利用シ容易ニ其目的ヲ達シ鹵獲アリ 二、第三師団ノ情况

当師団前面ノ情勢依然変化ナシ 蓋シ軍ハ当面ノ戦況ヲ發展セシムルコト今後ノ作戦準備上必要ナリト認メ 一昨日既ニ歩砲兵ヲ其主力方面ニ増加シタルモ 打続ク天候ノ為メカ師団ノ攻撃準備未タ成ラス 遂ニ格別ノ進況ヲ呈スルニ至ラス
片山支隊方面モ変化ナシ

此日襲ニ軍ニ増加セラレタル飛行兵団司令部及戦闘一中隊共台湾ヨリ来着ス 依テ即時上陸セシメ宝山城南側ニ設備中ノ飛行場ニ飛行準備ヲ命ス 又后備歩兵大隊未着ノモノ逐次来着セルニ依リ 重藤支隊ニ后備山砲一中、工兵一中隊ヲ配属シ貴陽灣ニ上陸其隸下ニ入ラシム

此夜二回敵機ノ襲来アリ機数僅ニ一機宛ナルモ宝山城及楊行鎮附近ヲ爆撃シ去レリ 我根拠地ノ高射砲、機関銃等相当ニ射撃セルモ効ナシ 蓋シ高射砲隊ハ其素質不良ナリ今後大ニ訓練ヲ要スルモノト認ム

天氣陰鬱心中憂悶ニ堪ヘス 即日

執拗妖氛自西起 一雲過去一雲迷

東方旭暉昭乎輝 光被暗暝照蒼生

又曰ク

汗了絨衣四十年 興亡如夢大江流

君恩未酬人將老 執戟又来四百州

旧作ヲ改作セルモノナリ

數日来鳥来り歌ヒ 山羊、犬ナト漸次何処カラカ出テ来り庭内ヲ逍遙スルヲ見ル 即吟シテ

曰ク

鳥降りて山羊来り狗もまた

所詮主人もやかてそろそろ

又曰ク(支那人未帰ヲ歎シテ)

来るものは拒まぬものを我君の

『飯沼守日記』九月十八日

軍将来ノ北進ニ関スル意見ヲ第一課ト連絡不十分ノ為イザコザアリ司令官ニ御断リシ善後処置ヲ為ス 司令官カ長(第一課長)ヲ信頼サレ西原(第一課長)ハ長ノ言ヲ重視シナイト云フ所ニモ基因スルト考ヘラル

*伊藤範治(のりぢ)大佐の手記によれば、高射砲隊(2門編成)14隊、照空隊(3灯3機)5隊を統一指揮するため、十月に入って急速、第二高射砲兵司令部を編成派遣されたが、東京出発時中央から「司令官の任務は戦闘指揮にあらずして軍紀風紀の取締まりにあり」と聞かされ、啞然としたという。
しかし、十二月十三日湯水鎮の派遣軍司令部が敵兵に襲撃されたときは、これを射撃して四散せしめ、軍司令官から賞詞を受けている。(『砲兵沿革史』による)

みこと知らずや唐土の民

◇九月十九日

数日来ノ陰雨今日ヨリ漸ク晴レ初メ 久シ振二天日ヲ拜シ快極リナシ

一、第十一師団ノ情況

第十一師団ハ明二十日ヲ期シ前面ノ敵ヲ攻撃スルニ決シ新二部署ヲ改メタリ

即羅店鎮西北部ノ守備ヲ重藤支隊ト交代シ 師団ノ全カヲ羅店南端及其東方地区ニ集メ狭小ナル正面ヲ以テ敵陣ヲ突破セントスルニアリ 其進出線ヲ羅店南方小堂子、北朱宅及蔣家宅ノ線ニ択ミタルハ 余リニ消極ナリト思ハルルモ師団ノ現狀已ムヲ得サルカ

重藤支隊ハ其一部ヲ以テ羅店鎮西北方地区ヲ守備セシメ 主力ヲ以テ遠ク其北方約六七キロノ陳宅、張宅及沈家村附近ヨリ西南方ニ対シ敵ヲ攻撃スルニ決シ 本日既ニ攻撃ヲ開始シ夕刻沈家村ヲ占領セリトノ報アリ

旧天谷支隊ノ虎列拉ハ最早統出ノ模様ナキモ傷病相当多ク 天谷少将モ昨日来赤痢ニ罹リ月浦鎮野戦病院ニ収容セラレタルモ 本日ニ至リ病勢頓ニ衰へ最早心配無用ノ様子ナリ

二、第三師団ノ情況

戰況変化ナク 昨日敵兵全正面ニ於テ反攻シ来リタルモ之ヲ撃退セリ 然レトモ師団ハ最早急速ニ前面ノ敵ヲ撃破スルノ氣力ナキモノノ如ク 師団長ヨリハ劉家行ノ占領ヲ激励シツツアルモ意ノ如クナラストノ私信アリ 聞ク所ニ依レハ此日師団ハ幕僚會議ノ結果 二三日間攻撃ヲ見合スコトニ決シタリト云ヒ 此方面ノ攻撃ハ新ニ補充ノ到着(二十五日二千入着ノ筈)ノ上ナラテハ実行困難ナラスヤト思ハル 是亦余儀ナキ次第ナリ 其正面広ク各所兵力薄弱ナリ 片山支隊方面変化ナシ

值賀飛行団司令官ノ報告ニ依レハ 宝山南方飛行場ノ整備抄々シカラス尚一週日ヲ要スヘシトノコトニ付 新ニ後備歩兵一大隊ヲ該少将ノ指揮ニ屬シ急遽飛行場ノ整備ヲ実施スルコトト

シタリ

今日ハ東京出發以來一ヶ月ノ紀念日ナリ 一句ナカルヘカラス 即日ク

莅戰陣不顧生還

一死固期報君國

踟躕未斷帷幕臣

祈無辱皇軍威武

◇九月二十日

今日モ亦天氣晴朗 朝夕秋氣漸ク迫ル

一、第十一師団ノ情況

本師団ハ本日前面ノ敵ヲ攻撃スル予定ナリシカ準備未完ノ為メ明日ニ延期ス 只重藤支隊ハ少々敵ヲ西南方ニ庄迫シツツアリ 既ニ將兵約二百名ノ犠牲アリ油斷無理ハ出来ス

二、第三師団ノ情況

狀況全般ニ変化ナシ

然ルニ午後二至リ飛行偵察ノ結果ニ依レハ 此朝ヨリ兩師団前面ノ敵兵一齊ニ少許宛退却シツツアルコトヲ知り 兩師団ニ命スルニ追撃ヲ以テシ 第十一師団ハ唐家宅(羅店西方約二キロ)南北ノ線ニ 第三師団ハ広福(劉家行西方約三キロ)陳家行(広福東南約三キロ)ノ線ニ進出シ 有力ナル一部ヲ以テ瀟灑浜南側地区ニ進出セシメ 尔後大場鎮ニ対スル攻撃ヲ準備セシムルコトトセルモ 此日中兩師団直前ノ敵ハ依然陣地ヲ固守シテ追撃ニ就クコトヲ得ス

東宝山城病院ニ於ケル下痢患者 尚逐増シ看護不可能ノ為メ特ニ方法ヲ研究セシム 大使館田尾書記官及新二軍司令部付二命セラレタル岡崎總領事來訪ス 由テ左ノ要旨ヲ川添

(越)大使ニ伝達方申入ル

一、浦東地区及南市ハ從來敵軍アリテ 屢次我海軍及居留民ヲ砲撃シ數多ノ損害ヲ与ヘツツアルモ 該地方ニハ英米諸國ノ工場倉庫等多ク 且ツ南市ハ避難人民多數蟄集シアリトノコトナレハ 其人民ニ与フル被害ヲ避ケ且ツ列國ノ權益ヲ損傷セサル考慮ノ下ニ今日迄攻撃ヲ猶

『上村利道參謀副長日記』
九月十九日 曇

(南京空襲)

空襲空襲又空襲 僚機併翼上壯途

爆音轟所新機墜 江西秋色漸明朗
海軍機大挙南京空襲敵機二十四

擊墜我損害四
重藤旅団攻撃ヲ開始ス(羅店北方地区)

仲秋ノ明月天ニ在リ雲去来スル
月光光彩ニ敵機モ影ヲ潜メテ来

ラス銃砲声モ聞エス戰場極メテ静
肅ナリ

九月十九日 第三艦隊司令長官、
在上海各國總領事に南京爆撃を予
告(二十日、非戦闘員の避退勸
告)。海軍第一聯合航空隊、南京
空襲開始(九月二十五日まで)に空
襲十一回)

予シツツアリシカ 今後情勢ノ進展ニ伴ヒ自然 遂ニ之等地方ノ攻撃ヲ断行セサルヲ得サル
場合アルヲ想像セラルニ付 此儀ニ付予メ諸外国大使館ニ申送り 諸国力停戦協定実行監
督ノ責ヲ尽ササリシ結果 今次ノ事變ヲ惹起シタル所以ナルコトヲ想起シ 善処方ヲ希望ス
ル旨伝ヘラレ度コト

二、目下英国商船多数黄浦江下流地方ニ転錨シ来レルカ 右ハ支那側ノ希望ニ出ルトノ事ナル
カ 該地区ハ今後我軍ノ浦東攻撃ニ際シ極メテ危険多キ部分ナルヲ以テ 危険防止上軍ハ努
メテ右商船ノ揚子江本流下流地方ニ転錨方希望ス 從テ若シ該船舶ニシテ本警告ニ従ハス依
然現在ノ地ニ在泊スルニ於テハ 將來ノ戦鬪ニ依ル被害ニ関シ軍ハ其責任ヲ取ル能ハス 加
之該船舶ノ本錨地仮泊ハ不少我軍ノ行動ヲ妨害スルノミナラス 該船上ニアル多数支那人ハ
此所ヨリ能ク我軍ノ行動ヲ目撃視察シ得ヘク 自然我軍ノ作戦行動ヲ敵軍ニ知ラシムル虞多
ク我軍ニ受クル不利益不尠 從テ英国船ノ該地停泊ハ今後自然我軍ヲ不利ニシテ支那軍ヲ利
スル結果ヲ生スルモノナルコトヲ 英国側ニ想起セシムルノ必要ナルコト

三、目下在楊樹浦ノ支那人所有米糧ヲ米国人ノ名ヲ以テ移送方交渉アル由ナルモ 右ハ当方ノ
調査ニ依レハ支那人ノ所有ニ係ルモノニテ 軍ハ目下作戦ノ必要上之ヲ控置シオルモノナレ
ハ遽ニ移出ヲ許可スルヲ得ス 將來上海居留地及南市方面避難民ノ食糧欠乏等ノコトアル場
合ニハ 日本軍ハ自ら贈恤其他便宜ノ方法ヲ執ルニ吝ナラサルヘク 此点ハ意ヲ安ンシテ可
ナルコトヲ以テ米國側ニ応答シ置カレ度コト

尚本第三項ノ件ニ関シ東京ヨリ發信人不明ノ電報アリ 參謀長宛ニテ出所不明ノ情報トシテ
軍ノ作戦上差支ナキ限 米ノ移出ヲ許可セラレ度希望ノ意ヲ申来レルモ 事實不審ナルヲ以テ
本電ノ調査方命ス

又本日武官ノ報ニ依レハ愈々上海市長ト仏國総領事トノ間ニ 南市ハ一時仏西租界ノ管理ニ入
ラシムルコトニ付協議中トノコトニテ 南市ノ損害ヲ防キ避難民ノ租界遁入ヲ防ク為メ双方共
好都合ノ計画ニシテ將來実現ノ可能性アルニ付 可成速ニ南市ヲ爆撃シテ其經濟資源ヲ覆滅ス

ルヲ可ナリトスル意見 幕僚ノ間ニモアレトモ コハ人道上ノ見地及國際關係ノ紛糾ヲ避クル
為メ最後ノ時期迄之ヲ猶予スルヲ可ナリト認メ 先ツ前記ノ如ク予メ好意的ニ列國殊ニ仏國ノ
考慮ヲ促スコトトナシタル次第ナリ 尚本件ニ付テハ齊藤博士ニ命シ大使館及海軍方面共協議
研究方促シ置キタリ

今日ハ中秋節ナリ折能クモ夕方快晴 十五夜ノ月高ク清シ 即曰ク

述 懷

月照陣宮千里明 戰馬嘶處有孤影

砲擊熄後滿野寂 暫倚破窓聽虫声

又懷戰陣

月照戰陣旌旗鮮 孤影在處鬼氣醒

劍戟暫斂滿夜寂 斜覺賜刀懷忠靈

又

露とけて骨ひろう良し秋の月

又懷故郷

月高く楊の枝にかかりたる

御靈にすかる遺族いかに

◇九月二十一日(追撃命令ノ失敗)

天氣又晴レ来ラス時々暗雲来リテ天日ヲ覆フ 實際江南ノ現状其俾ナリ憂悶ニ耐ヘス

一、第十一師團ノ情況

三時右翼重藤支隊ハ漸次敵ヲ圧迫シテ旋陸屯、新徐宅、蔣宅ノ線ニ進出セルカ 相当ノ犠牲
アリシカ如シ

師團ハ本朝来羅店東南方ノ敵ヲ攻撃シテ 夕刻迄ニ巽家宅、周家宅、金家村、朱家宅ノ線ニ

原田熊吉 22期 12・8・13 駐支武
官 13・2・18 中支那派遣軍特務
部長

兪鴻鈞 (一八九七—一九六〇)

吳鉄城 上海市長の下で秘書長を
務めたのち、一九三七年市長に就

任。欧米派。中国側スポークスマ
ンとして莫大な宣伝費に物を言わ
せ、パーク・ホテルで自ら陣頭に
立ってプレス・インタビューを行
い、「日本軍を揚子江と黄浦江に
叩き込むのは時間の問題だ」との
彼の大言壮語は、上海派遣軍報導
部の活動を押し大きく海外の新聞
に報道された。蒋介石の信任を
得、その後財政部長、中央銀行総
裁を歴任。内戦後台湾に渡り、一
九五三年台湾省主席、次いで行政
院長となった。(宇都宮直賢回想
「黄河・揚子江・珠江」による)

前進スルヲ得タルモ尔後ノ戦況發展セス

本日西原大佐ヲ同師団ニ派遣シ情況ヲ視察セシメタルニ 同師団ノ志氣ハ旺盛ニシテ力攻ヲ期シアルトノ事ニテ此点ハ安心セリ 只砲兵彈藥殊ニ榴彈ノ補充意ノ如クナラサル由ニ付 之ニ付第三課ヲ督シテ其補充ニ遺憾ナカラシムル様命令ス

二、第三師団ノ情況
戦況進展セス

要之昨日飛行機偵察ニヨル敵軍退却ノ報ハ真実ニアラス 両師団方面共依然前面ノ敵軍未タ動搖ノ色ナク 両師団共ニ相当攻撃ヲ督励シアルモ何分連日ノ疲労ト多少ノ臆氣トニ依リ戦況進展セサルハ遺憾ナリ 今後補充部隊ノ来着ヲ俟タサレハ其直前敵兵ノ突破モ不可能ナラスヤト思ハル 尚軍トシテ昨日輕拳追撃ヲ命シ而カモ遠ク西方ニ目標ヲ与ヘタルハ不明ノ至 今後十分ノ注意ヲ要スルモノト認ム 事実昨日予モ多少ノ疑懼ナキニアラサリシモ 一面両師団激励ノ心持モアリテ之ヲ採用発令シタルハ予ノ不明ノ致ス所ナリ

本日新ニ黄浦江下流ニ仮泊セル英國船脅威ノ目的ヲ以テ 數発迫撃砲彈ヲ船舶ノ附近水中ニ落シタル処 其二隻ハ急遽錨ヲ揚ケテ避航シ目的ヲ達シタルモ尚一隻ハ依然頑張りオル由 何レモ二千噸級ノ沿岸航路船ニテ中ニ多數ノ支那人アリ 軍ノ行動ヲ偵察スルニ極メテ便宜ノ位置ニアルモノニ付 今後共同ト力之ヲ驅逐スルノ法ヲ講スルノ要アリト思ハル

昨日上海居留民団長始(メ) 船津辰一郎及三菱銀行ノ吉田氏等軍司令部ニ來訪見舞品ヲ持來ル仍テ軍作戦ノ情況ヲ告ケ一挙上海附近ノ敵ヲ撃攘スルヲ為メ 尚当分ノ間居留民ノ隱忍ヲ希望シ彼等亦能ク予ノ意ヲ諒シ帰還セリ

徳川侯ヨリ白鷹五樽寄贈ノ旨陸軍省毛利中佐ヨリ通報アリ 又西本願寺其他ヨリモ贈物アリ又内地各方面ヨリ予個人及軍將兵ニ對シ感謝電來着スルモノ多シ

露とけて骨ひるうらし武士の

思ひてらすや秋の夜の月

◇九月二十二日

天氣尚明朗ナラス時々小雨アリ焦燥ノ念ニ禁セス

一、第十一師団ノ情況

第十一師団ハ当面ノ攻撃ヲ容易ナラシムル為メ 重藤支隊ノ位置ヲ騎兵聯隊ニ譲リ主力ヲ以テ羅店西北方地区ニ移ラシメ 師団ノ主力ヲ以テ羅店東南地区ニ向ヒ攻撃ヲ開始シ 其右翼方面ニ於テ概ネ荻窪ノ線ニ進出セシモ 同窪ハ巾二十米ノ障碍ニシテ爾後ノ攻撃遂ニ進捗セス 左翼方面殊ニ最左翼12iノ正面ニ在リテハ敵兵依然陣地ヲ固守シ攻撃毫モ進捗セス 面ニテハ敵兵尚遠ク東方ニ現在シ何家店、曹家巷ヲ固守ス(羅店東南約一里)

二、第三師団ノ情況

第三師団ハ綿密ナル計画ニ依リ 今後五日間ニ亘リ連続一步宛敵ヲ驅逐シテ劉家行、顧家宅ノ線ニ進出スルニ決シ 本日ヨリ攻撃開始ニ着手セルモ戦線ハ概シテ変化ナク 曩日金家灣ハ敵ノ恢復攻撃ニ依リ一時之ヲ喪失セシ部分ヲ奪還セシニ過キス 片山支隊方面変化ナシ

吳淞クリーク右岸根拠地守備西正面ニ對シテハ 夜半敵兵約二百反攻シ來リタルモ守備後備隊之ヲ撃攘セリ損傷僅二一名ニ過キス

第一百師団ハ昨夜吳淞錨地ニ其先登ヲ以テ到着シ 本曉ヨリ上陸ヲ開始セリ

師団長伊東中將此朝幕僚ヲ伴ヒ來謁ス 仍テ此師団ハ其集結ヲ俟テ吳淞クリーク兩岸地区ヨリ第三師団ノ左翼ニ到リ進出スヘク準備ヲ命シ 尚敵ノ情勢及衛生上ニ関シ注意ヲ与フ

師団長ノ報告ニ依レハ 該師団ハ大隊長以上ハ皆現役ニシテ中隊長ハ概ネ半数現役他ハ予備役ニシテ下士官兵ノ素質モ割合ニ良好ニシテ 編成ハ野戰師団ニ比シ固トヨリ遜色アルモ歩兵聯隊ニハ特ニ機関銃一隊ヲ附属セラレ 砲兵ハ三八式野砲ニシテ41式ニ劣ルモ運動性ハ反テ有利ナリ

船津辰一郎ハ總領事として上海・奉天在勤↓駐ドイツ大使館參事官、當時在華日本紡績同業會總務理事、のち上海特別市政府顧問となる。

「95式(野砲)ニ劣ルモ」、あるいは「91式(十榴)ニ劣ルモ」の誤記

此クテ本師団ノ実力ハ野戦師団殊ニ乙師団ニ比スレハ寧口優ルトモ劣ラス 相当ノ自信アル旨ヲ語レルハ欣懐ノ至ナリ

回顧スレハ今日ハ 予等先月軍艦足柄ニ在リテ馬鞍群島ニ到着シ上陸作戦ヲ練リシ日ナリ 尔来一ヶ月軍ハ悪戦苦闘能ク現在ノ地步ヲ江南ノ一角ニ占有シタリ 目下兩師団共敵ト近ク相對峙シアリ一ヶ月間日夜連続攻撃ヲ敢行シ来リツツアリテ 為メ二本日迄ノ兩師団ノ死傷ハ既ニ六千ヲ超エ各種ノ病兵亦一千ニ垂ントシ 多大ノ犠牲ノ下ニ能ク尔後ノ攻撃ヲ準備シツツアリ 戦況必スシモ樂觀ヲ許サス殊ニ第三師団ハ補充兵未着ノ為メ 某々中隊ノ如キハ伍長ノ指揮スル四五十名ニ過キサルモノアリ 戦況自然膠着セルハ已ムヲ得サル処ナリ 偶軍ノ増加部隊ノ先登トシテ本日第百一師団ノ上陸ヲ見ルニ至レルハ欣懐之二過クルモノナシ 尚後続兵団及軍直屬重砲兵旅団、飛行中隊ナト続テ来着シ 概ネ十月五日迄ニ戦列諸隊ノ上陸ヲ終了スル予定ナレハ 軍ハ此頃ヨリ全面的一挙攻撃ヲ開始シ得ルモノト鶴首其日ノ到着ヲ俟ツ 一日千秋ノ思深シ

運輸部付田尻少將運輸部出張員トシテ 軍方面ニ於ケル全運輸機關統率ノ任務ヲ以テ昨日着任セリ 少將ハ多年運輸界ノ重鎮ニシテ上海事件ノ經驗モアリ 予モ特ニ私的ニ最モ熟知ノ人ナレハ今後軍ノ作戦及補給ニ関シテハ 非常ノ便益ヲ得ヘク是亦欣悦至極ナリ 尚之二伴ヒ前任桜井大佐ハ帰京ノコトトナレリ 大佐ハ運輸部業務ニ付現場ノ經驗ナキ為メ相当其任ノ困難ナリシニ係ハ(ラ)ス 能ク精勵シテ今日迄軍諸隊ノ揚陸ニ多大ノ効驗ヲ顯シタルハ感謝ノ至ナリ

尚冀ニ到着セル飛行団司令部并台灣戰鬪中隊ハ 先日來ノ天候ノ為飛行場設備遲延シアル為メ未タ其用ヲ為スヲ得ス 遺憾ノ次第二付本日当局者ヲ督勵シ昼夜兼行飛行場ノ整備ヲ急クヘキ旨命ス 此部隊共遅レハセニ台灣ヨリ来リ其気分緊張聊力足ラサルノ感アリシヲ以テ特ニ督勵ヲ加ヘシモノナリ

◇九月二十三日(敵兵毒瓦斯使用?)

本日霖雨尚霽レス時々小雨アリ、陰鬱極リナシ

一、第十一師団ノ情况

重藤支隊方面格別ノ変化ナシ

師団主力ハ昨日ニ続キテ攻撃ヲ力行シ 羅店镇南端ヨリ又坑道作業ト相俟テ其南方奚家宅附近ヲ占領スルヲ得タリ 其中央及左翼方面ハ依然尚進展セス

二、第三師団ノ情况

師団ハ昨日來攻撃準備ヲ整ヘ攻撃ヲ開始シ 中央方面ニ於テ畜里ヲ占領シ捕虜十余名ヲ得タルモ 尔他ノ正面ハ戦況何等ノ進展ヲ見ス

片山支隊方面亦変化ナシ

此夜当師団正面ニ向ヒ約二十発ニ亘リ野砲射撃ヲ受ケタルカ 其際彈着地附近ニ石鹼様ノ臭氣ヲ感シ数名ノ將兵咽喉ヲ軽度ニ損ヒタリ 早速化学研究所員ヲ遣シ調査セシメタル処 我亦筒ニ類スル毒瓦斯ノ作用ナリト察セラレ 更ニ調査ヲ続ケアルモ本日ハ何等此種ノ射撃無ク其後ノ研究未了ナリ 蓋シ敵軍ニ毒瓦斯彈使用ノ準備アリトハ考ヘラレサルモ 最近蘇支密約成立ノ關係モアリ余リ油断モナラサルニ付 全線ニ對シ之レカ予防ヲ講セシムルト共ニ 一方東京ニ急電シテ將來之レカ報復手段ヲ執ルノ必要アル場合ヲ顧慮シ 赤筒彈藥ノ至急送付方電請セシム 尚之二関シ師団ニテハ其携帯スル綠筒ノ使用ヲ申出テタルモ 敵軍毒瓦斯使用ノコト未タ確實ナラサルヲ以テ、暫ク之ヲ使用セシメサル事ニ命令ス

第百一師団ノ上陸ハ順調ニ進捗シアリ

◇九月二十四日

霖雨未収憂愁無極 只東天ヲ拜シテ神威ヲ禱ル

在宇品、第一船舶輸送司令官・松田卷平¹⁵期中将は、軍隊区分により中支那碇泊場監部(碇泊場監・田尻昌次¹⁸期少將)を編成上海に派遣し、前任・桜井省三²³期大佐は企画院調査官に転出した。田尻少將は上陸作戦の第一人者で、第一次上海戦の際にも中国軍の背後を衝いた七了口上陸作戦計画策定の主務者であった。

第三飛行団司令部(長少將・植賀忠治¹⁹期)独立飛行第十中隊(長安部勇雄³⁹期)九五式戦闘機十二機

一、第十一師団ノ情況

重藤支隊ハ王家宅附近ニ進出シ 師団右翼隊ハ遂ニ敵ヲ驅逐シテ 羅店―大場道西方小堂子、小張宅、北朱宅ノ師団ノ予定線ニ進出セリ 和知聯隊ノ勇猛何時モ作ラ敬服ノ至ナリ

尚其43 iハ左折シテ陶家宅、唐灣ノ線ニ進出セルモ左翼隊方面ノ攻撃ハ依然進捗セス 蓋シ当面ニハ教導總隊其他中央直系ノ最強部隊ノアル故ニモアラレケレト 12 iノ虎列拉、旅団長ノ病氣等不少原因セルモノト思ル

二、第三師団ノ情況

戰況進展セス 又只其一部無電台ヲ占領セリトノ報アレト不確

此日天谷少將全治退院セリトテ挨拶ノ為メ来リ 戰況ニ関スル經驗談ヲ聞ク 其要

一、堅固ナル陣地ニ在ル敵ハ遂ニ砲兵ノ威力ニテ之ヲ撃退スル能ハス 結局銃劍ニ依ラサルヘカラサルコト

二、軍隊ノ正面過広ニ失シ迫力足ラス

三、戰鬪久シキニ亘レハ休養其志氣恢復ノ為メ適時他隊ト交代セシムルノ考慮ヲ要スヘシ

何レモ実験談トシテ謹聴ノ値アルモノト認ム 殊ニ正面ノ過広ハ我軍多年教育ノ欠陥トシテ大ニ慎ムヘキモノナリト感シアリ

本日百一師団ノ使用ニ付幕僚等ノ意見予ト一致セス 蓋シ幕僚一致ノ意見ハ吳淞クリーク右岸ノ地区ヲ全然解放ノ後 同師団ヲ其北方地区ヨリ第三師団ノ右ニ並列セシメントスルニ在リ之レ師団ノ前進ヲ容易ナラシメ又クリーク南方地区ノ敵ノ抵抗ヲ避クル為メニハ都合ヨキモ軍ノ主根拠地ハ何時迄モ開放セラレ 固トヨリ後備部隊ニヨリ直接ノ掩護ハ出来居レトモ 其区域狭小ニシテ敵ノ砲撃ニ対シテモ安全ナラス 将来大場鎮本攻ノ際ニ於ケル包圍セラレタル敵ノ 窮鼠猫ヲ食(噉)ムノ患ナキニ非ス 殊ニ本戦ニ際シ四ヶ師団ノ兵力ヲ大場鎮北方ニ展開シ 更ニ重攻砲ノ展開後方ノ補給等ノ為メ 目下使用シ得ル道路ハ楊行鎮道一条ノミニテ現ニ工兵隊ニヨリ道路ノ修築中ナルモ 急速ニ数条ノ砲車道ヲ得ルコト望ミナク 從テ此際吳淞

クリークノ水路ヲ利用スルコトハ作戰上頗ル有利ナリ 予ハ此レカ為メ多少ノ犠牲ヲ厭ハス少クモ一部隊ヲシテクリーク右岸ノ地区ヲ可成西方ニ清掃シツツ 漸次第三師団ノ右ニ到ラシメンコトヲ希望セルモ 幕僚等ハ之ニ因テ生スル百一師団戦力ノ減耗ヲ考慮シテ飽迄前説ヲ主張スルニ因リ 予モ遂ニ英斷其説ヲ容レ其代リ諸隊ノ全力ヲ以テ道路ノ修築ニ当ラシムヘク命ス

◇九月二十五日

今日久振ニ午後ニ至リ快晴トナリタレトモ南風暖湿ヲ吹来リ蒸暑堪ヘ難シ 天候未タ恢復ト認メ難キヲ患フ

一、第十一師団ノ情況

重藤支隊方面変化ナシ

師団右翼隊ハ今日更ニ前進シテ小堂子、小張宅、北朱宅、殷家宅ノ線ニ進出セルモ 中央、左翼方面ハ進捗ヲ見ス

二、第三師団ノ情況

師団最右翼方面ニテハ 68 i進ンテ林家宅ヲ占領セル外情況変化ナシ

此日片山支隊ヲシテ第百一師ノ部隊ト交代シ 二十八日以来師団主力方面ニ復帰スヘク命令ス 蓋シ当師団ノ迫力漸ク衰ヘ今後本師団ヲシテ大場鎮攻撃ノ核心タラシムルニハ 之ヲ強化スルノ必要ヲ感シタルニ依ル

尚当師団ノ補充員約二千名本日到着 師団ノ志氣ハ振興スルモノト認ム

三、第百一師団ノ情況

師団ハ本日ヲ以テ戦列部隊全部ノ上陸ヲ了リ 前日来ノ攻撃準備整ヒタルヲ以テ本夕刻ヨリ其先頭部隊ヲ以テ吳淞鎮ヲ出發 蘆藻潭北側地区ヨリ第三師団ノ左翼ニ向ヒ前進ヲ始ム 但シ当師団ノ進出ノ為メ前日来修築中ノ道路未完成ノ為 尔余ノ諸隊砲兵ノ主力ハ明日以後之ニ追及スルコトトナラン

九月二十五日 政府、日中紛争に
関する國際連盟諮問委員會の招請
(九月二十一日)を拒絶

尚谷川大佐ヲシテ第三百三聯隊ニ後備歩兵二大隊、砲兵二中隊ヲ附シ 片山支隊ニ代リテ其地ヲ守備シ敵軍ナル工事ヲ施シ 今後軍左翼及根拠地ヲ防守セシムルコトトセリ 当面ノ敵ノ兵力ハ約一万ニシテ時々反抗の小基模ノ行動アルモ 本兵力ヲ以テ之ヲ扼守スルニ足ルモノト認ム 尚要スレハ海軍ノ援助ヲ得ルノ便アレハ患フニ足ラスト認メ此ク措置シタルナリ 本日岡本上海総領事來訪 虹口在米貨搬出ニ関シ予ノ意見ヲ求メタルニ依リ 大要如左答ヘタリ

一、同地在米ハ將來支那人ノ虹口復歸ニ伴ヒ糧食トシテ必須ノモノナレハ 可成之ヲ貯存スルノ要アリ

尚將來上海陥落ニ際シ多数(約二、三万?)ノ捕虜アルヲ予期スルニ依リ 之レカ糧食用トシテ軍ハ之ヲ控置シ度意嚮ヲ有シ 要スレハ之ヲ購入スルモ可ナリ

二、尚同米ノ搬出ハ結局支那軍ノ用ニ供セラルル虞多キヲ以テ可成之ヲ搬出セシメサル希望ニテ 要スレハ作戦ノ必要上搬出ヲ禁スル旨公表シ差支ナキモノト思考ス

三、上海ニ於テ將來真ニ米穀欠乏シ動乱ヲ生スル如キ情勢ニ至ラハ 軍ハ自發的ニ人道上之ヲ救恤スルニ必要ナル手段ヲ講スルニ吝ナラス

総領事ハ此意ヲ体シ可成搬出セサル旨誓ヒ帰レリ 中西滿鐵理事 松岡総裁ノ書信ヲ持シ慰問ニ來ル

◇九月二十六日

天候漸次恢復ノ徵アレトモ尚陰雲アリ而モ時々小雨ヲ下ス

一、第十一師団ノ情況 大体変化ナシ

聞ク旧天谷支隊ノ死傷ハ計千四百ニ達シ 病者ノ計又七百ヲ超エ殆ト兵員ノ約半数ヲ減耗シタルモノニシテ 補充員ノ一部ハ既ニ到着セシモ人員少数ニシテ 歩十二ノ志氣ノ振興ハ更ニ

補充員ノ來着ヲ俟タサル可ラス

二、第三師団ノ情況

右翼方面ニ於テ多少第一線ヲ進出セシメタルモ大体変化ナシ 但其最左翼18iハ本日第一師団ノ部隊ト交代スル筈ナルト 本日補充兵約二千ノ到着ニ由リ大ニ戦力ヲ増加シ 兩三日中ニハ形勢好転スルモノト認ム

三、第一師団ノ情況

師団ハ此日ヲ以テ殆ト戦列部隊ノ上陸ヲ完了シ前進ヲ準備中ニシテ 佐藤少將ノ指揮スル149聯隊ヲ基幹トスル部隊ハ 昨夜二行軍ヲ以テ第三師団左翼隊ノ後方地区大王宅附近ニ集結シ 本夜第三師団ノ部隊ト交代シ尔後ノ攻撃ヲ準備シツツアリ 此クテ師団ハ三十日朝頃ヨリ攻撃開始ノ希望ナリシモ 予ハ第三師団ノ苦戦ヲ救ヒ且ツ軍ル

後ノ作戦ヲ準備スル為メ 百一師団ノ過度ナル持重的態度ニ満足セス 其意ヲ師団參謀ニ含メテ攻撃開始ヲ促進セシメタリ 蓋シ軍ノ一般ノ戦況殊ニ第三師団苦戦ノ情勢ヨリセハ 百一師団ハ寧ろ上陸完了ヲ俟タス砲声ニ前進スヘキモノナレトモ 其特設師団ナルニ鑑ミ暫ク時日ヲ与ヘテ師団ノ集結并ニ尔後ノ作戦行動ヲ準備セシメタルモノナルニ 師団力此甘言ニ乘リ余リニ呑氣ニ構ヘ自己ノ都合ノミ思ヒ 第三師団ニ対スル思遣リノ足ラサルハ遺憾ナルヲ以テ此ク激励シタル次第也

◇九月二十七日

天候漸次恢復ノ徵アルモ尚終日陰鬱ナリ

一、第十一師団ノ情況

重藤支隊方面大ナル変化ナク漸次呉家宅、張家堰、西部王家宅ノ線ニ進出セシ

師団主力ハ右翼方面ニ於テ 羅店―嘉定道南側金家宅ヨリ周家橋 觀音兜ヨリ李家宅ノ線ニ進出シ 左翼隊モ之ニ連繫シテ金家宅ヨリ其東南方陶家宅、沈家橋更ニ其南方田宅、西錢宅ノ

△田上千代子・歩兵第三十四聯隊 長夫人の死

「西部南京城内警備隊」となつた静岡聯隊の兵たちは、昭和十三年四月二十九日(金)南京城内の師団司令部北側広場より、天長の佳節を祝い、宮城の空を遙拝した。 岳南健児が捧げ銃する剣尖は、折からの朝日に輝き、君が代のラッパの音に将兵は、軍旗のもとでの奮闘を誓ひあつたのである。

先輩が守りし軍旗捧げ征き 我等が時代も守りまつりき

山田 洋大尉作
この日、補充隊長近藤米中佐から聯隊本部にあて一通の電報が舞い込んだ。

「田上聯隊長夫人千代子殿、本日急死せらる。まことに哀悼のいたみにたえず。謹みてお悔やみ申し上ぐ」

受け取った聯隊副官松枝少佐をはじめ本部は憂色に包まれた。

聯隊がまだ、上海郊外劉家行付近で激しい戦いを続けていたころ、千葉から静岡市に引越して来た夫人は、英和女学校の東側、静岡市西草深の七十三番地(村上博一氏宅)に住み、来る日も来る

線二進出セリ

二、第三師団ノ情况

師団右翼隊68ハ攻撃ヲ続行 張宅、陳家巷ヨリ其東南唐家浜ノ線二進出シ 左翼隊方面亦十二房、無電台文衛堂、西部張家宅、王九房西南無名部落ノ線二前進シ 劉家行、顧家宅ハ最早一撃ノ情况トナレリ 思(フ)ニ師団ハ昨日來補充員ノ到着ト明日片山支隊ノ復歸トニ依リ戰勢著ク活発ヲ加フルナラン

三、第一師団ノ情况

當師団ハ從來ノ計畫ヲ進メテ明二十八日ヲ期シ攻撃開始ノ予定ヲ以テ著々前進シ 其第一線部隊ハ昨夜第三師団ト交代シ攻撃準備中ナリ

四、第九師団ノ情况

第九師団ノ先登部隊ハ本日午後ヨリ上陸ヲ開始ス

吉住師団長ハ午前十時予ヲ來訪ス 由テ軍將來ノ企画及師団任務ノ大要ヲ示シ尚衛生及住民地ニ関スル注意ヲ与ヘ 且ツ道路不良ノ為メ自ラ前進路ヲ開拓スルノ覚悟ヲ以テ 第三師団ノ右翼後ニ漸次其兵力ヲ集結スヘキヲ命ス

師団長ノ態度意氣等頼ムニ足ルモノアルヲ感ス

此數日來軍直屬部隊タル工兵、高射砲、機関銃、迫撃砲隊、瓦斯中隊等統々上陸ス

此朝驅逐艦島風艦長伏見博義王殿下 黃浦江内ニテ偶マ浦東地区ヨリスル敵迫撃砲ノ為メ微傷セラルルヲ聞キ恐懼ノ至ニ耐ヘス 即時電報ヲ以テ殿下及伏見大宮殿下ニ對シ御見舞電ヲ發ス 蓋シ黃浦江内ニ於ケル我海軍ノ行動ハ固トヨリ不少危險ナルモ 過去ニ於テ差シタル損傷ヲ受ケタルコトナキヲ以テ 島風モ始メテ江内ニ進入シ來リ(内地、吳淞間ノ護衛輸送ニ任ス)タルモノニテ嘗テ前例ナク 艦橋上ニ砲彈ヲ受ケタルハ偶然ナレト幸ニ天佑ニヨリ御負傷ノ輕微ナリシハ幸ナリシカ 御附武官ハ腕ニ可ナリノ重傷ヲ負ヒタル由 之ニ因シ一般將兵ニ及ホス精神的刺激ハ不少 一般ノ志氣此ニ興奮スルモノト思ハルルモ 予カ浦東清掃ヲ猶予セ

シ責任モ淺カラス 只管恐懼ノ至リナリ

尚第三艦隊長官ニモ電報シ慰問ノ意ヲ表ス

◇九月二十八日

天氣漸ク晴レ白日ヲ見ル 欣懷之ニ過クルナシ

一、第十一師団ノ情况

一般ニ変化ナシ

重藤支隊參謀來リ支隊ハ志氣頗ル旺盛ニシテ 今後如何ナル重任ニモ膺ルヘク速ニ軍ノ直轄トシテ活動シ度旨申來ル 真情掬スヘク予自ラモ其時機ノ到ランコトヲ冀フ

二、第三師団ノ情况

右翼隊方面戰況稍進ミ劉家行ノ北端ヲ占領セルノ報アリ

其他戰線概シテ変化ナシ

三、第一師団ノ情况

師団ハ今朝來初陣ニテ当面ノ敵ヲ擊破シテ楊家宅、楊樹願ノ線ヲ占領シ 敵ハ死体約三百ヲ

殘シテ敗退スト云フ 初陣成績可良ナルヲ欣フ

尚最左翼方面ニ於テモ小宅ヲ占領セシモ敵兵尚金家宅ヲ固守ス

四、第九師団及軍直屬部隊ハ予定ノ如ク統々上陸中ナリ

此日迄ニ知り得タル軍ノ死傷病者ノ數 大概如左

IXD	III D	將校	下士兵	將校	下士兵	病者
		死	傷	(現在)		
九〇	二一九六	二三〇	六四〇七	五五〇	七四八	

日も何十何百柱となく無言の凱旋をする英靈を、静岡駅頭に出迎えなければならなかった。

右を向いても左を向いても、知り人一人いないこの静岡で、夫人は孤独のさびしさにもめげず、つとめられた。それにもかかわらず「聯隊長夫人の出迎えなんかご免こうむる。うちのせがれは田上のために殺されたんだ」との声すら耳に響いた。

しかしいくら誹謗されても、責任ある立場上つらさ、悲しさを押しこらえ、病弱なその身をむち打って日々の送迎を怠らなかつた。夫人にとって静岡での日々は、まさに地獄の責め苦に等しかつた。しかし、命的に部下とともに戦場で悪戦苦闘を続けている夫を思うとき、これくらいのことには耐え忍ばなければ、自分の自分には言い聞かせ、齒をくいしばって我慢した。聯隊長の妻であるという責任感だけが、この苦痛を耐え忍ばせたに違いない。やがて、夫人は病の床に臥す身となつた。

四月二十八日、夫人は珍しく起き上がった。夫の写真に赤飯を供え「武運の長久をお祈り申し上げ

ます」と心からの黙禱を捧げた。

しかし、夜半、病にわかにかまひこの世を去つたのである。

松枝副官から夫人死去の報を受け取つた聯隊長は、その日午後、自室に閉じこもつたままであつた。この悲しい報らせを耳にした垣内、福留、田中少佐の各大隊長は、武人の妻の心境と田上八郎聯隊長の苦しい心の中を思い、涙がほおを伝わるのを払おうとしなかつた。

何も知らない聯隊の將兵は、三州山系討伐の慰勞の宴を張り、にぎやかに笑い興じていた。

『歩兵第三十四聯隊史』より

九月二十七日 參謀本部第一部長交代(石原莞爾少將↓下村定少將)。

軍直屬 死傷 六九九 七三二

計 二二八六 六六三七 二八二五

相当多数二巨リ今更吃驚セリ 即傷病総計既二一万ヲ超過セリ 内傷病者ノ治癒原隊復帰見込數約四千ハアルヘク 既着補充員約五千ヲ合算セハ約九千ニシテ現在真ノ損亡ハ約一千二過キス 以テ今後ノ決戦ニ応スル兵力戦力ニ就テハ余リ憂慮スヘキ程度ニアラスト樂觀ス

東京同盟通信取締役上田氏來訪 佐藤安之助ノ書状伝言ヲ齎シ來ル 曰ク 軍司令官ノ任務ハ専ラ作戰ニ在リ 政治工作ハ其任ニアラサルヲ以テ佐藤少將ヲ陸軍省力囑託ニ任命スルコトヲ欲セス 軍司令官ノ權限ニ於テ使用スルニハ異存ナキモ 夫レニテハ佐藤ノ立場モ變ニ付今去就ヲ決セストノコト

ニテ陸軍當局ノ頑瞑笑フヘキモ 蓋シ予カ余リニ政治工作ニ深入スルヲ欲セサル心持ノ自然ニ顯ルルモノト思ハル 軍ハ作戰ト共ニ謀略ヲ重要トスルハ目下ハ兎ニ角將來殊ニ然リトシ 其責任權限ハ全然予ニ在ルハ申ス迄モナキコトナレト 今ハ暫ク差控ヘ上海占領後ノ意見具申ニ伴ヒ 當局ノ不明ヲ詰ルコトニ決心ス

尚萱野長知ハ既二數日前上海着 諸般ノ準備中トノコト此方ハ故障ナカリシト見ユ

◇九月二十九日

天氣佳良 各所道路修築モ進捗スルコトト欣フ

一、第十一師團ノ情況

變化ナシ

二、第三師團ノ情況

變化ナシ

片山旅團ノ來着ト第百一師團ノ進出ニ依リ 逐次兵力ヲ右翼方面ニ集結シテ後ノ攻撃ヲ準備ス

三、第百一師團ノ情況

全線多少ノ進出ヲ見 須宅ノ一部ヲ占領セルモ敵兵頑トシテ陣地ヲ固守シ 且ツ願家宅南方ヨリスル機関銃及迫撃砲ノ射撃ニ依リ攻撃思フ様ニ進捗セス 胡家宅ニハ三回突撃ヲ繰返セシモ遂ニ之ヲ奪取スルニ至ラス

四、野重第五旅團長内山少將本日到着ス 旅團ハ本日午後ヨリ上陸ヲ始メ十月一日迄ニ完了ノ予定ナリ 此間陣地進入ニ関スル諸研究ニ当ルヘク命ス

其他各方面共變化ナシ

尚第十一師團方面ハ補給及患者ノ輸送ニ水路ヲ利用スヘク予テ偵察セシメアリシカ 本日ヨリ漸ク小発動艇約二十隻ヲ石洞江ヨリ願涇ヲ經テ羅店鎮ニ通セシムルコトトナル 尚地方民船ハ現在スルモノ少ク日本ヨリ持チ來レル小舟ヲ利用スヘク研究中ナリ

明日上海ニ於テ忠死者ノ法会ヲ當ミ四百余柱ノ御靈ヲ日本ニ送ルコトトナレルニ付 上村參謀副長ヲ特派シ予ニ代リ焼香セシムルト共ニ 兩師團留守部ニ宛色紙ニ敬弔忠靈ト署シ之ト共ニ還送セシム 尚別ニ短冊二左ノ歌ヲ書シ送ル

くいの為の今日の船出をはかなみつ
心にかくる故郷の空

◇九月三十日

此日再ヒ曇リ小雨亦來レルモ差シタルコトナシ 天候概シテ良好ニ向ヒツツアリ 一、第十一師團ノ情況

重藤支隊ハ羅店―嘉定道北側地区ニ於テ漸次進出シテ 周宅―居宅―張家堰ヨリ其南方無名部落ノ線ニ達ス

佐藤安之助ニ退役陸軍少將。期
スイス公使館附武官、臨時軍事調
査委員長を歴任。

萱野長知 一八七三―一九四七
高知の人。少年時代上海に渡り
中国革命を支持、のち中国革命
党顧問。孫文の臨終に呼ばれた
唯一の日本人。満洲事变後、犬
養首相の密使として和平交渉。
一九四五、貴族院議員となる。
〔現代人名情報事典〕平凡社)

「上村利道參謀副長日記」

九月二十九日 曇時々晴夜雨アリ

〔内山SA旅團上陸開始9D第一線
ニ進出全軍ノ死傷病一万二達ス〕
安達大佐本日午後負傷セリト顔
面及股ノ由ニテ生命ニ別案ナキハ
幸ナリ

死傷病全軍合シテ凡ソ一万二近
クナレリ随分高価ナル犠牲ナリ
○勇ましく戦いおりし友達も
今日傷けりとはは伝へつ

○一万の犠牲貴しとあまりにも
頑強なる敵恨めしく思ふ

九月三十日 曇後微雨

〔13D長上陸開始 近藤第一部長
來部

西本願寺慰靈祭〕

近藤少將(軍令部第一部長) 按
摺ニ來部、荻洲中將(13D長) 本
日上陸挨拶ノ為メ來部、西本願寺
ニ於ケル陣没將兵ノ告別式ニ司令
官代理トシテ列席、軍司令「敬弔
英靈」ノ色紙ト「我友の今日の舟
出をはかなみつ 心にかくる故郷
の空」ノ丹冊トヲ兩師團ノ英靈ニ
捧ク因ニ遺骨四〇〇体本日告別式
後舟出スルモノト思ヒ居リシニ出

第十一師団主力方面変化ナシ 蓋シ此方面ハ連日ノ攻撃ニ依リ稍攻撃頓挫ノ状ニアリ 特ニ12iノ如キハ傷病二千余ニ達シ現在員九百三十名ニ過キス 下士官、上等兵ノ中隊指揮ヲ取りアルモノ九中隊ニ及ヒアリ 勿論其補充員約五百ハ既に到着シアルモ未タ原隊ニ入ラス

二、第三師団ノ情況
師団ノ最右翼68iハ張家角ノ一部ヲ占領 漸次西南ニ敵線ヲ圧迫シツツアルモ 左翼隊方面ハ変化ナシ

三、第九師団ノ情況
戰況進展セス 最左翼胡家庄ニ対シテハ有力ナル砲兵火ノ上ニ突撃ヲ敢行セシモ効ナシ

四、第九師団ノ情況
師団ハ概ネ其兵力ヲ第三、十一ノ中間地区ニ集結シ 其右翼方面ニ於テハ18iハ昨夜第十一師団ノ部隊ト交代シテ朱家毛―尹家毛ノ線ニ進出シ 郭巷橋、李家毛ノ敵ニ対シ攻撃準備中 右翼部隊ハ尚林家宅附近ニ集結シアリ

本師団ノ連絡線ノ道路ハ先日米歩工ノ協同作業ニ因リ大ニ進展シ 概ネ輕自動車ヲ通スル一路ヲ戰線ノ後方迄延長シ得タリ

五、第十三師団長荻洲中將來着ス 由テ當師団ハ一部ヲ以テ月浦鎮南側ニ主力ヲ以テ楊橋浦北方地区ニ集結ヲ命シ 將來第九、十一師団ノ中間地区ヨリノ攻撃前進ヲ準備スヘキヲ命シ 又衛生其他戰術上ニ関スル注意ヲ与フ 本師団ハ明朝ヨリ上陸ヲ開始スル予定ナリ

◇十月一日

朝来久振ノ好天氣晴朗 無雲快此上ナシ

一、第十一師団方面

大体変化ナシ

二、第九師団方面

右翼隊18iハ呉家橋、朱毛ノ線ニ進出ス

三、第三師団方面

劉家行ヲ確實ニ占領シ 尚68iハ北方ヨリ西南方ニ向ヒ進出シツツアリ

四、第九師団方面

大体変化ナシ攻撃準備中

五、第十三師団

逐次上陸ヲ完了シ兵力ヲ集結中

尔余軍直屬部隊亦然リ

川越大使ノ使者酒ヲ持チ見舞ニ來ル 清水通訳モ同道シ來レルニ付 在上海外國新聞記者操縦ニ付一段ノ配慮ヲ希望スル旨申遣ス 蓋シ強ク聯盟ノ非法決議ニ関シ其必要ヲ痛感セシニ由ル

聞ク所ニ依レハ在上海大使館側ニテハ 未タ何等外國通信員買取等ノ手段ヲ講シアラスト云 誠ニ吃驚ノ至 陸海武官ノ努力モ足ラサル事ヲ 至急何トカ方法ヲ講セサルハ今後ノ宣戰ニ非常ニ不利ヲ招クヘク憂慮ノ至ナリ

尚外交官憲力兎角モ外國ニ対シ唯氣兼遠慮ノミナシ居リテ 毫モ積極的努力ノ足ラサルハ今更乍ラ遺憾ノ極ナリ

◇十月二日

天候漸ク固マル如キモ時ニ妖雲尚西ヨリ去ラス

一、第十一師団方面

概シテ変化ナシ

二、第九師団方面

師団ハ前面敵ノ微弱ナル抵抗ヲ排除シツツ白沼、胡家毛、張家毛ノ線ニ進出スルモ 輜重部

癸ハ五日ノ由、第一線大体変化ナシ 第九師団終日砲撃シテ一拠点ヲ抜ク能ハス前途思ヒヤルヘシ 六年振りニ上海ノ市内ニ入り思出多シ上紡ノ某氏ニ会ス

夜半風雨稍烈シクナル第一線ノ勞苦美ニ同情ニ堪エス我等ノ衣食勿体ナキ心地ス

聯盟ノ非難決議 九月二十八日、國際聯盟總會で日本の中国都市爆撃非難決議を全会一致で採択。

「上村利道參謀副長日記」
十月二日 晴曇

顧家毛7・30第三師団占領ス 上海―東京間定期航空連絡成ル 天かける空の使はひと飛びに 東の便りもたらしにけり 戦闘有利ニ進展ス 3D9D正面ノ敵ハ既ニ退却セシナリ。101D正面モ亦大体「クリーク」ノ線迄進出ス。羅店―劉河道開放セラレ作戦ノ一進展ナリ

隊ノ追及未夕達セサル為メ尔後ノ前進ヲ中止シアル如シ 由テ軍ハ更ニ其前進目標ヲ陳家行ヨリ呉淞クリークニ沿フ陸家橋ノ線ニ与ヘ 主トシテ右翼方面ニ重点ヲ保持シテ速ニ軍ノ右翼ヲ結成センコトヲ期ス

三、第三師団方面

師団ハ右側ヨリスル攻撃ニ依リ著ク攻撃進捗シ 夕刻迄ニ呉淞クリークニ迫リ陸家宅、王家宅、姜家宅、白楊宅ヨリ其東方張家宅ノ線ニ進出シ 更ニ浜岸ノ敵ニ対シ攻撃ヲ準備シアリ 浜ノ左岸ニハ最早大兵アラサル如シ

四、第一百師団方面

当面ノ攻撃モ此日進捗シテ其右翼ハ中興宅ヲ占領シ崇明塘ニ近ク進出シ 左翼方面ニ於テハ江家宅、胡家庄ヲ占領セルモ尚朱宅附近ニハ敵兵固守ス

五、第十三師団

漸次揚陸後ノ前進ヲ準備中

軍ハ臼砲大隊 朱家宅、楊木橋附近ニ進出セシメ 第三、第一百師団ノ攻撃ニ協力セシム 軍ニ増加セラレタル気球隊其他ノ部隊続々来着ス 九月末日調ニ依ル軍諸隊ノ死傷左ノ如シ

	死	傷	計
III	一〇八〇	三五八九	四六六九
XI	一五六九	三九八〇	五五四九
101	五三	三四七	四〇〇
IX	六	五〇	五六
重藤支隊	一一八	三四五	四六三
谷川支隊	一	一七	一八
計	二八二七	八二二六	一一、一五三

*死傷表は合計が不一致であるが原文のまま掲載した。

即死傷総計既二一万一千百五三二及ヒ 外ニ病者現在約二千ト概算セハ其損傷恐ルヘキ数ニ達シアリ 既往補充員ノ既到ノモノ約五千病傷者ノ治癒原隊帰還者約二千ト概算スルモ 尚損耗数少クモ五千ニ達シアリ 速ニ戦力ヲ補充スルコト今後ノ作戦上緊急ナルヲ以テ 之レカ請求方ニ付当事者ヲ激励シ置ケリ

尚本日迄知り得タル情報ニ依レハ 目下支那軍ノ南北配置大要如左

北方戦線 黄河以北 師団数 三九(二九?)
全以南 九

山東 五
山西方面 一三

南方戦線 第一線 五六
第二線(直後) 一九
後方地区 一八

外ニ総予備 計 五五
五三
(太倉、崑山、蘇州、嘉興ノ線)

◇十月三日

天氣大体良キモ時々曇ル蓋シ南風尚続キ蒸暑キ天氣ナリ 自然將兵尚夏衣ヲ着用スルニハ寧口好都合ナリ

一、第十一師団方面

大体変化ナク 和知聯隊ハ此夜敵ノ夜襲ヲ撃退シ之ヲ追撃シテ 羅店―嘉定道南側施相公廟

『上村利道參謀副長日記』
十月三日 曇時雨アリ

敵退却ノ兆アリ、揚行鎮ノ3D司令部視察 夕刻飛行機ノ綜合報告ニヨレハ大場鎮付近ヨリ南翔方向及蘇州河南岸方面ニ移動スル部隊相当アリ 又南翔西方地区ニモ部隊ノ移動スルモノアル等敵後方地帯ニ於テハ第一線ヨリ反対方向ニ移ル部隊及砲車自動車多ク今迄ニナキ現象ナリ 9D3D正面亦敵ノ抵抗大ナラズ敵ハ或ハ退却ヲ開始セルニアラズヤトノ判断濃厚ニシテ軍司令官ノ頭ニモ相当此懸念深シ軍ハ敵ヲ逸セサルコトヲ懸念シ第一線部隊ニ注意スルトコロアリ 然レドモ101Dニ於テハ敵ノ第一線ハ依然敵存スルコトヲ知ル 101Dハ本夜瀋藻クリーク渡河ノ筈ニシテ其方面ニハ終夜砲声不断果シテ成功セルヤ?

ヲ占領セリ

二、第九師団方面

漸次敵ヲ圧迫シテ新宅、饒家宅、楊家楼、老宅ノ線ニ進出セルモ 尚新木橋及其東南方地区ニアル敵ノ為メ前進意ノ如クナラス

三、第三師団方面

師団ハ概ネ吳淞クリーク左岸 戴家巷、四圈児、唐橋ノ線ニ進出シ渡河ヲ準備中

四、第一百師団

状勢変化ナシ 此師団ノ攻撃稍鈍キ感アリ

五、第十三師団

依然上陸続行中

六、重砲兵旅団

漸次劉家行附近ニ前進シ 其一大隊ヲ以テ第九師団ノ攻撃ニ協力ス

各師団ノ補給路ハ独立工兵大隊ノ努力ニ依リ漸ク工ヲ進メ 第九師団以南ノ間ハ概ネ完成シ 且下第十三師団ノ為メ月浦鎮ヨリ其西方クリークニ沿フ輕車道ヲ修築中ナリ

此夕飛行機ノ偵察ニ依リ 敵軍ノ後方ニ於ケル兵力ノ移動漸ク多ク或ハ敵軍退却ニ就キタルヤノ疑アリ 各方面ニ通報シテ威力偵察ヲ行ハシメタルモ 大体ノ敵ノ第一線ハ依然抵抗ヲ持續シ尚退却ノ模様ナシ 但前日来ノ情勢ヨリ判断セハ敵ハ最早現在ノ線ニ於テ攻勢防禦ノ企圖ナク 漸次二後方兵力ヲ集結シテ第二陣地(太倉、安亭ノ線?)及蘇州クリーク南岸ノ守備ニ着手シタルラシク 全線多少動揺ノ微アルハ事実ナリ

◇十月四日

天氣又陰鬱 聞ク南方洋上低氣圧ノ掩留^{ママ}スルモノアリト 幸二雨ニ至ラサルモ尚多少ノ降雨ヲ見ン

一、第十一師団状況

変化ナシ

左翼第廿二聯隊ハ西南方ニ進出ス

二、第九師団ノ状況

右翼ハ新木橋ヲ占領シ右下リニ棧網灣、魔橋頭、徐家宅、田都ノ線ニ進出スルモ 広福、新陸宅附近ノ東面スル敵陣地相当強硬ニシテ 此師団ハ飽迄右翼方面ヨリ南方ニ向ヒ主攻撃ヲ行フコト有利ナルモ 軍力其前進目標ヲ陳家行以東ノ線ニ与ヘタル為メ自然師団ノ攻撃ニ不利アリト考ヘラル 予ハ最初ヨリ此師団ヲシテ寧口広福西南方合邱宅、三神宅、莊団浜ヨリ陳家行ニ巨ル線ニ西南面シテ攻撃セシムルヲ有利ナリト認メシカ 幕僚ノ言ヲ容レテ此ク命令セシハ寧口失策ナリシヤトモ考ヘラル

第十三師団ヲ狭正面ニ第三、第九ノ間ニ入ルル考

三、第三師団ノ状況

変化ナシ

四、第一百師団

崇明塘敵陣ハ漸ク午後ニ至リ之ヲ奪取セリ 捕虜三百アリシト云 尔余ハ專ラ渡河攻撃ノ準備中

此ニ於テ軍ハ速ニ蘆藻浜南方地区ニ進出シテ尔後ノ攻撃ヲ準備スルノ必要ヲ認メ 第九、第三、第一百師団ニ対シ蘆藻クリーク南方約一。五米ノ線ニ向ヒ速ニ進出スヘキヲ命スルト共ニ 第十三師団ヲ第九師団ノ後方ニ逐次近ク集結セシム

又別ニ第十一師団方面ヘ重藤支隊(後備二大隊、砲兵、工兵各一中隊、重砲一中隊、11Kヲ附ス)ヲシテ羅店鎮西方地区ヲ第十一師団ニ代リ守備セシメ 全第十一師団ヲ南下セシメテ近ク第九師団ノ西方ニ進出シテ南翔鎮ノ攻撃ヲ準備スルト共ニ 軍ノ右側ヲ掩護セシムルコトトセリ

「上村利道參謀副長日記」
十月四日 曇

(大場攻撃計画軍司令官ノ決裁受
ク 右企圖東京日々夕刊ニ曝露
セラル)

本朝第二課長自ラ飛行機ニテ偵
察ス 敵ハ大場―南翔―嘉定ノ線
ニ陣地ヲ構築シ依然退却ヲナサ
ス 蘇州河左岸嘉定大場西方地帯
ニモ陣地増強セラル 第十一師団
ノ左翼方面9D進出ス 聯隊長不
在ノ安達聯隊ノミ回ヲナシテ進出
シアラズ 101Dハ明夜コソ蘆藻浜
「クリーク」ノ渡河ヲ決行スルト
云フ報告アリ 本日夕刊入手ス
(飛行便)之ニ大場鎮ニ対スル旋
回攻撃ノ企圖ノ記事アリ 機密ノ
曝露ニ憤慨ス 本郷少佐其真相調
査ニ武官室ニ行ク 楠本大佐、原
田少將連絡ニ来ル

是レ重藤支隊ノ任務相当過重ノ感アリト雖 当面ノ敵状ニ鑑ミ可能ノ見込ミ充分ニシテ 重藤少将モ自ラ本日軍司令部ニ来リテ充分ノ自信ヲ以テ其任ニ該ルヘキヲ誓ヒタルヲ以テ 予ハ断然之ヲ決行セシ次第ナリ 蓋シ第十一師団ハ当初ヨリ嘉定攻撃ヲ其主任務トシタルモ 嘉定東方地区ニ於ケル數線ノ陣地ハ容易ニ之ヲ奪取スル能ハサルヘク 自然嘉定ノ攻撃ハ寧ロ東南方ヨリ之ヲ行フヲ有利ナリトシ 尚軍最初ノ大場、南翔附近ノ決戦ニ可成多クノ兵力ヲ使用スルノ必要アルヲ以テ 第十一師団ノ此転進ハ其前面ノ敵情并道路網ノ關係等ヨリ見テ相当ノ困難アリ 適時ニ能ク南翔附近ニ殺到シ得ルヤ否ハ疑問ナルモ 之ニヨリ少クモ軍ノ大場鎮攻撃間 其側方ヲ掩護スルコトヲ得ルモノト考ヘアリ

尚本日幕僚ヲ集メ今後軍ノ大場、南翔附近攻撃ニ関スル大体ノ方針ヲ決定セリ 其要軍ハ主力ヲ以テ大場鎮西方ニ於テ敵線ヲ突破シテ其東方地区ノ敵軍ヲ捕捉スルト共ニ 一挙ニ蘇州クリーク右岸ノ地区迄敵ヲ掃蕩シ上海南方及南市ノ敵ヲ捕捉スルニ努メ 更ニ同時ニ南翔ヲ統テ又南方及北方ヨリ嘉定ヲ包圍攻撃セントスルニ在リ

◇十月五日

天候昨日来又不良時々小雨アリ 聞ク南方低気圧徐々ニ北進スト 一両日ハ更ニ風雨アランカト憂フ

一、第十一師団方面

重藤支隊ハ嘉定道北側地区ニ於テ攻撃ヲ続行ス(緩徐ニ)

師団ノ中央方面12 iノ正面ニ尚敵兵入り込ミ在リ 此方面ノ交代ニハ尚時日ヲ要スヘシト思ハル

二、第九師団方面

師団ハ依然新陸宅、広福附近ノ線ニ在ル敵ノ為メ妨ケラレ 軍所命ノ方向ニ対スル進出容易ナラス

三、第三師団

四、第一百師団

共ニ渡河ヲ準備中

五、第十三師団

師団主力ヲ以テ劉家行東北地区ニ兵力ヲ集結中

昨夜久振ニ敵飛行機一機來襲 虹口埠頭ヲ爆撃シ我運送船ニ小損害ヲ与ヘタリ 中々敵モ相応ニヤルモノト思ハレ余リ油断ハ禁物ナリ

◇十月六日

低気圧近ク接近シ来リ陰鬱ナレトモ幸ニ雨ニ至ラス

一、第十一師団方面

重藤支隊方面変化ナシ

師団ノ右翼ハ北周宅、姚家宅西方部落ヨリ郭家宅ノ線ニ 中央ハ王家宅、厩家宅、金家店ノ線ニ 左翼ハ第九師団ノ右翼ニ近ク蘇家宅ヨリ其南方萬年橋、北梅宅、南梅宅ノ線ニ進出シ

右翼中央隊ハ重藤支隊トノ交代ヲ準備中

二、第九師団方面

一聯隊ヲ以テ新木橋附近ヨリ櫓網灣ノ線ヲ保持セシメ 主力ヲ以テ急下南進シ朱三房ヨリ陸家橋、張宅ノ線ニ進出セリ

依テ更ニ當師団ノ南方進出ヲ容易ナラシムル為 第十三師団ノ歩一聯、砲一大ヲ以テ此師団ノ最右翼隊ニ代リ守備セシメ 全力ヲ以テ速ニクリーク対岸ニ進出セシムヘク処置ス

三、第三師団

右翼隊ノ一部6 iハ西六房部落へ進出セシモ 尔他ハ未タクリークヲ渡ルヲ得ス

四、第一百師団方面

「上村利道參謀副長日記」

十月五日 公

末藤(知文25男)大佐新聞発表ノ責任ニ就テ陳謝ニ来ル

十月五日 米大統領ルーズベルト、シカゴで日独を侵略国家として非難する(いわゆる隔離演説)

「上村利道參謀副長日記」

十月六日 曇微雨

101 D 瀧澤浜「クリーク」ヲ渡河ス 末藤大佐重謹慎三日処分 本晩又夕敵機空襲アリ 昨夜ノハ虹口碼頭ニ落下人十數名、馬數頭ノ被害アリ 尚昨夜ノ江灣附近ヨリノ砲撃ニテ公大飛行場ノ陸軍機ニ、海軍機三ノ損害ヲ受ク 第一百師団ハ瀧澤浜「クリーク」ヲ渡河シテ南岸ニ進出セシモ天明來戰鬪進捗セズ3 Dハ在〇〇方面一師団「クリーク」ヲ渡リシノミ 第九師団方面稍進展ス 尚敵ガ8 iノ間劉家ノ羅店方面ニ大反攻ヲヤルノ風聞アリト云フ

当師団ハ今朝渡河ヲ決行シ 中央隊(二大)ヲ以テ払曉江家宅対岸ニ進出シ更ニ進シテ伝家橋、北部張沿宅ノ線ニ進出シ 左翼隊ハ楊家宅対岸ニ地歩ヲ占メ(二大)左側方面ヨリ敵ノ逆襲ヲ撃退シテ東部曹宅南端ヲ占領ス 左翼隊方面ノミハ未夕渡河セス

五、第十三師団方面

夕刻ヨリ其一部ヲ以テ第九師団ノ部隊ト交代セシム 但此方面ノ攻撃ハ今後第十一師団ノ転進ニ伴ヒ之ヲ実行セシムルコトトシ 過度ノ犠牲ヲ避ケシムル如ク処置セリ 之レ当師団ハ將來大場鎮突破後 一挙蘇州河右岸地区ニ進出セシムル予定ナルヲ以テ 可成其兵力ヲ貯存スルノ要アレハナリ

六、谷川支隊方面

左翼ヲ王家宅、朱港上ノ線ニ延伸セリ 依テ陸戦隊ニ交渉シ江灣南方屈家橋附近ノ陣地トノ間ニ 更ニ其戦線ヲ延長確實ニ連絡セシムル如ク区処ス

◇十月七日

低気圧漸ク來襲 朝來相当ノ風雨ナリ

一、第十一師団方面

重藤支隊方面変化ナシ

師団中央隊ハ周家宅、丁家宅、李家宅ノ線ニ進出ス

二、第九師団方面

変化ナシ 但新木橋、櫓網灣ニ在ル部隊ハ本日第十三師団ノ部隊ト交代シ漸次兵力ヲ南方ニ移シツツアリ

三、第三師団方面

師団右翼隊18iハ一部ヲ以テ八房宅ノ一角ヲ 主力ヲ以テ其東方河岸ノ前岸ヲ占領ス

四、第一百師団方面

變化ナシ 逐次兵力ヲクリーク前岸ニ進出セシメツツアリ

五、第十三師団方面

一部ヲ以テ第九師団ノ部隊ト交代シタル外変化ナシ

其他各方面大ナル變化ナシ 谷川支隊当面ノ敵ハ其兵力ヲ交代シタルラシク 昨今当支隊ニ向ヒ攻撃ヲ試ムルモ常ニ之ヲ撃退ス

此日午前十一時軍艦出雲ニ於テ 吳淞錨地ニ於テ第三艦隊司令長官長谷川中將及川越大使代理岡本総領事、日高參事官ト会見ス 川越大使ハ先日來病疾ヲ患ヒ未夕歩行充分ナラサルヲ以テ 右兩人ニ代理会見セシメタルモノナリ

即本会見ニ於テ予ハ左記事項ニ就キ先ツ長谷川長官ト談合シ 其同意ヲ得タル後大使代理ニモ同意ヲ求メ其快諾ヲ得タリ 即

一、今後陸海軍長官ノ内外ニ発スル声明等ハ勿論 我政府当局ニ発スル意見希望等モ重要ナルモノハ 兩軍ニ於テ予メ相互通報シ可成諒解済ノ上実行スルコトニ致度 其中央部ヨリ受ケタル訓令通報等モ可成相互通報スルコトトシタシ

尚大使ニ於テモ其陸海軍ニ關係アルモノハ同様ニ取計度

二、大使力今後政府ノ訓令又ハ個人ノ発言ニヨリ内外ニ交渉又ハ声明セラルルモノハ 事直接作戰ニ影響アルモノハ勿論 政策外交ニ関スルモノモ其主要ナルモノハ 陸海軍ニ通報スルト共ニ其同意ヲ得テ実行セラルルコトヲ希望ス

三、今回ノ決戦一段落ノ時機ニ於テ可成速ニ重ネテ今回同様ノ会見ヲ行ヒ 尔後ノ作戰、居留民ノ保護、地方治安ノ維持其他ノ政策等ノ諸問題等腹藏ナキ協議ヲ遂ケ度 特ニ今後ノ政策の処理、一般内外宣伝工作ニ就テハ可成三位一致協同実行スルコトニ致度 之ニ関シ予メ大使ト大使館付武官ハ良ク具体的研究ヲ遂ケ置カレンコトヲ望ム

右協議終リ一同昼食ヲ共ニシ三時艦ヲ辞シテ帰還セリ 尚此際今度ノ決戦ニ際スル鹵虜ノ収容ニ付 近海ノ孤島ニ之ヲ一時的収容スルコト可能ナリヤ海軍ニ於テ研究方依頼シ置ケリ

尚又將來南市ノ攻略ノコトアル場合ニハ 可成一般民衆ニ被害ナカラシメ延テ各国租界ニ及
ホス損害ナカラシムル様 何等カノ方法ヲ講スヘキモ 已ムヲ得サレハ遂ニ武力ニヨリ之ヲ強
行スヘキ場合アルヲ顧慮シ 予メ支那及各国側ニ諒解セシメ置カレンコトヲ希望シ置ケリ
本日会見ノ際 左ノ詩ヲ川越大使及長官ニ贈ル

江流天地外 山色有無中
殘壘是何程 東方王道存

◇十月八日

陰雨又來ル 終日細雨肅条道路泥濘ヲ極メ全線將兵ノ苦勞不及申 補給ノ困難モ亦一層ニテ
憂鬱ヲ禁セス

此日朝十一時幕僚ヲ伴ヒ楊行鎮ニ至リ 各師團長其他ノ部隊長ヲ集メ大場鎮附近攻撃ニ関ス
ル軍命令ヲ与ヘ 尚各師團長ニ若干ノ説明ト予ノ全般的意思ヲ示ス 又同時一般ニ對シ軍司令
官ノ訓示ヲ与ヘ之ヲ督勵ス

各師團長以下皆元氣旺盛ニシテ 相当緊張セル態度ヲ以テ予ノ訓示及指示ヲ諒セルハ欣懷ナ
リ 一同盃ヲ舉ケテ先ツ大元帥陛下ノ万歳、次テ軍將兵一同ノ武運ノ隆盛ヲ祝福シ 一同撮影
ノ後散會ス

各師團長ノ報ニ依レハ各戰線ハ此日何等ノ變化ナシ 蓋シ敵陣依然タルト打続ケル天候不良
ノ為メ軍隊ノ運動自然交綏ニ至レルモノノ如シ 但本日ノ命令ニ沿ヒ明後日頃ヨリハ斷乎各線
ノ活潑ナル行動ヲ見ルニ至ラント自負ス

回顧セハ吳淞上陸後正二一ヶ月ナリ 予ハ本月初メテ沿道第三師團ノ古戰場ヲ過キテ楊行鎮
ニ至レリ 所在敵ノ遺セル陣地ノ跡 附近村落交通機關等破壞ノ情況等尽ク胸ヲ打タサルモノ
ナシ 此間ニ於ケル將兵奮戰ノ状ヲ想起スルニ十分ナリ 又且下該道路上ニ來往スル輜重其他
ノ人馬ノ情況ハ誠ニ同情ニ禁セス 瘦馬ヲ鞭チテ泥中ヲ行ク特務兵ノ顔貌割合ニ元氣ニ滿テ

ハ意ヲ強フセルモ 雨泥ノ裡ニ於ケル將兵ノ勞苦ハ真ニ察スルニ余アリ 殊ニ微発馬カ皆非常
ニ瘦衰ノ感アルニ意ヲ惹ケリ 將來何等カノ法ヲ講セサルヘカラスト思ハル 尚沿道居留民ハ
殆ト其影ナク到処米田穰リテ收穫ヲ待テルノ状 是亦何等カノ法ヲ講セサルヘカラスト 即經理
部長ニ命シ之レカ善後策ノ講究ヲ命ス 即台灣、朝鮮ヨリ若干(約二三千人)ヲ招致シ 今後
入手スヘキ鹵虜及婦來スル農民ヲ指導シテ軍自ラ之レカ穀物ヲ收穫スルノ案ニテ 追テ價格ハ
徵用トシテ人民ニ支払フヘキ考案ナリ 是レ政略上ニモ相当有効ナリト思料セラル

昨今ノ述感

陰空連日日月昏

戰勢交綏氣自焦

忽起砲声又殷々

暮夜拂枕待捷報

◇十月九日

朝來小雨尚歇マス憂鬱益々切ナリ 東天ヲ拝シテ妖雲ノ一掃ヲ祈念ス

此朝各師團參謀長ヲ軍司令部ニ召致シ一場ノ訓示ヲ与ヘ 尚今後ノ作戰指導ニ関シ參謀長ヲ
シテ指示セシム

又余自ラ砲兵彈藥ニ依頼セス歩兵ハ自己ノ重輕火器殊ニ銃劍ヲ以テ敵陣ヲ奪取スルノ覺悟ヲ
要求スルト共ニ 從來我軍獨特ノ夜襲ハ近ク却テ敵軍ニ株ヲ奪ハレタル感アリ 殊ニ敵ハ我軍
一陣地ヲ奪取セハ必ス一応ハ逆襲スヘク蔣介石ヨリ敵命セラレアルニ鑑ミ 此逆襲ヲ利用シ一
拳ニ之ヲ追撃シテ所謂敵ノ督戰部隊ノ線ヲ奪取スルノ考慮必要ナリ 之レカ為メ我夜襲ニ任ス
ル部隊ハ少兵力ヲ以テセス 少クモ重疊セル兵力ヲ以テスルコト緊要ナリト考フル旨ヲ陳ヘ
更ニ軍ハ当面ノ敵ヲ嘉定以西ニ驅逐シ此ニ当面ノ戰局ニ一段ヲ画シ得ル迄ハ 仮令砲彈ノ欠乏
スルコトアルモ銃劍軍刀ヲ以テ之ノ目的ヲ達成スルニ非レハ 能ク皇軍ノ威武ヲ辱シメ(ム)
所以ニアラスト信シアル旨ヲ附言シ 一同ノ決意ヲ促シタリ

此日各師團ノ戰況大ナル變化ナキモ 第十一師團ハ予定ヲ早メテ十一日ニハ第九師團ノ右翼

臨參命第十七号
上海派遣軍司令官ハ陸上戰闘ニ
関シ第三艦隊司令官麾下ノ陸
戰隊ヲ指揮スヘシ
昭和十二年十月九日
奉勅伝宣

參謀總長 載仁親王
上海派遣軍司令官 松井石根殿

「飯沼守日記」十月九日
參謀長ニ訓示指示ノ後示スヘキ
事項

命令セラレタルコトハ全力ヲ尽
シテ遂行スヘシ 司令官ニ真ニ已
ムヘカラサルニ出テ或ハ達成ノ確
信ヲ有スルニアラサレバ命令セラ
レス 彈藥ノ準備ハ大場(鎮)突
破二十分ナリト信スルモ全般ノ関
係上アリ余ル彈藥ヲ準備スル能ハ
サルカ故ニ万々一總攻撃ヲ復行セ
サルヘカラサルカ如キニ至レハ忽
チ砲彈ノ不足ヲ來ス、換言セハ夫
レダケノ余裕ヲ有セス故ニ必勝ヲ
期シ得ル準備ト斷乎タル決意ヲ以
テ一回ニテ突破スルノ要アリ
歩戰協同不十分ナリ(敵ノ夜襲
ニ追跟スル夜襲)俘虜ヲ作ル如ク
ス 敵動搖ノ兆アルニ乘シ來ル者
ハ俘虜トスヘシ
彼等ハ日本軍ニ捕ハレハ殺サ

二進出シテ広福以北ノ敵陣ヲ突破シ 速ニ三神宅方向ニ挺進スルノ決意ナル旨ヲ報シ 又第三師団ハ午後迄ニ前面ノ敵ヲ駆逐シテ 東西趙家角ヨリ陳宅、呉家院南端ノ線ニ迄進出スルヲ得タリ

又第九師団ノ一部モ盛宅附近ノ線ニ進出スルモ 第一百師団正面ニ就テハ未タ新報ナシ 数日来ノ降雨ニテ交通路殆ト杜絶ノ状勢ニアルニ係ラス 各師団ノ奮闘ハ感激ノ至ニシテ能ク前日予ノ意志ヲ服膺シアルモノト認ム 尙軍砲兵部隊モ道路ナキ地区ニ於テ漸次進出シ展開シツツアリ

此日ヲ以テ軍ノ増加団体ノ各隊輜重共 殆ト全部揚陸ヲ終了シ兵站部隊ノ揚陸ヲ行ヒツツアリ

此午後邦人新聞記者十数名ヲ軍司令部ニ召致シ初回ノ会見ヲナシ尙左ノ要旨ノ談ヲナス 我政府ハ夙ニ不抜大方針ニ依テ支那ニ對セシヲ以テ 上海方面ニ陸兵ヲ派遣スルコトハ当初ヨリ予期セザリシ処 恰モ八月中旬海軍事件ニ統キ支那軍ノ暴戾甚シキヲ以テ 逆ニ海軍ノ危

ニ慮シ居留民ヲ保護スル為メ陸軍ヲ急派スルニ至リタル次第ニテ 予始メ大命拝受後蒼惶トシテ先ツ準備シ得タル部隊ヲ率ヒテ当地ニ急行シ 上海ノ急ヲ救ヒル後ニ於ケル軍作戦ノ基礎ヲ定ムルコトニ努力シタル次第ニテ 漸ク一ヶ月ノ日子ヲ費シ昨今概ネ軍兵力ヲ充実スルヲ得タリ

仍テ近日軍ハ上海附近ノ敵軍ニ向ヒ一挙決戦的攻撃ヲ実行スル筈ナリ 軍ノ作戦力内外各方面ニ関連スル問題固トヨリ多ク 予自ラ之ニ関スル意見ヲ發表スルコトモ必要ナルヘキモ 其大要ハ昨日声明及告示セシ如クニシテ此以上ハ今之ヲ語ルコトヲ欲セス 蓋シ予ハ目下其全身ノ熱血ヲ戦線ニ傾注シ他ヲ顧ルノ余裕ナシ 若シ夫レ祖國ニ関スルモノニ関シテモ今ハ何等ニ之ニ触ルノ時期ニ非スト思惟シアリ 只不斷國民ノ熱誠ナル激励ト後援ニ就キテ深く感謝スルコトヲ言フノ外 今後方ニ向ヒテハ何等語ラス 要ハ不言実行ノ心持チテ一意任務ニ邁進センコトヲ期シアリ

請フ近ク上海附近ニ於テ再ヒ語ルノ機会迄俟タレ度 云々

各新聞通信員一同能ク予ノ意ヲ諒シ 緊張セル態度ヲ以テ其通信員ノ任務ニ努力シ 軍ノ行動ヲ後援スヘキ決意ヲ述ヘテ退散セリ 又上海各新聞社及同盟、朝日、毎日ノ代表者ハ各新聞記者ヲ代表シ 予及軍將兵ニ對シ感謝ノ辞ヲ呈シ一同撮影ノ後帰還セリ

◇十月十日

朝来風雨強ク 此日軍司令部戦闘司令所ヲ楊家宅(楊行鎮西端)ニ推進スル筈ニテ 幕僚ノ大部ハ朝来既ニ出発セシカ道路泥濘ト破壊ノ為メ行進容易ナラス 夕方乘馬又ハ徒歩ニテ楊家宅ニ到着シ得タリ 此クテ予ハ出発ヲ延期シ道路ノ改修ヲ俟ツコトトセリ

一、第十一師団ノ戦況
師団ハ羅店鎮附近ノ守備ノ交代ヲ終ヘ 本日夕迄ニ第九師団ノ右翼ニ列シ王家宅以南楊涇東岸ノ地区ニ進出シ 明日ノ攻撃ヲ準備中

二、第九師団ノ戦況

師団ハ梅網灣以北ヲ第十三師団ノ部隊ニ譲リ 一部ヲ以テ老陸宅、孟家宅ノ敵ニ對セシメ主力ヲ以テ朱三房、頓悟ノ線ヨリ近ク陳家行ニ近接シ之ヲ攻撃中ニテ 尙約一旅団ハ既ニ其東南方ニ於テ盛宅東西ノ線ニ達セリ

第十三師団ノ部隊ニハ更ニ歩砲ノ若干ヲ増加シ 第十一師団ノ進出ニ伴ヒ南面シテ三家村、老陸、新陸宅附近ヲ攻撃スヘク区処ス

三、第三師団ノ戦況

師団ハ昨日来猛烈ニ攻撃ヲ敢行シ 此日田堵宅、柵石橋西方部落ヨリ曹宅ノ線ニ進出セルモ 陳宅、兪宅附近ハ未タ占領スルニ至ラス

四、第一百師団方面戦況

最右翼ニ於テ田灣、王宅ヲ占領セシ外 全線ノ戦況進展セス

ルト宣伝シアリ之ヲ是正スルコト 上海西正面ニハ租界外ト雖外國兵ノ警備シアリ建物アリ後日其配備ハ配布スヘキモ其方面ニ射撃ノ行カサル如ク予メ注意セシメラレタシ

『上村利道參謀副長日記』
十月九日

午後二時新聞記者連中来訪ス 初メテノ来訪ナリ

* 松本重治氏ノ著書『上海時代』で、九月十四日のこととされている松井大將との会見は恐らくこの日の記憶違いである(本人の回想によると、松本氏は日記をつける習慣がなかった)。

「予ハ其全身ノ熱血ヲ戦線ニ傾注シ他ヲ顧ルノ余裕ナシ」とする松井大將の談話の趣旨も、南京に行く気なしとする松本氏の記述とズレはあるものの、首肯し得る(巻頭の資料解説と「九月十四日」の註を参照されたい)。

同盟ノ代表者ハ上海支局長・松本重治

『上村日記』十月十日 風雨強 本朝十一時半頃、外國通信員ノ「アルベント」及某、軍司令官接見ス 兩人ハ好意ヲ有スル由ニテ特ニ選マレテ他ニ先シ面會ヲ許サレシナリ 木村(松治郎27期)中佐、宇都宮(直賢32期)少佐案内、岡崎君ノ通訳ナリ

* 宇都宮直賢氏回想
ガランとした広間。屋根は砲彈の破片で処々壊れており、折からの雨漏りを受けるために置かれた二、三箇の馬穴に雨の雫がひっきりなしにほとほと音を立てて落ちていた。

緑茶を啜りながら、大將は上海出兵のいきさつについて、在留邦人三万の生命財産の保護が陸戦隊の兵力だけでは到底その目的が達せられないので、止むを得ず陸軍の派遣を見た所以であることを訥々として話された。

大將は第一次上海事変の苦い経験もあり、戦局の拡大を極力避ける方針であること、又共同租界に戦禍を及ぼさない(よう)全力を

五、第十三師團

前述新木橋附近二進出ノ外 師團ノ主力ハ依然月浦鎮西南地域ニ集結中

吳淞鎮南方根拠地当面ノ敵ハ昨夜来退却セシヲ以テ 小田兵站司令官ノ指揮スル後備隊ハ独断之ヲ追撃シ 夕刻迄西庚橋(紀家橋東側)ヨリ趙家宅、王家宅、孫家宅、吳家宅橋ノ線二進出シ 谷川支隊ノ右翼モ之ニ協同シテ陸家橋二進出セリ

後備隊ハ其裝備ノ不完ニ係ラス大隊長以下豪放ニ常ニ行動シ 今日ノ此戦機ニ応スル動作ハ賞讃ニ値スルモノト認ム

本日正午軍司令部ニ於テ倫敦タイムス通信員フレザア 紐育タイムス通信員アベンドト会见シ 左ノ要旨ノ声明ヲ予個人ノ立場ニ於テ行フ

予ハ三十余年日支提携ノ事ニ尽力シ来リタルモノニテ 今ニ於テモ支那ヲ膺懲スルト云フヨリモ 如何ニシテ四億万民衆ヲ救済シ得ヘキ乎ト云フ考ニテ一杯ナリ 支那ハ今共產主義勢力ヨリ之ヲ救脱スルコト緊急ニシテ 是レ支那自身ノ為ノミナラス東亞ノ為メ真ニ喫急ノ事項ナリト確信ス

於此予ハ日本固有ノ国民精神ト東洋伝来ノ道德ノ根基ニ立チ 日本人得意ノ犠牲的行動ヲ發揮スヘキノ時ナリト信シアリ

東洋ノ諺ニ

自反而縮 雖千萬人吾往矣

之レコソ目下我等ノ信念ナリ 全世界ハ暫ク日本ノ為メ所ヲ静觀センコトヲ望ム

尚兩人ノ質問ニ答ヘテ

上海ノ地方ニ於ケル此種ノ事件ハ最早之ヲ繰返ササル様 此度コソ完全ナル善処スルコト緊要ナリト考フ 殊ニ上海ノ特殊性質ニ鑑ミ予ハ出発前ニ於テ 列國ノ協力ニヨリ之ヲ遂行センコトヲ期シアリシカ 其後ノ一般狀勢及現地ノ狀況ヲ見タル今日ニ於テハ 聊カ其從來ノ希望ヲ變更セサルヘカラサルノ感アリ 即列國力一九三二年ノ停戰協定ヲ支那ニ遵守セシムルノ義

務ヲ採ラサリシコト及其後ノ態度カ 凡テ予ヲ以テ列國ノ協力ノ上ニ自信ヲ失ハシメタルヲ遺憾トスト述ヘタリシニ フレザアハ敢テ之ヲ論難セス 右ハ欧州ノコトカ現地ノコトカト問ヘルニヨリ双方ナリト答ヘ 尚然ラハ如何ニシテ今後其協力ヲナシ得ヘキヤト問ヘルニヨリ 右ハ列國ハ日本ノ行動ヲ侵略的カ 救済的ナルカノ根本ノ觀察ヲ改ムルコト先決要件ナリト答ヘタルニ彼辞ナシ 又アベントハ右ハ米國ニ関シテモ同様ナリヤト問ヘルニ依リ 米本國殊ニ最近大統領ノ演説ノ如キハ予ノ頗ル不満足ニ考フル所ナルモ 上海地方ノ米國官民ノ態度ニ就テハ今特別ニ指摘スヘキ所感ヲ有セスト答フ

概シテ兩人共予ノ率直ノ談話ニ満足ノ意ヲ表シテ帰レリ

◇十月十一日

今朝尚雲アリシモ午後二至リ漸次恢復 予ノ戦闘司令所着ノ頃ヨリ五日振ニ旭光ヲ拝シ快極リナシ 三時途中泥濘ノ中ヲ人力ニテ車ヲ推進シツツ来往輻重、車輛、駄馬、自動車中混雜ノ中ヲ推シ開キツツ安着ス 流石ニ第一線ニ近ク銃砲声モ能ク聞エ周囲ニ輻重其他ノ集團セル様杯 初メテ戦闘ノ気分ヲ満喫スルヲ得タリ 各師團ノ戦況ハ連日米ノ降雨ニ禍セラレ格別ノ進展ヲ見サルモ 各師團共降雨ヲ冒シテ軍ノ十三日頃ニ於ケル攻撃開始ニ応セン為メ 銳意攻撃ヲ続行シツツアルハ事実ナリ

尚第一師團左翼隊ニ於テハ今晚昨夜来ニ巨ル曹宅ニ対スル夜襲成功セス 尚前面全体ニ於テ相当強大ナル反撃ヲ受ケ 能ク現地ヲ死守シアルモ遂ニ曹宅ヲ占領スルニ至ラス 此戦闘ニ於テ101聯「隊」長加納大佐以下聯隊本部ノ首要員并大隊長一名戦死二名ハ傷キ 更ニ103ノ大隊長ハ今尚行衛不明ニテ幹部ノ損傷頗ル多ク志氣モ稍減退セルヲ報ス 東京ノ後備聯隊トシテ或ハ已ムナキ事ナランモ今後ノ難戦ヲ予想シ憂慮ヲ禁セス

連日ノ霖雨ハ第一線ノ戦闘ノ進捗ヲ妨ケタルハ勿論ナルモ 更ニ補給ノ上ニ大ナル障碍ヲ与ヘタリ 軍、師團補給部隊ノ困難想像ニ耐ヘタリ 全身泥マミレノ特務兵力瘦馬ヲ鞭チテ泥中

して努力すると語られ二人の記者も、大将の任務が上海付近から中国軍を掃蕩するにあるということが合点が行ったようで見方は上首尾だった。

松本重治氏が会見に先だっていろいろ忌憚のない意見を述べた結果にもよるもののような。

デービッド・フレージャー11日露戦争の従軍記者として、初め黒木第一軍、のち乃木第三軍と行動を共にしたという老記者。親日家。

ニューヨーク・タイムズ極東総局長・ハレット・E・アーベント

*自ラ反ミテ縮カラバ 千万人ト雖モ吾往カン

『飯沼守日記』

十月十一日

101D左翼ニテ困難ナル渡河並其後ノ戦闘ヲ指揮シアリシ加納大佐(101R長)ハ今朝戦死セリ同聯隊ハ既ニ二大隊長戦死、一大隊長負傷後送、一大隊長ハ輕傷後昨夜(?)夜襲ニ出シタルモ其後ノ消息今ニ至ルモ不明、依テ師團司令部附中佐ヲ臨時聯隊長ニシタノコトナリシヲ以テD命令ニテ一時聯隊ノ指揮ヲ執ラシムルヲ適当トスヘシト答ヘ置ケリ

同十月十二日

加納大佐戦死約一時間前、師團參謀長宛報告要旨(十一日八・五〇) 頃突入セルモ同時両正面ヨリ多数ノ敵逆襲シ来リ不成功ニ終リ吉川103i大隊長以下歩兵中隊長ハ兩聯隊共ニMG長ヲ除キ全員未タ所在不明兵力ノ半数モ所在不明ノ有様ニテ当方二面スル曹宅部落縁端ニハ支那兵ノ行動スルヲ見ルヨリ察スルニ僅カノ兵力カ部落ノ奥深

ヲ馳驅スルノ状同情ヲ禁セス

予ハ当初ヨリ軍ノ補給ノ為メ水路ノ利用ヲ奨励シアリシカ 幕僚以下各部隊共此觀念薄ク水路ノ偵察、利用等ハ兎角閑却セラレアルニヨリ 数日前ヨリ特ニ之ヲ叱咤督励シ来リシカ 右翼方面、貴陽灣―羅店間ニハ 既二十数日前ヨリ發動艇ニ依ル補給、患者後送等ヲ実行シ得成續良好ナリシカ 中央方面ニ於テモ数日前ヨリ吳淞―月浦鎮間ニ水路輸送ヲ開始シ 又本日ヨリ楊行鎮間ノ水路ヲ開クヲ得タリ 蓋シ吳淞クリークノ利用ハ最初ヨリ予ノ最重要視セシ処ナリシカ 軍ノ攻撃方針ヲ徹底セシメシメ為メ一時此水路ヲ利用シ能ハサルハ遺憾ノ極ナリ 幸ニ昨日我兵站守備隊守備区域ノ進出ニヨリ 沈家宅北方ヨリ楊行鎮ニ通スル水路ヲ利用シ得ルニ至リ 現時ノ陸上運送ノ難ヲ補ヒ得ルヲ得タルハ幸ナリ 本日既二十余艘ノ發動艇小舟ニヨリ百噸位ノ材料糧菜ヲ前送シ得タリ

又參謀本部ハ数日來非公式ノ手段ヲ以テ 上海附近ノ戦局ヲ速ニ解決スル目的ヲ以テ約一師團ノ兵力ヲ浙江金山海岸ニ上陸セシムルノ企圖ヲ有シ 之レカ偵察ト意見ヲ求メ来リ居リシニ依リ 一昨日特ニ芳村參謀ヲシテ海軍及停泊場部員ト協同シテ該地方ノ海上ノ偵察ヲ実施セシメタリ 其結果ニ依レハ乍浦附近ニハ相当ノ敵防禦アリ 殊ニ此沿岸ノ性質ト目下冬向ノ期節ニ於テ大部隊ヲ此附近ニ上陸セシメ 長期ノ補給根拠地ヲ作為スルコトハ不可能ナリト認めタリ 依テ右報告ヲ行フト共二目前上海附近ノ戦局ヲ速決セシムルニハ 寧口新增兵力ヲ黃浦江岸及揚子江岸(一部)ニ上陸セシムルヲ有利トスル旨ノ意見ヲ附シ中央部ノ再考ヲ促シタリ 尚本増兵真ノ目的ハ直接上海戦鬪ニ関スルモノニヤ 更ニ戰略略的ニ浙江占領ノ目的オモ有スルモノナルヤ 其点明瞭ナラサルニ依リ之ニ関スル軍ノ意見ヲ開陳スルニ便ナラス 予ハ寧口今後此兵力ノ使用ハ上海決戦直後ノ状態ニ依リ其方面ヲ決定スルヲ便ナリトシ 要スレハ其兵團ヲ馬鞍群島ニ待機セシムルヲ可ナリト考ヘ 之レカ研究ヲ幕僚ニ命ジタリ

◇十月十二日

此夜遅クヨリ今朝二巨リ風雨アリシモ 今日ハ漸次天候恢復シ東北風トナレルヲ以テ今後ノ天候可良ナラン 即亦此風ノ間ハ天候可良ナルヘク神禱ヲ祈ル 然ラサレハ軍当面ノ攻撃ハ一大頓挫ヲ来ス虞多シ

各師團ノ戦況大体変化ナク 各師團共先日來ノ悪天候ニ禍サレテ凡テノ準備遅レタリシモ漸ク今日ヨリ夫々道路ノ修築ヲ始め攻撃陣地砲兵陣地ノ推進ニ戻ルコトヲ得タリ

但第三師團ノ右翼隊ハ能ク柵石橋、西塘橋南端クリークノ線ニ進出セリ

一般ノ戦情ハ依然第一線各部隊ハ頑強ナル抵抗ヲ繼續スルノ外 後方ニテハ相当兵力ノ移動行ハレアルモ寧口増加隊ノ来着ト見ラルル節多ク 蘇州、崑山ニ在ル敵軍總指揮官ハ上海、南翔附近ニ前進シ来レリトノ報モアリ 真否明カナラサレト敵軍カ一時不少動揺セリト見シハ寧口過早ナリシヤモ知レス 尚輕拳ナル攻撃ハ事実上ニモ不可能ナレト 軍全体トシテモ大ニ慎重ニ攻撃ヲ実行スルヲ可ナリト認ム 仍テ曩ニ總攻撃実施ヲ十三日ト予定セシカ天候ノ關係モアリ之ヲ十六日迄延期セリ

◇十月十三日

天氣漸ク定ルラシク東北風ノ順風ナリ 道路モ逐日乾キ交通容易トナル 前線ノ砲兵モ漸ク新陣地ニ進入シ得ルニ至ル

各師團ノ戦況尚変化ナシ 蓋シ連日ノ悪天候ニ禍サレテ昨今漸ク休息ノ氣持ナルラシク 此間鋭氣ヲ養ヒ更ニ軍隊ノ移動ヲ試シ攻撃準備ニ汲々タルモノノ如シ

去十日ヨリ十二日ニ亘リ 第八戰隊司令官ノ率ユル巡洋艦、驅逐艦七、八隻ニ運送船ノ揚陸ヲ了ヘタルモノ二十余隻ヲ率ヒ 更ニ大小發動艇四十余隻ヲ搭載シテ瀏家鎮、七了江岸ニ陽動ヲ行ヒ 薄暮ヨリ發動艇ヲ卸シテ上陸ニ偽セシ処 同地方ニ帯ノ江岸ヨリ熾盛ナル銃砲火起リ更ニ夜二入り数時間ニ亘リ陸上ニ於ケル銃砲聲絶エス 恐クハ我軍ノ上陸ヲ誤認セル敵軍ノ同志討ナラスヤト察セラル 要スルニ此陽動ハ前回ニ比シ大基模ニ且ツ實際的ナリシ為メ相当ノ

ク進入シタルカ或ハ突入後多數死傷シタルモノカト存セラレ搜索スルモ未タ明カナラス

3、左正面ハ逆襲ヲ受ケタルモ頑強ニ抵抗既ニ銃器ハ使用ニ堪ヘサルモ白兵ト手榴彈ヲ唯一ノ武器トシテ平然トシテ戦鬪、其頑強サハ部下ナカク驚嘆ニ値スルモノナリ(昨夜死傷ナシ)

4、兵中(一部ノ幹部ニモアリ)ニハ既ニ戦意ヲ失ヒ自ラ間違ヒタル振リヲナシ或ハ故意ニ「クリーク」北岸ニ後退セントスルモノアルハ只申訊ナク今ヤ三人ノ大隊長、中小隊長ノ大部ヲ喪ヒ権力ニ幹候出ノ伍長位カ中、小隊ヲ指揮スルコトトテ夜間戦鬪ノ如キハ掌握殆ント出来ス 兵ハ敵ノ射撃ヲ受ケ或ハ傷者テモ出来レハ良イコトトシテ介抱ヲ名トシテ暗夜後退スル者少カラス 涙ヲ吞ンテ口惜シク存セラレ候モ相当幹部中ニモ「コノ思想ナキニアラス 深憂ニ堪ヘス只小生ノ信賴シ得ルハ吾ノミニ候 右衷情ヲ披瀝シ泣言ヲ申スノテハナク御耳ニ入ル

十月十二日 參謀本部、主作戰を北支方面から上海方面へ転移を決

『飯沼守日記』十月十三日

101Dノ右翼中央(157i、149i)ハ本未明夜襲シタルモ不成功、本日午後四・〇〇―五・〇〇更ニ突撃セントシタルモ不成功トノコト、砲兵ノ位置遠シト注意シタルモ道路悪ク進出シ得スト称シ十分推進シアラス

11Dハ一部揚溼「クリーク」ヲ渡リ他ハ渡河準備中明日未明渡河シ攻撃スト 但此正面敵陣地ハ近く三線アリ(101D正面モ写真ニ依レハ網ノ目ノ如シ)

13Dハ緒戦ナレハ慎重ニトテ昨日ヨリ至近ノ距離ニ在リナカラ未タ突撃スルニ至ラス 軍司令官少シヤキモキシ何トカ工夫ト言ハルルモ目下ノ所力押シニ押スヨリ他途ナク結局根氣比ヘ意志ノ闘争ナリ

効果ヲ奏シタルモノト思ハル

◇十月十四日

天気良ク東北風ニテ秋晴ノ好天気 是レニテ天気モ続クコトト欣フ
各戦線ハ依然当面ノ敵ヲ力攻中ニテ 多クハ対壕作業ニテ敵陣地ニ接近シツツアリ 蓋シ軍
ノ本攻撃ニ於ケル弾薬ノ将来ヲ思ヒ努メテ初期ニ於ケル節約ヲ敵命シ 所謂五基数ヲ以テ全局
ヲ終ル計画ナルヲ以テ 各方面共砲兵ノ協力ニ遺憾アルコト攻撃遅滞ノ一主因ト思ハルモ 尚
砲兵ノ集團ノ運用ニ依リ逐次一陣地毎ニ之ヲ奪取スル等ノ方法ヲ採用スル余地モアリ研究ヲ命
シタリ

此日一宮海軍政務次官慰問ノ為メ来訪ス 由テ軍全般ノ体勢ヲ説明スルト共ニ江南地方敵軍
抵抗ノ執拗サニ鑑ミ 到底今後一二月ヲ以テ当方面ノ戦局カ一段落ヲ画スルコト難ク 少ク
モ常熟、蘇州、松江ノ線迄敵軍ヲ圧迫スルコト切要ニシテ 之レカ為メ速クモ本年一杯ヲ要ス
ヘキ見込ナルコトヲ告ケ 我朝野力深ク今後ノ事態ヲ達観シ飽迄長期ノ作戦ニ耐フルノ覚悟ヲ
固クスルノ要ヲ説キ 近衛首相、米内海相ニモ此旨伝達方希望シ置ケリ 又此日第八戦隊南雲
司令官以下幕僚艦長□□南沿岸ニ移動ニ付訣別ニ来ル 好將軍ナリ

◇十月十五日

天気少々下火ニナリツツモ尚西風ナレハ天気持続シ得ル見込
各師団ノ戦況依然進展セス如ク焦慮募ルニ依リ 幕僚ニ進ミテ今後ノ対策ヲ研究スルト共ニ
各師団ノ実況ヲ視察セシメアリシカ 一般ノ砲弾ノ不足ニ因シ志氣不少沈滞シ 師団長以下モ
今後ノ作戦ヲ考慮シテ兵力ヲ出シ惜スルノ情相当深キニ至レル感アリ 然レトモ一般ニ最早上
海附近敵陣地ノ最前線ニ達シアルモノノ如ク 従来ニ比シ敵軍ノ陣地ヲ一般ニ鞏固ニシテ其抵
抗モ靱強ヲ加ヘタルカ如ク 又数日来浙江、四川省ヨリ来レル兵力各二ヶ師団増加セラレタル

如ク 江湾鎮方面ヨリ若干ノ兵力殊ニ砲兵ヲ我主力方面ニ転用シ来レルヤノ疑アリ 要スルニ
敵ハ我中央突破作戦ヲ觀察シ之ニ応スル最後の手段ヲ講シアルモノノ如シ 軍ハ何トカ此際手
段ヲ講シテ速ニ此前線陣地ヲ突破スルニ非〔守〕レハ 尔後ノ攻撃ハ純然タル陣地戦ノ状態ニ陥
リ 唯々敵軍撃破ノ機ヲ遅ク〔ス〕ルノミナラス我軍ノ攻撃意志ニモ一大影響アルモノト痛心ス
其後調査ノ結果十四日迄ノ各師団ノ損傷如左

	死傷数	補充数
第三師団	六、〇二六	約六、五〇〇
十一	六、三八〇	五、〇〇〇
百〇一	二、八一	未着
九	二、八九四	全
十三	一五六	全
重藤支隊	九九八	全
谷川支隊	七〇	全
計	一九、八三五	一一、五〇〇

外ニ傷病兵ノ原隊復帰者計約四、〇〇〇アレハ 病者ノ入院又ハ後送ノモノモ約五六百アル
ヘク 差引現在兵力ノ定員ニ対スル損耗ハ約五千人ト算セラル 就中各師団共幹部ノ損耗比較
的多ク其補充員ハ現役師団ニモ在郷者ヲ充当セラルルヲ以テ 第三師団ノ如キ其兵員ハ殆ト定
員ヲ充実セルモ 一般ノ戦力ハ動員当時ノ約六分ノ一二過キサルヘシトノ觀察ニテ 此形勢ハ
今後一層増大スヘク相当考慮セララルル問題ナリ

尚馬ノ損耗総数ハ約一、九〇〇頭ニシテ 内先日来ノ泥濘道路ノ過勞ニヨリ斃死セルモノ四
五十頭ニ及フ 尚此内第十一師団ニテハ約五百頭ノ補充馬来着セリ
◇十月十六日(軍方面一軍増加ノ快報来ル)

【飯沼守日記】

十月十四日

陸軍省ヨリ補任関係ノ人六、七
名来ル(数日振りノ定期飛行機ニ
テ)其話ニ18 D 106 D 114 D 105 D ノ一
部ニテ当方面ニ作戦セシメ松井大
將ヲ方面軍司令官兼任トスル案研
究サレツツアリテ18 D ハ既ニ乗船
待機他ハ十一日動員下令セラレタ
リト

同十月十五日

上村副長10 D 司令部及10工藤旅
団へ連絡、西部李宗樞ニ対シ砲撃
後突撃(午後三・〇〇頃)シタル
モ兵統カス一旦退却セル敵兵再ヒ
陣地ニ就キ50メートルノ線ニ停止
セリ本夜奪取ヲ期ス10 i ハ今尚壕
内ニテ混乱シアリ何トモ為シ難シ
整理後一部ヲ残シ主力ヲ右ニ転用
スル企圖ヲ有ス 108 大隊長(吉川
少佐)夜襲ノ際モ大隊長及其機関
ハ難ナク敵陣ニ入り大隊長ハ煙草
ヲフカシ居タルモ兵統カス其中ニ
敵ヨリ逆襲サレ書記等カ無理ニ大
隊長ヲ後退サセタル途中見失ヒタ
リ從テ屍体ハ彼我ノ中間ニ在ルヘ
シト、今日ハ全線戦況發展セス
而モ特設隊ノ兵ハ指揮官ノ前進突
撃ニ從ハサルコト13 D モ同様トノ
話慨嘆ニ堪エス

天氣晴朗ナレトモ東北風強ク寒氣稍増ス 幸二第三、第十一師団共殆ト既ニ冬衣到達シタルハ此方ノ心配ハナシ 只自分ノ冬着類去月二十二日東京発ノ者未着ニ付困リ居レリ 上海ヨリ冬下着類ヲ買取り間ニ合セ居レリ

一、各師団ノ戦況

依然各正面共大ナル変化ナシ 第13 Dハ三家村、第九師団ハ陳家行ノ一角ヲ占領セルモ尔後戦況發展セス

第三師団ハ中央方面ニ於テ葛家神、梅宅ニ向ヒ攻撃進捗セルモ愈宅、朱宅方面依然タリ 殊ニ第二一師団ノ右翼方面毫モ進展セサルコト遺憾ナリ

即軍全般ノ攻撃ハ目下第九師団右側ノ新陸宅、陳家行附近ヲ奪取シテ当師団ノ南進ヲ促進スルヲ第一トシ 更ニ第三、第一一師団中間ノ禹橋宅東北地区ヲ占拠スルコトヲ先決要件トスルヲ以テ 軍ハ従来ノ砲彈節約ヲ緩和シ 軍砲兵ヲ以テ是等要地ヲ逐時ニ集團火力ニ依テ奪取スルヲ緊要トスルノ意見ニ落付キ 軍砲兵及昨日来着セル爆撃飛行中隊ヲシテ先ツ新陸宅、陸家行ノ爆撃、砲撃ニ協力セシメテ 第十三、第九師団ヲシテ之ヲ奪取セシムルコトトシ夫々指示命令ヲ与フ

尚右陣地奪取後ハ之等ノ地区ヲ第十一師団ヲシテ交代占領セシメ 第九、第十三ヲシテ一意南方ニ向ヒ攻撃セシムルノ必要ヲ痛感セルヲ以テ 此意ヲ予メ第十一師団長ニ伝ヘシメ 師団ノ楊涇クリークニ沿フ攻撃ヲ中止シ逐次兵力ヲ後方ニ集結スヘク準備セシム

又第一一師団ヲシテ其右翼方面ノ進出ヲ遂ゲシメン為ニハ 其右翼隊(十三中隊アリ)ノ兵力ノ大部ヲ右方ニ転用スルヲ必要ナリト認メ 第一一師団ニ連絡シ可成速ク右区署ヲ行フ様指示セシム

又軍最左翼方面即吳淞兵站守備地区 谷川支隊方面ハ敵兵一部撤退ニ伴ヒ多少其陣地ヲ推進シ得タリ 尚此方面ニテハ暴挙ニ陥ラサル範圍ニ於テ可成前面ノ敵ヲ牽制セシムル如ク指導ヲ与フ

此日參謀本部鈴木中佐来着 中央部ハ新二一ヶ軍(三師団)ヲ編成シ 十一月初ヨリ浙江方面ニ作戦セシムル計画アルコトヲ知ル 是レ最初ヨリ予ノ希望セル作戦方針ニ応スルモノニシテ欣懐ノ至リ 斯クテ中央部ノ腹モ漸次改マリ予モ此分ナラモウ割腹ノ機会ナキニ至ラン乎 呵々

◇十月十七日

天氣良ク秋晴ノ気分ナレト東北ノ風強シ 此日各師団ノ戦況矢張思フ様ニ進捗セス漸次膠着ノ感アルハ遺憾ノ至 何トシテモ犠牲ヲ顧ミス速ニ此前線ヲ突破セサルヘカラス

第十三師団ノ三家村、老陸宅攻撃ハ十五榴及飛行機ノ協力ノ下ニ実行シタルモ 僅ニ老陸宅ノ北部ノ一角ヲ占領シタルニ過キス

第九師団ノ陳家行攻撃ハ二四榴及爆撃飛行機ノ協力ノ下ニ 幸ニ午後四時頃陳家行西部クリクノ線ニ進出シタルモ 敵ノ逆襲ニ遭ヒ再ヒ其一部ヲ失ヒタルトノコトナレト 情況審カナラス

仍テ軍ハ此日新二第九、第十三、第十一ノ作戦地境ニ多少ノ変更ヲ加ヘ 第十一師団ヲシテ其歩兵三大 砲若干ヲ以テ現在ノ線ヲ守備シ 主力ヲ後方ニ集結シ近ク其左翼ニ到ル第十三、第九ノ右正面ヲ交代スルノ準備ニアルヘキヲ命シタルモ 当師団ノ左翼隊(44 i)ハ目下新宅附近ニ於テ吳家宅附近ニ向ヒ攻撃中ナルヲ以テ 先ツ師団ノ力ヲ此ニ注キ其陣地ヲ奪取シタル後 前記軍命令ヲ実行シ度旨申来リタルヲ以テ之ヲ是認セリ

◇十月十八日

秋晴ノ快天氣ナリ風モ和キ日中ハ殊ニ清瀟ノ氣充分ナリ 午後屋上展望台ニ登リテ眼鏡ヲ以テ大場鎮方面ニ対スル戦線ヲ視察ス

各戦線大ナル変化ナキモ多少宛各師団共進展シツツアリ 軍ハ24榴ヲ以テ第十三、第九ノ戦

「上村利道參謀副長日記」
十月十六日 快晴北東ノ風強シ

戦況依然何等ノ進展ヲ見ズ 13 D 11 D 重藤支隊ニハ長中佐連絡ニ行ク 荻洲師団長軍ノ攻撃指導ニ批難ヲ加ヘ長中佐傾聴シテ帰ル 師弟ノ特殊ノ關係アリシ都合ナラシモノ不都合ナリ N大佐作戦ニ干渉セラルルコトヲ極度ニ忌避シ朝ノ会報時ノ各意見ニ就テサハ快カラス 第一線參謀亦之ニ合流シ此重大時機ニ寒心スベキ状態ニ在リ

「飯沼守日記」十月十七日

芳村參謀參本ノ鈴木中佐海軍側等ト杭州灣上陸ニ就キ研究、參本ハ強行ノ考ニテ進ミアリ海軍三艦隊ハ反対、予モ万全ノ準備ト慎重ナル案ヲ以テ実行セサレハ意外ノ失敗ヲ招ク慮アリト思惟ス

闘ニ協力セシメ相当ノ成果ヲ収メタリ

就中第三師団中央方面ハ湖里宅、黄港ノ線ニ進出シ左翼隊モ遂ニ龔宅ヲ占領セリ 第一百一師団方面最モ活氣ヲ失ヒアルヲ以テ 此日參謀長ヲ召致シテ是ヲ激励シ速ニ兵力ノ集結、転用ヲ実行シテ 攻撃準備ヲ整フヘキコト嚴命ス

此日龔ニ杭州湾上陸地偵察ノ為メ派遣セラレタル 參謀本部ノ鈴木中佐ト共ニ現地偵察ヲ行ヒタル田尻少將帰來 偵察ノ結果ニ基ク意見ヲ開陳スル所ニ依レハ 金山湾附近ニ行フ大部隊ノ上陸ハ天候ニ因リ著キ影響ヲ受クヘク 好天候ヲ利用セハ部隊ノ上陸ニ支障ナキモ尔後ノ補給ハ非常ニ困難ヲ予期シ 格別ノ計画ト施設ヲ行フヲ要スルトノコトナリ 有田八郎氏ニ書信ヲ認メ佐藤ニ伝言ヲ依頼ス

◇十月十九日

天氣晴朗ニ而カモ温暖トナリ日中熱イ位ノ好天氣ナリ 割合ニ戰況進展セサルヲ憾ムノミ一、重藤支隊ノ情況

大体変化ナク当面ノ敵ヲ牽制スル為メ時々各正面ニ陽攻ヲ行ヒツツアリ

二、第十一師団

22 i ヲ以テ右翼集成騎兵ト交代ス

左翼隊ハ新宅附近ニ進出セリ

明二十日師団ハ從來ノ戰線ノ全部ヲ22 i ニ担任セシメ 主力ヲ羅店鎮東南地区ニ集結スル筈

三、第十三師団

新二歩兵第二十六旅団(58 i (III欠) I/116 i) III/19 BA ヲ以テ 新木橋附近ノ敵ノ攻撃ヲ開始ス

歩兵第三百三旅団全部(104 i 65 i) 19 BA (III欠) 13 P ヲ以テ 三家村及老陸宅ノ一部ヲ占領シ更ニ攻撃中

四、第九師団

右翼隊ハ陳家行ヲ完全ニ占領シ 左翼隊ハ北桃園浜及其西側無名部落ヲ占領シ 更ニ孟宅、南桃園浜ニ向ヒ攻撃中

五、第三師団

右翼隊ハ本夕 張家楼下宅ニ突入シ同部落ヲ掃蕩中
左翼隊ハ午後黄宅ヲ占領ス

六、伊東第一百一師団

本日全線各当面ノ陣地ヲ攻撃シ 軍砲兵(24 R) モ之ニ協力セシモ遂ニ進展ヲ見ス 明日更ニ左翼隊ヨリ抽出セル部隊(I/101) ヲ以テ中央、右翼方面ヲ攻撃スル筈
敵ハ漸次左翼方面及後方ヨリ其兵力ヲ大場鎮及其前線ニ増加セル模様ニテ 広西第八十七師団モ陳家行前面ニ顕出シ 重藤支隊正面ニアリシ第四三師モ南下セル如ク 四川、貴州ノ徵募兵ヨリ成ル第八十師モ初メテ北桃園浜附近ニ進出シ来レリ

要之敵軍ハ一時漸次其兵力ヲ第二線配備ニ置キタル様ナリシカ 最近再ヒ其兵力ヲ上海周辺殊ニ大場鎮附近ニ集結シアルカ如シ 蓋シ英米主催ノ九国条約會議ニ関連シ飽迄上海保持ヲ謀リアルモノト判断セラル 自然軍ノ大場鎮附近突破ハ日々困難ヲ加ヘアルハ事實ナレト 自然之ニ由テ生スル功果ハ戰略的ニハ勿論 政略的ニモ一層ノ重要性ヲ増大シアルモノト考ヘラル

◇十月二十日

天氣晴朗温暖後方補給ノ狀況良好ナレトモ 戰線思フ様ニ進展セサルヲ憾ム

此日各師団共攻撃ヲ続行シ 第十三師団ハ三家村ヲ確實ニ占領セルモ尔他ノ戰線大ナル変化ナク 第一百一師団ハ軍砲兵二榴ノ協力ニ依リ膏家柳ノ攻撃ヲ力行セルモ 遂ニ之ヲ奪取スルニ至ラス

龔ニ參謀本部ヨリ派遣セル鈴木中佐偵察ノ結果ハ予ノ從來考ヘタル所ト異ラス 仍テ予ハ同

『飯沼守日記』十月十八日

午後10 D 參謀長ヲ呼ヒ実情ヲ聞クト共ニ「隊長進ムモ部下統カサルコト」ニ部隊カ一旦占領地ナル地点ヲ敵ノ逆襲ニ依リ旧陣地ニ後退スルコト」ニ就キ直接法ニ注意ヲ与ヘ且師団命令ニテ漫然ト両翼隊ニ攻撃続行ヲ命スル方法ヲ採ラス師団ニテ奪取スヘキ地域ヲ定メ堅キ決意ヲ透徹シテ敢行スルコトヲ要求ス

夜鈴木中佐田尻少將杭州湾上陸ニ就キ協議結局甚タ困難(殊ニ常統補給)ナルモ万全ノ準備ヲ為シテ断行セハ実行シ得ヘシ、然レトモ敵ノ野戦軍ヲ捕捉セントスルナラハ寧ロ常熟蘇州ノ線ヲ遮断スル如ク白茆口附近ニ二、三師団ヲ上陸セシムルヲ可トス若シ兩者同時ニ為シ得レハ最モ可ナリ若シ兩者ヲ實施スルモ遲速アリトセハ本流ヲ失ニスルヲ可ト認ムル旨意見ヲ述フ

田尻少將偵察結果ヲ司令官ニ報告 其際司令官ハ三師団ヲ杭州方面ニ使用スルトセハ先ツ一師団ヲ浦東地区ニ上陸セシメ其作戰ヲ若干進捗セシメタル後二師団ヲ金山附近ニ上陸セシムルヲ得策トストノ意見ヲ述ヘラル

『下村定20期中将回想応答録』昭和十四年秋(參謀本部作製)

* 杭州湾上陸作戰について

殿下 杭州湾上陸作戰をやると云ふのは上海の危急を救ふと云ふ意味ですが、それとも当時敵が上海方面軍の前に集つて居るので之を敲いて仕舞ふと云ふ積極的な意志があつたのですか。

下村 上陸附近の敵の主たるものをやつつけて仕舞ふと云ふ意見でありました。

殿下 さう云ふ積極的なものになつたのは当初の上海居留民保護と云ふ考へよりも余程進歩して来たのですか。

下村 はい、さうであります。之からは主作戦場を中支に持つて行くことと云ふ考へでありまして、主義上中支を主作戦場にすると云ふことは此の時からはつきり致しました。

殿下 此の杭州湾上陸の企図されましたのは敵の主力を敲き戦争の終局に持つて行かうと云ふ考へでありましたか。

下村 はい、さうであります。殿下 杭州湾の作戰に着手されたことと云ふことは此の動機からであつたのですか、平時から準備されて

中佐ニ托シ參謀次長ニ対シ今後ノ作戰ニ関スル予ノ私見ヲ申遣スト共ニ 委曲中佐ニ予ノ意中ヲ説明シ當局ニ報告スヘキヲ托ス 其要旨如左

一、軍ノ上海西方戦一段落ニ伴ヒ 方面軍ヲ編成シ少クモ二ヶ軍ヲ新ニ編成スヘキコト 軍ノ作戰目標ハ飽迄南京トス

二、其第一軍ハ現派遣軍ヲ以テ之ニ充テ太湖北方地区ヨリ南京ニ向ヒ作戰ス 尚之レカ為メ一時一ヶ師団ヲ此軍ニ増加シ 重藤支隊ト共々澱浦、白茆河口ニ上陸セシメ常熟ニ向ヒ作戰スルト共ニ太倉ヲ遮断セシム

尔後此軍ヨリ一ヶ或ハ二師団ヲ第二軍ニ転属シ又ハ方面軍ノ直轄トナス

三、第二軍ハ兵力約二師団半トシ 一部(約一師)ヲ以テ黄浦江沿岸浦東地区ニ先ツ上陸セシメ更ニ主力ヲ以テ金山附近ニ上陸セシメ 先ツ松江ニ向ヒ主力ヲ以テ作戰シ上海南方ノ敵ヲ捕捉シ 後主力ヲ以テ太湖南方地区ヨリ南京ニ向ヒ 一部ヲ以テ杭州附近ヲ占領セシム 要スレハ第一軍ヨリ適時一師団(第十三)ヲ一時又ハ永久ニ当軍ニ転属セシムルヲ得

四、軍ノ作戰ヲ十一月初トシ速キヲ可トス 要ハ上海西方決戦ノ直後ニ上陸ヲ実行スルヲ可トス

五、方面軍ノ編成ニハ有力ナル特務機關ヲ属シ 建川中將ヲ長トシ從來ノ宣伝謀略ノ外占領地統治、政略關係ニ亘リ 純然タル戦時ノ体制ヲ以テ 方面軍司令官ノ全權ヲ以テ 海軍、外務、人オモ統一指揮セシムルコト

尚方面軍幕僚トシテ 重藤少將、根本少將、飯村少將、池田、鈴木、和知、白田、永津、岡崎各大佐等ノ充用ヲ希望ス 云々

註

浙江海岸ニ於テ第二軍ノ根拠地ヲ占有スルコトハ 其海岸ノ情况、潮流特ニ冬期ノ季節風ニ鑑ミ多大ノ困難アルヘク 尚野砲師団ヲ浙江地方ニ作戰セシムルコトハ 地形及道路ノ關係上多大ノ困難アルニヨリ 本軍ノ根拠地ハ可成早ク上海ニ之ヲ移スヲ必要トシ 又初メノ時期ニ

於テ余リ大ナル兵力ヲ此方面ニ使用セス 要スレハ作戰進捗ニ伴ヒ第十三師団(山砲)ヲ之ニ転属セシムルヲ有利ト考フ

蓋シ浙江ノ東浙地方ニ從來アリニシ敵軍中ニヶ師団ハ 既ニ上海ニ召致セラレタルヲ以テ近キ將來ニ於ケル東浙地方ノ敵軍ノ兵力ハ 多クモ二三師団ニ過キササルモノト判断セラルレハナリ

別二本間第二部長ニ対シ 現下ノ政略ノ要点ハ飽迄南京政略、南京政府打倒トシ 過早ニ尔後ノ政治工作ヲ彼是論議セサルヲ可トスル旨ノ意見ヲ申遣ス

◇十月二十一日(大場攻撃日ノ決定、第十軍編成)

天氣晴朗温暖益々加フ

各師団ノ戦況大ナル進展ナキモ一皮ツツ逐次敵陣地ヲ抜キツツアリ 即第十三師団ハ新木橋陣地ヲ第九師団ハ談家頭ヲ第三師団ハ張家楼下宅ヲ第一師ハ西部李家橋ヲ奪取セリ 敵ハ此夜全線ニ於テ攻勢ヲ取り 主トシテ蘆藻浜南方ニ主攻撃ヲ行フ計画ナリシ如ク(入手セル敵軍總司令官朱紹良ノ命令ニヨリ明カナルモ) 實際ニ於ケル敵ノ攻撃ハ砲撃ノ外甚タ不徹底ノモノニシテ 我軍ハ之ニ依リテ敵ヲ其陣地外ニ射殺スルノ機会ヲ得タルコトハ幸トス 然レトモ不幸我軍ノ状態ハ此攻撃ヲ追撃シ一挙ニ敵陣ヲ奪取スルノ氣魄ナキヲ遺憾トス 依テ此日軍命令ヲ以テ大場鎮攻撃開始ヲ二十七日ト決定シ 二十四日中ニ各師団ハ予定準備線ニ進出スヘク命令ス

此日參謀本部ヨリ第十軍編成ヲ令セラレタル旨通報アリ 当軍ハ三師団半ヨリナリ浙江沿岸ニ上陸シテ 我派遣軍ノ作戰ヲ容易ナラシムルヲ任トス 之レニテ我軍ハ概ネ予ノ最初ヨリ希望セシ作戰ニ向フコトナレルヲ欣フモ 其実行法ニ就テハ尚意見アルモ詳細ハ尙未詳ナラス

◇十月二十二日(第十軍作戰ニ関スル意見申達)

居つたと云ふ訳ではないのですか。

下村 平時からではありません。極端に申しますと必要の前に目をつぶって無理にやつたのであります。

殿下 実施には非常に困難を予期してやつたのでありますか。

下村 文字通り「断行」と云ふことになったのであります。

* 殿下とあるは竹田宮恒徳王(當時參謀本部支那事變史編纂部勤務・騎兵大尉)、下村定少將は昭和十二年九月二十五日參謀本部第一部長 十三年一月十二日參謀本部附(病氣のため交代)

重藤 千秋 18期 台湾守備隊司令官
根本 博 23期 北支那方面軍附
飯村 穰 21期 陸大研究部主事
池田 俊吉 26期 野戦重砲兵第5聯隊長
鈴木 宗作 24期 教育總監部第二課長
和知 應 26期 歩兵第四聯隊長
白田 寛三 25期 志津飛行学校教官
永津佐比重 23期 歩兵第二聯隊長
岡崎清三郎 26期 支那駐屯歩兵二聯隊長

『飯沼守日記』

十月二十一日
駐日独武官、在上海伊武官ニ司令官会ハルルコトヲ承諾
同十月二十二日

參謀本部公平(匡武31期)砲兵中佐來部 第十軍ニ関スル書類持參、司令官ハ浦東ニ一師団上陸ノ考ヘテ電報セヨト言ハルルモ最早案ヲ改メシムル余地ナキヲ以テ思ヒ止マルル様具申ス
同十月二十三日

58 i 軍旗ハ新木橋ニ対スル敵ノ逆襲ノ際敵ノMG彈(?)ノ為折損、副官戦死、旗手重傷

天氣依然快晴、溫暖尚続ク可尙

昨夜ヨリ重藤支隊及第十一師團并第十三師團正面ニ於テ 相当統一セル敵ノ攻撃アリタルモ 尽ク多大ノ損害ヲ与ヘテ之ヲ撃攘ス 蓋シ此方面ノ攻撃ハ敵ノ真面目ナル反撃ト云フヨリモ 寧口大場方面ニ於ケル攻撃ノ助攻タリシナラン

本攻撃ニ於テ第十三師團第五十八聯(隊)軍旗ニ敵砲彈命中シ其桿ヲ切断セリ未曾有ノ事ナリ 第九、第三、第一百一師團正面ハ反テ敵ノ攻撃緩リ 寧口漸次第一線兵力減少ノ状ニテ著ク 各方面共進出セリ

此日參謀本部(公平)中佐 第十軍作戰ニ関スル命令計画等ヲ持參シ来ル 該計画ニ依レハ 第十軍ハ(第六、第十八、第一百十四師團ヲ基幹トス)金山衛城附近ニ上陸シ(十一月二日ト定ム)上海西南地區ニ作戰シ 我軍ノ作戰ト嚮應シテ敵軍ヲ捕捉セントスルニアリ 其計画ハ頗ル可ナルモ不少凶上ノ計画ナル嫌アリ 蓋シ雲ニ記セシ如ク此方面ノ地形ト海面ノ狀況ニ於テ 斯ル大兵团ヲ予定ノ時日ニ上陸セシメ 速ニ黃浦江ヲ渡リテ上海西南方地區ニ進出セントハ 天候頗ル可良ナル場合ニ於テモ大ナル困難ニシテ 殊ニ目下ノ敵狀及今後予想スル上海附近ニ 於ケル我軍ノ奏功後敵軍一般ノ動搖退却ヲ予想セハ 以テ能ク敵軍ヲ捕捉シ得ルコト頗ル疑ハ シク 尚之ノ為此ル大兵力ヲ此方面ニ必要トセサルモノト思ハル 而カモ今今後冬期ニ向ヒ金山、乍浦附近ヲ以テ 此ル大軍ノ根拠地トシテ其補給ヲ全フセンコトハ頗ル困難ニシテ予ハ深く本 計画ニ遺憾ヲ感ス 而カモ事ノ此ニ至レルハ 參謀本部カ予メ本作戰ニ関シ予ノ意見ヲ求メサ リシ結果ニシテ 從來予ハ中央部ニ於テ此ル企画アルヲ知リ既ニ非公式ニ意見ヲ詳細申遣シタ ルニ 後速ニ既ニ此發令ヲ見タルコト返ヌ返ヌモ遺憾ノ至ナリ 由テ予ハ將來ノ狀勢ニ応シ便 宜本作戰ヲ變更スルヲ有利トスル場合アルヲ予期シ 參謀本部カ更メテ既報予ノ意見ヲ研究ス ルト共ニ 予メ適當ノ措置ヲ講セラレ度旨軍司令官トシテ次長ニ意見ヲ申遣シ 尚詳細(公平)中佐ニ予ノ意ノアル所ヲ述ヘ 急遽東京ニ歸還報告セシムルコトヲ取計ヒタリ

◇十月二十三日

天氣統テ晴朗 今日ハ上陸第二ヶ月ノ記念日ナリ 回顧セハ過去二ヶ月間軍ハ始終常ニ困難 ナル攻撃ヲ力行シテ今日ニ至レリ 第二月以後三ヶ師團ノ増加ヲ得テ勢力頓ニ昂リ 尔後逐次 二敵ヲ庄迫シツツ今ヤ大場、南翔附近ニ巨ル敵陣ニ近ク進出スルヲ得タリ 而シテ大場鎮西方 地域ノ中央突破ノ大勢漸ク成レルヲ以テ 既ニ来二十七日ヲ以テ決戰の攻撃開始ヲ命シ目下着 々其準備線ニ近逼シツツアリ 然ルニ昨日頃ヨリ敵軍稍動搖ノ色アリ 或ハ近ク大場以東ノ敵 兵退却ノコトアルヲ予期セラルルヲ以テ 之ニ応スル為メ軍ノ追撃準備モ亦必要ナリト考ヘ 之レニ応スル研究ヲ命シタリ

各師團ノ狀況

- 一、重藤支隊、永津部隊方面共ニ變化ナシ
 - 二、第十三師團正面ニハ敵軍尚反抗ヲ繰返シ一般ノ陣地ヲ固守シ 師團ハ辛フシテ老陸宅ヲ奪 取シ更ニ孟家宅ニ對スル攻撃ヲ準備中ナリ
 - 三、第九師團ハ此日大ナル敵ノ抵抗ヲ受クルコトナク 夕刻迄ニ小郁公廟、徐家巷ノ線ニ進出 シ更ニ一部隊ハ八房宅ヲ占領セリ
 - 四、第三師團モ同様大ナル敵ノ抵抗ナク 施宅、盛宅、北陳宅ノ線ニ進出シ更ニ一部隊ハ東木 橋ニ進入セリ
 - 五、第一百一師團ハ同様田堵宅、廟前宅ノ線ニ進出セリ
- 此日陸軍省中山少佐帰京ニ付杉山大臣宛書信ヲ托シ 更ニ左ノ要旨ヲ伝言ス
- 一、第十軍ノ作戰計画前記ノ如ク実狀ニ適セサルヲ以テ 將來狀勢ニ應シ之ヲ變更シ得ル様 予メ參謀本部ヲ指導セラレ度コト
 - 二、江南地方作戰ノ目標ハ飽迄南京ト決定シ 諸般ノ計画ヲ之ニ向ヒ準備スルヲ可トスルコト
 - 三、之カ為メ方面軍及二軍ノ編成ヲ必要トシ 殊ニ方面軍ニハ有力ナル特務機關ヲ附シ 宣伝

30部ノ内第5号
第十軍作戰要領案 參謀本部

方針

軍ハ海軍ト協力シテ杭州灣北岸 上陸シナルヘク速カニ上海市 南、西方地區ニ前進シ上海派遣軍 ト共ニ上海周辺ノ敵ヲ掃滅ス

作戰指導

(イ) 第一期

上陸及黃浦江岸ニ向フ前進
上陸予定日十月末又ハ十一月初
上陸予定地金山衛附近
軍ハ第十八師團、第六師團(第 五師團國崎支隊ヲ屬ス)ヲ第一線 トシテ金山衛東西ノ海岸ニ敵前上 陸ヲ行ヒ引続キ第一百十四師團、第 一、第二後備歩兵團及所要ノ軍直 部隊等ヲ上陸セシメ迅速且急襲的 ニ黃浦江ノ線ニ前進ス

第十八師團

金山衛城東方ノ海岸ニ上陸シ 一部ヲ以テ金山衛城ノ東北側ニ 對セシメ主力ヲ以テナルヘク速 カニ松江西南方黃浦江ノ線ニ前 進ス

第六師團(國崎支隊ヲ屬ス)

金山衛城西方ノ海岸ニ上陸シ 國崎支隊ヲ以テ金山衛城西北側 ニ對セシメ第六師團主力ヲ以テ

金山(朱遷)ヲ經テ松江西方地 區ニ前進シ滬杭鉄道ヲ遮斷ス

第一百十四師團

第十八師團ノ後方ヨリ上陸シ 其右側ノ地區ヨリ閔江渡場附近 ニ向ヒ前進ス

狀況ニ依リ有力ナル一部又ハ 主力ヲ以テ浦東地區ニ向ヒ前進 シ上海派遣軍ノ浦東部隊ノ作戰 ニ策應ス

第一、第二後備歩兵團

第六師團ノ後方ヨリ上陸シ其 一團ハ乍浦鎮方面ニ對セシメ他 ノ一團ハ金山衛附近上陸地ニ帶 ノ警備ニ任ヌ

軍直諸部隊

山砲部隊、工兵部隊(渡河) 架橋材料ノ主力等ハ之ヲ夫々師 團ニ増加配屬ス

(ロ) 第二期

黃浦江渡河及上海南、西方ニ向 フ前進

若干ノ準備ヲ整ヘタル後一部ヲ 以テ閔行方面ヨリ主力ヲ以テ松江 西南方面ヨリ黃浦江ヲ渡河シ上海 南、西方地區ニ向ヒ前進シ上海派 遣軍ト戮力シテ上海周辺ノ敵ヲ掃 滅ス

狀況ニ依リ一部ヲ以テ浦東地區 ニ作戰セシム

謀略ノ直接作戦ニ必要ナルモノノ外 占領地治安維持、人民ノ慰撫指導等ニ任セシムルコト
ハ 目下ノ情况上極メテ緊要ニシテ之レカ爲戦時ノ体勢ニ依リ 軍司令官ニ全權ヲ与ヘ外務
海軍等ノ機関オモテ隷屬セシムルヲ要スルコト

四、目下日本ノ政策ハ南京政府打倒ヲ核心トシ 之レ以上尔後ノ善後策ヲ彼此スルハ未タ時機
ニアラス 蓋シ今後ノ善後政策ハ南京政府崩壊後ニ於ケル支那ノ形勢及之ニ伴フ列國ノ態度
等ニ依リ 自ラ之ヲ異ニスヘク今ヨリ之ヲ決定スルコト能ハサルノミナラス 過早ノ時機ニ
於ケル善後政策ノ討究ナトハ 国民今後ノ精神的作用及目下ノ積極的政策ニ悪影響ヲ与ヘ
延テ支那及列國ノ態度ニモ悪結果ヲ招キ 結局時局ヲ困難且ツ長期ニ導クコトナルヘク
特ニ我朝野ノ謹慎ヲ必要トスヘキコト

尚上海地方ヲ國際都市トスヘキ様ナ意見ハ 目下及將來共ニ慎ムヘキ言ニシテ 予ハ本事
件終局ノ奏功ノ爲メニハ飽迄我日本ノ眞精神ニ基キ 所謂我等ノ大亞細亞主義ニヨリ 支那
人ノ排外思想(排欧米)ヲ全般ノ二利用スルノ考慮ヲ有利トスヘキコト 云々

◇十月二十四日(敵軍ノ退却、追撃命令下付)

昨夜半ヨリ敵第一線減兵ノ報アリ 我軍第九師團ノ斥候ハ走馬塘ヲ渡レルカ敵兵退却ノ状ア
リト報ス 此クテ此日予ハ戰闘司令処ヲ張家宅(劉家行東南約二千米)ニ進メ 軍ノ攻撃開始
ヲ令シ更ニ森嚴ナル訓示ヲ各師團長ニ与フルヲ予定ナリシカ 敵軍退却ト知り予定ヲ變更シ 朝
九時電話ヲ以テ各師團ニ追撃命令ヲ与ヘ(午後筆記シタル完全ナルモノヲ下ス)又從來ノ計画
ヲ變更シ 第十三師團ハ依然当面ノ敵ヲ攻撃シテ南翔鎮北方ニ進出シ 敵ノ退路ヲ遮断セシム
ルコトトシ 第十一師團ノ主力(一旅欠)ヲ陳家行附近ニ集結シ 機ヲ見テ南方又ハ西南(南
翔方向)ニ突進セシムルコトニ改メタリ 蓋シ最早走馬塘ノ突破ニ大ナル困難ナキト 敵ヲ捕
獲スル爲メニハ同時ニ南翔ヲ攻撃スルヲ有利ナリト認メタレハナリ

各師團ノ情况

- 一、重藤支隊ハ依然当面ノ敵ヲ牽制ス
- 二、永津部隊同断

三、第十三師團方面ハ敵兵頑強ニ陣地ヲ固守シ 昨夜モ時々銃砲火ニ依ル反抗ヲ示セシモ 師
團ハ能ク遂ニ孟家宅ヲ占領シ更ニ全面ニ巨リ攻撃続行中

四、第十一師團ノ43iハ夕刻陳家行及其南方地区ヲ第九師團ノ部隊ト交代シ 師團ノ主力ハ南
方ニ向ヒ転出中

五、第九師團ハ走馬塘ノ線ニ進出シ 其一部ハ北張村ニ於テクリークヲ渡河セリ

六、第三師團ハ大体走馬塘ノ線ニ近ク進出セシモ未タ之ヲ渡ルヲ得ス 其左翼ハ洛河橋宅、南
陳宅ノ線ニ進出ス

七、第一百師團ハ殆ト敵ノ抵抗ナク洪家橋、沈家巷ノ線ニ進出ス

八、谷川支隊、兵站部隊モ逐次当面ノ敵ヲ圧迫シツツアリ

午后ニ至ルモ師團ノ追撃思フニ任セサルニ依リ 予ハ參謀長ヲ伴ヒ午後三時第三師團長ノ許
ニ至リ 第三、第九、第十三師團長ヲ招致シ追撃ヲ督励スルト共ニ 軍追撃計画變更ノ意ヲ説
明ス 各師團長能ク予ノ意ヲ諒スルモ何分長時日ノ陣地戦ニ慣レタル各部隊ノ機動力ヲ失ヒア
ルト 地形殊ニ走馬塘ノ障碍ノ爲メ果敢ナル追撃ヲ実行シ得サルハ遺憾ナリ 尚第九師團ノ如
キハ未タ戦備補充ヲ果サス 現在各歩兵大隊銃数二三百ノ有様ニ付 本日夕迄ニ其補充ヲ了ヘ
テ追撃ヲ敢行スヘシト云 予無理モナキ次第諦ム

◇十月二十五日

天気晴朗

各師團ハ統テ敵ヲ追撃中ナルモ 走馬塘南岸ニアル敵ノ收容部隊ハ既存ノ陣地ニ於テ抵抗シ
第九、第三師團方面ノ追撃意ノ如クナラス

第一百師團ハ近ク大場鎮ノ北方ニ敵ヲ追撃セルモ 未タ大場鎮ヲ占領スルニ至ラス

(イ) 状況ニ依リ有力ナル一部隊ヲ
以テ乍浦鎮ヲ攻略シテ揚陸点ヲ
確保ス

「上村利道參謀副長日記」

十月二十四日 快晴

午前八時追撃命令ヲ出ス
昨日來9Dノ進出、101Dノ進出
ハ敵ノ退却ヲ指嚇スルモノアリ果
然本朝七時半昨夜半、9D午後ハ
走馬塘クリークヲ超進出セルカ
敵居ラスト 是等ノ情報ニ就テハ
昨夜來第一課第二課9Dノ間ニ彼
是交渉アリシカ如キモ全然承知セ
ス 結局追撃命令ヲ下達セラル
飛行機報ニヨルハ南方ニ退却スル
部隊多シト 愈々敵ノ退却ヲ確実
ト認ム 9D、13D、101D共ニ
中々進出セス 軍司令官13D、9
D、3D長ヲ集メ意圖ヲ示シ訓示
アリ 此間予ハ9D司令部ニ至リ
拍車ヲ懸ク 元ヨリ大ニ力メアル
モ予期外ノコトニテ部隊中々動カ
サルカ如ク(略)

「飯沼守日記」

十月二十五日

一〇・三〇獨武官オットー來
部、司令官ト直接伝語ニテ会話
本日ノ内地新聞ニハ敵追撃ノコ
トカ大々的ニ出テ居リ総長殿下ヨ
リ祝電ヲ賜リシ旨記載シアルモ未
着 北支方面軍司令官ヨリ祝電來
ル

オットー Otto, Eugen 一八八
九(一九七六) 駐日ドイツ大使
館附武官 石原莞爾少將の意を
受けた參謀本部々員馬奈木敬信
28期中佐と共に十月十七日東京
出發 二十六日(日)朝、トラウト
マン Trautman, Osker P. 駐
華ドイツ大使と日中和平につい
て上海キャセイ・ホテルで三日
にわたり会談した(馬奈木中佐
はドイツ駐在当時、トラウトマ
ンと交友関係あり)。
オットーはのち駐日大使とな
り日独伊三国同盟締結を推進し
たが、ゾルゲ事件にかわり一
九四二年解任され、中国に渡っ
た。

第十三師団ノ攻撃ハ遅タトシテ進捗セス 蓋シ敵軍此方面ニ漸次砲兵ヲ増加シ死力ヲ竭シテ大場方面ノ退却ヲ掩護シツツアルモノノ如シ

依テ軍ハ第十一師団ノ全力(永津部隊ヲ除ク)ヲ以テ第九師団ノ右側ニ進出シ 其側方ヲ掩護スルト共ニ第十三師団ト連繫シテ南翔ヲ攻撃セシムヘク区署シ 該師団ハ夕刻迄ニ陳家行ヨリ頭家宅ヲ經テ僅家宅東方ニ巨ル線ニ展開シ攻撃ヲ準備中ナリ

兵站部隊ハ此日前面ノ敵ヲ追撃シツツ尔後廟行鎮ヲ占領シ 谷川支隊モ之ニ連リ江灣鎮陣地ヲ其南北ヨリ包圍攻撃中ナリ

重藤支隊方面変化ナシ

◇十月二十六日

天氣晴朗ナレトモ漸次南風トナリツツアリ 今後ノ天候疑ハシ

各師団ハ敵ヲ追撃シテ前進シ 第九師団、第三師団ハ概ネ敵ノ收容陣地ヲ突破シテ 洛陽橋―張家橋、胡宅、王家宅ノ線ニ進出シ 第十一師団ハ夕刻迄ニ大場鎮ヲ占領シテ旭旗高ク街上ニ翻ル 尚兵站部隊、谷川支隊モ敵ヲ追撃シテ概ネ江灣―大場道ノ線ニ進出シ 又南方ヨリ江灣鎮ニ進入セリ

重藤支隊方面変化ナク 第十三、第十一師団方面ハ敵ノ頑強ナル防禦ノ為戦況余リ進展セス 蓋シ此昨夜敵ハ大場、江灣鎮ヨリ最後ノ退却ヲ始メ 又閘北ノ敵ハ此夜半ヨリ退却ニ就キシカ如シ

各師団ハ其砲兵ノ大部ヲ概ネ走馬塘ノ線ニ進出セシメ 明日ノ追撃ヲ準備ス

思(フ)ニ過去一ヶ月有余ノ惡戦苦闘此ニ酬ヒラレ 遂ニ大場攻略ノ目的ヲ達シ概ネ上海西北地区ヲ遮断清掃シ得タルハ欣懐之ニ過キス 蓋シ偏ニ皇威ト將兵ノ忠烈ニ因ルモノニテ感激無量ナリ

尚今後一層追撃ヲ敢行シテ 可成多クノ残兵ヲ捕捉スルコト緊要ナルモ 地形ト残兵ニ妨ケ

ラレ予期ノ如ク其目的ヲ達シ能ハサルハ遺憾ノ極ナリ

惡戦力闘三閘月 包夷超墨斃不已

神武敵陣旭旗翻 欲餞忠靈幽瞑裏

此日新二方面軍參謀副長ニ内定セル 元參謀本部第二課長武藤大佐及方面軍要員数名來着シ 方面軍及第十軍作戰ニ関スル中央部ノ意嚮及計画ノ進捗ヲ聴ク 大体予ノ意ニ滿タサルコト少カラサルモ既往ハ詮ナク何トカ善後策ヲ講スルノ外ナク 今後狀勢ノ變化ニ伴ヒ処決スヘク只管考慮ヲ運ラシアリ 尚方面軍人事ニ就テハ方面軍ノ重要性ト權威ノ為メ 現内定人(事)ヲ變更スルノ必要ヲ感シ 大臣、次長ニ書信ヲ認メ明日ノ飛行便ニ托送スルコトトセリ

◇十月二十七日

各師団ハ追撃ヲ続行ス

一、第九師団ハ右翼隊ヲ以テ江橋鎮東方侯宅附近ニ 左翼隊ヲ以テ其東南方大場鎮―北新徑道及蔡家橋附近ニ進出ス

二、第三師団ハ右翼隊ヲ以テ真茹南方約二キ蔡家術附近ニ 左翼隊ヲ以テ蘇州河畔墓巷術附近ニ進出ス

三、第十一師団ハ兵力ヲ彭浦鎮、唐家宅附近ニ集結シ 谷川支隊ヲ併セ指揮シ大場東方江灣鎮附近ヲ掃蕩ス

四、陸戰隊ハ未明ヨリ追撃ニ移リ閘北一帶ヲ占領ス

五、第十一師団ハ其左翼隊ヲ以テ李家門、西顧橋ノ線ニ迂回進出シ西方ニ向ヒ攻撃ヲ準備ス

六、第十三師団ノ攻撃ハ遅タトシテ進マヌ

七、重藤、永津部隊方面変化ナシ

軍ハ昨日ヨリ蘆藻浜ヲ以テ補給路トシテ主トシテ糧食ノ前送ヲ始メ 尚唐橋附近ヨリ死傷者

十月二十六日 陸海軍中央統帥部、陸海軍航空協定(中支方面使用兵力、陸軍四十五機・海軍二百三十三機)。

第十軍の戦闘序列を令し、杭州灣北岸上陸の大命発令。支那方面艦隊新設(第三・第四艦隊で編成、司令長官・長谷川清第三艦隊司令長官兼務)。

「上村利道參謀副長日記」
十月二十七日 曇 南風 気温上ル

追撃戦、蘇州河畔ニ進出ス
追撃戦順調ニ進捗セルモ敵ハ既ニ本天明前退却シテ獲物少シ
流石ニ退却ハ見事ナモノナリ